川柳杨



No. 809

平成六年度 二賞発表 十月号

日川協加盟

平成六年度 同 総会と

賞表彰

交通便 ところ き 地下鉄谷町線 大阪市立阿倍野市民学習センター 10月2日 のベルタ3階 0 阿倍野 午前9時半開場 駅7番出口すぐ

同人総会 議事

電話

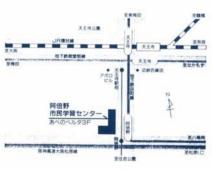
06

634

7951

①会計報告②会計

前10時~正午



の他

)総会には可能な限

り同人の方はご出

席ください。

報告④役員改選⑤そ 監查報告③事業経過

川柳ねやがわ20周年記念大会

投 会

80円切手5枚同封・事務局 1000円(入選作品集・記念品

「卯月」

席

題な

出句締切午後1時

美

事務局 会費3000円・会場

572

◎投句・懇親会とも前日まで受付

寝屋川 JII 市春日町9

柳 ね から

本社句会午後2時

意見をご提出願い の場合は文書でご

> 17 寝屋川市民川柳大会

٢ 第 寝屋川市立総合センター4 11月3日 **未** 祝日 正午開 F

兼題と選者 乗場から総合センター前下車すぐ) (各題2句

京阪寝屋川市駅から京阪バス西①

選

恵美子 選 選

いさむ 選

薫 風

挨拶人間に

西尾

栞

年齢の故か、死期が近いのか、この頃 年齢の故か、死期が近いのか、この頃 クーを三階でおりると、受付の二人に感 ターを三階でおりると、受付の二人に感 か見える。今日もご無事で生駒から御出 が見える。今日もご無事で生駒から御出 が見える。今日もご無事で生駒から御出 が見える。今日もご無事で生駒から御出 が見える。今日もご無事で生駒から御出 が見える。今日もご無事で生駒から御出 が見える。今日もご無事で生駒から御出 がしているが、この頃

会が月曜日にあたると、大路美幸さんの

見知りの方に手をあげて目礼をする。例 見知りの方に手をあげて目礼をする。例 見知りの方に手をあげて目礼をする。例 もの席へ座ると、紫香さんと逢う。後ろもの席へ座ると、紫香さんと逢う。後ろらからともなくかけよって挨拶する。後ろの席では〆女さんがニッと笑って挨拶する。私は立って後方の席を眺めて、顔する。私は立って後方の席を眺めて、顔

「あ」は、相手の心に関心を示す、相手にするための、重要な頭文字でもある。 例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、一ヶる方もある。例会は道場であるが、、集切時間が迫る

引きついで句作しておられる。傷痍軍人

雑誌の社友で楊井二南氏と同窓)の名を

肩にベルトで吊っておられる。その不自

で片足が義足であり、この暑いのに腰と

るく大きな声で朝晩の挨拶をしつけてい 拶を実行しています。一日のけじめです 好感をもつことが出来ます。私の家では ある。知らない人にでも気楽に挨拶でき である。心のこもった言葉をもらうと、 から、孫、曽孫が時々忘れるときは、明 朝、夫婦・親子でも先に見付けた方から ちんと出来れば、それだけ、存在を認め です。目礼でも会釈でも、会うごとにき ていくのがわかる。「つ」は続けること れば、自然に自分が前向きな人間になっ に挨拶する方が気が楽である。積極的で は挨拶は先にするということである。先 人は必ず心にひびくものである。「さ」 い挨拶の言葉に心をこめようということ の存在を認める。「い」は一言入魂。 「お早うさん」と夜の「おやすみ」の挨

よろしくお願い致します。妄言多謝。礼儀あり」、まず人生は挨拶から。皆さん、礼儀あり」、まず人生は挨拶から。皆さん、

出席される。まことに見上げたものだ。

由なお身体で生駒から電車を乗りついで



Ш 柳 塔 十月号 目 次 題字・中島生々庵/表紙・直原玉青

自選集 川柳塔 川柳の群像 同人吟) 東 小 西 野 大 栞 八 選 子 : 44 2 4 40

14

頭言

挨拶人間に不幸なし

西

尾

栞

1

憶しか残っていない。 かされたものだから、 通り、

寄りの駅から随分遠く、峠を越え、田舎道を れて墓参をしたことはあるが、その時は、

何処まで行くのかと思うほど歩

遠い所だったという記

の先祖の墓を探しに出掛けたことがある。

十年程前になるでしょうか、夫と二人で私

私が十二、三歳の頃、

一度だけ父に連れら

同人吟..... 水煙抄..... 黒 吉 奥 JII 田 田 あ 紫 3 ず 香 子 選 き : : 71 50 48

水煙抄

■古川柳

柳

籠裏二篇研究

苘

八

木千 内

代 笑

選 選

> : :

80

河

天

76

72

平成六年度

路郎賞

JII

柳塔賞

河系 香の花

秀句鑑賞

をしていたその人が「その事ならうちのおじ 墓地の事ならお年寄りに聞くのが早道と思い、 麓の山里に入って目当ての在所に着いたが、 寄って戸籍謄本を出してもらうと、 ひっそりとした過疎の村である。役場に立ち 風習がある。和歌山県伊都郡かつらき町志賀。 土地では、自分の持ち山の一廓に墓地を造る 見付けられるだろうかと不安もあったが、 る所だが、果して山の中にある個人の墓地 んに聞いてみることにした。 道路脇の畑でさつま芋を掘っているおばあさ での名前を知ることが出来た。車は高野山 まり期待をせずに出掛けることにした。この 今ではよい道路が出来て、車なら楽に行け 始めは不審な顔 四代前ま

46

14

縁

小 出

智

子

| - | 1 しっかりと食べ湖を涸らさない | 人 | 座右の句 | | ■編集後記 | 十月各地句会案内 | 柳界展望 | 九月本社句会 | ■エッセー「村の鍛治屋」から | ■句会だより 東大阪市川柳同好会 | 各地柳壇(佳句地十選/川端一歩) | 大空のこころ (46) | 寺尾俊平・中原諷 | 記念句集「川柳塔」を読んで | 初歩教室「探 す」 | 「なるほど」 | 一路集「古 い」 | 「 筒 」 |
|----|------------------|----------|------|---|-------|----------|------|--------|----------------|------------------|------------------|-------------|----------|---------------|-----------|--------|----------|-------|
| 1. | 榎 | | A | | | | | | · 斉 | 片 | | 橘 | 八人 | | 吉 | 堀 | 金 | 岡 |
| | 原 | (薫 | 4 | 7 | | | | | 藤 | 岡 | | 高 | 西 | | 岡 | 端一 | 山夕 | 岡井やすお |
| T | 公公 | | | | | | | | | 湖 | i | 薫 | 出楓 | | 美 | 三男 | チ | すぉ |
| 15 | | 風 | | M | | | į | | 劦 | 風 | | 風 | 楽 | | 房 | 選 | 選 | 選 |
| 11 | 子 | | - 1 | | i | į | į | į | : | : | : | : | | | : | : | : | : |
| | A | A | | 1 | 114 | 113 | 112 | 106 | 105 | 104 | 92 | 91 | 86 | | 84 | 83 | 82 | 82 |

激が込み上げて、暫らくはとめどなくこぼれ いるのかと思うと、 私が血を受け継いだ人達がみな此処に眠って 傾いたりしながら並んでいる。数えてみると どの墓地が見えた。肩を寄せ合うように少し 木立ちを縫って登ると、程なく八畳の部屋ほ が踏み固めたと思われる細い道を辿り、 墓地へ案内してくれた。 落ちる涙をどうすることも出来なかった。 人の名が刻まれて、先祖の墓に間違いはない。 一十基ある。墓石の裏側を見ると謄本にある 元治元年、 村道からすぐS字の急な山道になり、 喜永三年、 言い知れぬ懐かしさと感 天保六年など判るが

の導きとしか思えないことであった。なかった。この先祖との出会いは、

それ以前のものは風化して、文字は読み取れ

全くの仏

- 3 -



根県 乃 村 早 苗

島

横浜 市 菱 \mathbb{H}

秋桜 ワン すでに秋い

百

0

吐息を見せて咲き

グフル

ワ

インに染まる富

士

額

釈迦

0

声と会話が

続く絵

ロウ

y

7

一草に滲ん

だ帽子天に干す

七年の恋とかお仲人たのまれ

のち見つめる昼

かれる

ニュート

ンを信じ

て宇宙船戻る

の番にされ

葬

式

に出なけりゃ次

留守電

へほっとしながら詫

びをい

n

の窓から三十五度の風

台風も歓迎します水不足

昨

年

祈祷が効い

てきた日

照

ŋ

秋

白熊が抱

満

竹光で斬られた傷がまた痛

てくる

のみくじをひ

12 て油

断

す

3

風邪ぐすりくれぬお医者を信じよう かかる世は蟹歩きでも学ぼうか かすみ草の主張がこわくなっ

お

んと呼

びたい女減ってきた

松原 市 小 池 しげお

をよく間 夜 妻の 違う人 ホクロを見付けたり 0 靴が あ

熱帯

務さん残してみんな盆休み

U

まことらし 8 奴 してやられ 何処 Vi にでもあ 嘘を聞い たり 黒田 る話 てるわら する 節

鳥 取

県

新

家

完

司

塀を取 鈴の音 腕 の届 り払うと覗かなくなっ かい 18 く範 チンコ台 囲を飲み歩 で腐 0 3 7 た 13 3

10

10

剃髪をすればさっぱりするのだが 元気そうな人がボー いた氷はすぐ溶ける

ルを蹴 っている 大阪

市 西

出

楓

楽

- 4

尾

西

栞

選

| うなずいた数だけ損をしたようで まどろみの中で女が手を握り 愚直なホタルで闇を一層深くする 愚すにすべしと遺言には書こう 立秋というのはジョークかも知れぬ サードイーも歌詞も哀しき軍歌集 だれたらあかんあかんとまた忘れ | 語尾少し濁しあしたの風を待つ しばらくは妻と二人の夏休み しばらくは妻と二人の夏休み 世日市市 自分史の余白に置いてある踏絵 | 一日一個 梅干し食べておく暑さ を心をしてる無臭の貼り薬 食欲が無いのにのぞく冷蔵庫 これたい人が顔出す熱帯夜 「カセンチで揉めるブロック積み直し 竹原市 では、 には、 では、 には、 では、 には、 には、 | 得こしをつつく男と飲むビールすっきりとしたい酷暑のところてん和歌山市 |
|---|--|---|--|
| 田 | 林 | 小 | 福 |
| 中 | 野 | 島 | 本 |
| Œ | 甦 | 蘭 | 英 |
| 坊 | 光 | 幸 | 子 |
| ひき多の命刊中のカフトリ うるさきぞ世間見下ろしビアガーデン うるさきぞ世間見下ろしビアガーデン 年寄の相場でお布施包んどく 炎熱へ脳の襞まで煮崩れる 炎熱へ脳の襞まで煮崩れる といの耳塞いで馬鹿になっておく では深サインカーブを曲尺で描く | 在のその大きさに日々気づき 在のその大きさに日々気づき けたんかな好きだ好きだと言い出した けたんかな好きだ好きだと言い出した える余地を残して酒を酌む える余地を残して酒を酌む | () 章 を も ? で し ? に ? に ? で ! ? で ! ? に ? に ? で ! ? に ? で ! で ! で ! で ! で ! で ! で ! で ! で ! で | 男の明を切なくしてはペンの耳覗かねばよかった。まさかが目の前にいった。 まさかが目の前に |
| 711 | 下 | 正 | 12 |
| 侃流 | 下愛 | 正 千 | 杏 |

| ビール飲む鬼も仏もみんな夏血圧に悪い話がおもしろい月でなどき肝心なものがないクーポンの厚さの中にあるロマンスタミナがいっぱい匂うガード下 | 夫にい | をできますとうして記載したたかに生きねば折れる白い杖 「個負けるもんかと負けている暑さ 「の夏の入道雲は頼りない 「松江市 舟 木 与根 一 「の夏の入道雲は頼りない 「松江市 舟 木 与根 一 「お過ぎて地下足袋などを買い替える | 語名でも敵弾の来ぬ安堵して とい声捨てない妻や子に引かれ とい声捨てない妻や子に引かれ のまぶしさ戦盲もう一度 は、江 芳 子 をいかちがだんだん愚図になる恐さ は、江 芳 子 | のジョッキも楽し揚げ花火 島根県 堀 江 正 朗 |
|---|---|---|--|--------------------------|
| で表示に美人ひとりも出て来ない が終えて茶の間で見つけたその答え が終えて茶の間で見つけたその答え が終えて茶の間で見つけたその答え が終えて茶の間で見つけたその答え があちゃんになったら童話書く予定 | 悪春期のカニこだわりの爪をとぐ 善人の仮面で死ぬと善人で 気の許せぬ奴と向うもそう思い | 金婚式老人クラブから指図金婚式老人クラブから指図名前だけ伏せておきます差し障り名前だけ伏せておきます差し障り方言のきれいな宿の大女将方言のきれいな宿の大女将 | 定別がまた一つ増えて夏きびし 足一本ぐらいとクモはおいて逃げ 足一本ぐらいとクモはおいて逃げ 来客も電話も金の要る話 おくれ毛の色気パーマをきらうひと おくれ毛の色気パーマをきらうひと ボランティア 妻七十の坂を越え | 余命わずか心を満たすものを追う |
| の奥で読みなおしが見つけたその答えが見つけたその答え | をとく | 手でする治市 | さえて夏きびし と | 市 |
| ら童話書く予定で読みなおして水不足 | をとぐ奈良県田 | 手です 手です 今治市 矢 | 14 | 市高 |
| ら童話書く予定で読みなおして水不足 | をとく | 手でする治市 | 夏きびし 夏きびし が 本 忠 をきらうひと を | 市 |

| 病院と縁の切れない歳となり焼きとりの匂(男の気がかわり喜怒哀楽本堂涼し盆に座す | 月夏)見る121~ 年 あの時は死ぬ気八月十五日 奈良市 宮 口 笛 生 | 待ち合わせ何でもないと言い聞かすふるさとにまだ初恋が生きているライバルにくやしいけれど励まされ苦い夏 軍歌の過去に突き当り | 戦友偲び夾竹桃が哭いている 藤井寺市 吉 岡 美 房 | だ横になる | 柳井市 弘 津 柳 慶飲みこめぬ意見みぞおち痛くなるゆっくりブランコ 母のおなかにいるような車窓は秋 亡母に似た人座ってる | 西宮市 奥 田 みつ子 |
|---|---|---|----------------------------|---------------------------------------|--|-------------|
| 病窓にひとりで送る大文字夏の雲。術後の顔のきょうは良き病人の気配りかなし弟よ | ご レカー 瓦の によっとし 分解制 一杯のビールに生きるちから大 尼崎市 春 城 年 代 | すだれ吊る家に歴史がひそんでる クーラーの滴 浮世の汗だろう 世話好きがどうにもならぬ街炎暑 | 修養が足りぬ暑さについ愚痴が 尼崎市 春 城 武庫坊 | · · · · · · · · · · · · · · · · · · · | を包む言い訳などせずに 真心を包む言い訳などせずに 真心を包む言い訳などせずに が行かぬ かしだけ法を犯して山を越す | 倉敷市 小 野 克 枝 |

| 百歳の微笑はモナリザよりきれい八十を過ぎれば余生か冷奴、八十を過ぎれば余生か冷奴を響を水に流して共に老い | 真正面に太陽を見た病みあがり 日照権摑みそこねた示談金 | 針治療受けて初老の仲間入りそれだけの人だと思う丸木橋青春のシンボルが出来夏最中 寝屋川市 稲 | 1 3 | 大阪市 津東町の木は耐えている水不足 裏町の木は耐えている水不足 裏町のおろかさ責める夏砂漠 | 八尾市 宮 |
|---|--------------------------------|--|--|--|-------|
| | 田 | 葉 | | 守 | 西 |
| | 俊 | 冬 | | 柳 | 弥 |
| | 子 | 葉 | | 伸 | 生 |
| 掃除機へ足もチョイチョイ手伝わせホッペも鼻も納豆食べているひとり国言葉に出会うて握手したくなり国言が出てきて盃軽うなり | 酸欠の街で谺が還らないどうしよう重ねた嘘の後 | 取り急ぎと書いて逃げ道開けてそれはそれで幸せだろう氷柱花盆灯籠くるくる亡父の亡母の声羽曳 | 不精ひげ生やすほどの不精 開米よ今年豊年満作じゃ 開米よ今年豊年満作じゃ を上げをした日に炊事洗濯 | 年寄りの元気すかさず年を聞今時の米寿左程に目立たない身白む話 相手を選ばないのではない。 | |
| | 阪市 | の道開けておくの立母の声の亡母の声の立母の声の方 | (なりで読書する | (を利く) で で で で で が な い が も が る い も も も も も も も も も も も も も も も も も も | 堺市 |
| | 阪 | お野 | 不精者る | 仙台市 | |
| | 阪市 | おくず市 | 不精者 る | 仙台市 | 市 |
| | 阪市 本 | おずる | 不精者 る | 仙台市 | 市楊 |

| 羽曳野市 榎 | 本 | 吐 | 来 | 今治市 | 野 | 村 | 京 |
|--------------------|---|---|---|------------------|---|---|---|
| 不景気他所にリゾートハットよく喋る | | | | 大切な母へ火加減水加減 | | | |
| 友情が軍歌と共に甦り | | | | 表札は褪せて夫婦の楽天家 | | | |
| 二次会へ聞き役になる肚を決め | | | | 芋の花ポテトチップの話など | | | |
| 大器晩成モットーにして蛙の子 | | | | 美人には真っ白がよいバスタオル | | | |
| 万歩計 婦唱夫随の陽が昇る | | | | 逢えたらいいねコスモスの咲く寺で | | | |
| 松山市 白 | 石 | 春 | 嶺 | 砂川市 | 大 | 橋 | 政 |
| 通訳がいる方言に会う飯場 | | | | 病んでいる手に同情を握らせる | | | |
| 教会の屋根満月が滑りそう | | | | 腕組んで歩く来世も夫婦なら | | | |
| 真相に迫れば返り血を浴びる | | | | 手のひらにさよなら一つ握らせる | | | |
| 岬まで夕陽に逢いに行くマニア | | | | 同じ目の高さに敵を意識する | | | |
| 表彰を以下同文と言う手抜き | | | | 裏切れなかった男と酒をのむ | | | |
| 加古川市 吐 | 田 | 公 | _ | 弘前市 | 蒔 | 苗 | 果 |
| 色あせて来たが味ある夫婦箸 | | | | 麦藁帽爺さんに似合う中国製 | | | |
| あじさいの変化を期待する夫 | | | | 久し振り雷様も家族連れ | | | |
| 趣味までが似て来たデュエット夫婦です | | | | 梵鐘が告げるさわやか過疎の昼 | | | |
| 呆け防止ですと鈎針動きづめ | | | | 浴衣の胸 うちわの風に落着かせ | | | |
| 孫のいる国へとこころ飛んでいる | | | | お昼寝は柱時計のお膝元 | | | |
| 寝屋川市 江 | П | | 度 | 弘前市 | 村 | 田 | 善 |
| ジュクじゅく塾 蟬増えすぎたなと思う | | | | 戦後史の終らぬ島が北に在る | | | |
| 何くそとクーラー唸っているラッシュ | | | | 餌撒いて撒いても釣れぬ北の島 | | | |
| 駅前の改装 蟬の子の悲劇 | | | | 一坪の庭それなりに四季の詩 | | | |
| 線香代りに煙草たてとく父の墓 | | | | 年輪を刻むと愛も深くなる | | | |
| お茶席の饅頭うまいはずがない | | | | モナリザの微笑の涙見てしまう | | | |

良

子

林

保

| 泰然自若臍は死ぬまで座ってる面壁九年ダルマの臍の丸いこと一筆啓上 二黒土星に夏の雲 にまれる が揺れる がが揺れる | う をぬ な | びゆく蝶に入る薪 | 戸の底いにある。一ラーがの差はシーカーがのがある。 | |
|---|------------------------------|---|--|-----|
| _ | * | 小 | 佐 | 肥 |
| 戸 | i | 寺 | 治 | 後 |
| "," | | 花 | 千 加 子 | 和香子 |
| ネ | | 峯 | 学 | 字 |
| 蟷螂の斧だとオノも若き日の読書は貯金若過ぎる遺影の眉の中凡を愛する父の竹平凡を愛する父の竹本といいて氷河 | 喉仏ごくりと鳴っちいけど寝付いて | 風和み人丸 洗濯板へ嫉 大型板へ嫉 大型を 大型を 大型を 大型を 大型を 大型を 大型を 大型を 大型を 大型を | 窓開けて寝りの類 | |
| とオノも知っている 書は貯金かもしれぬ る父の竹箒 いて氷河期乗り越える | (来る子と出 (来る子と出 た岩清水 | 分からぬままにおさめらの粉を浴びる男傘妬で揉んだ紅の跡好を浴びる男傘 | りの類杖やがて如来様 を人に言わせて聞き上手 を人に言わせて聞き上手 が一粒ついた薬指 が一粒ついた薬指 | 弘前市 |
| 知っている のでたる がもしれぬ はえる は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 | にの挑戦受けてやる 八月十五日 でおりてやる | る天の男に | い頃の夢 い頃の夢 弘前 | 前 |
| 知っている 朝乗り越える 引がもしれぬ 弘前市 | に 八月十五日 八月十五日 大岩清水 | る 天風呂 の跡 弘前市 中 | で加来様 ではないにしろ が頃の夢 弘前市 | 前市 |
| 知っている 新でたる 期乗り越える 現乗り越える | た岩清水 八月十五日 で挑戦受けてやる | る 天風呂 の跡 の跡 の跡 の跡 のい のい のい のい のい のい のい のい のい のい | で開き上手 で開き上手 い頃の夢 弘前市 岡 | 前市浅 |

| わかってて騙されてやる愛もある | 長生きをしたおかげですいい出合い | 帰省した若者燃える夏祭り | 御見舞いに行って患者に励まされ | 期待したようにいかないダイエット | 十和田市 | 大根の葉っぱと虫も知っていた | 先生の庭に花火をしに行こう | 紫陽花の藍に引かれて立つ岬 | 出稼ぎの父にFAX通信簿 | 宇宙から飢餓の子供が見えますか | 五所川原市 | 盆栽の松の怨念観てかえる | ししおどし澄んで死後の世考える | むびょうそくさい畦道の立ち話 | 世の中に愛想つかしをする花火 | 人間の甘さが積もる下水溝 | 黒石市 | 錆止めになりそう酒は欠かさない | 底無しの顔でビールの栓を抜く | 回診をそれとなく待つ薄化粧 | 日陰だけ選んで歩く万歩計 | お化粧がのらず慌てる腕時計 | 黒石市 |
|-----------------|------------------|---------------|-----------------|------------------|---------|----------------|---------------|---------------|----------------|-----------------|-------------|--------------|----------------------|-----------------|------------------|---------------|-------------|-----------------|----------------|-----------------|----------------|-----------------|---------------|
| | | | | | 阿 | | | | | | 斉 | | | | | | 千 | | | | | | 相 |
| | | | | | 部 | | | | | | 藤 | | | | | | 葉 | | | | | | 馬 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | 風 | | | | | | \rightarrow |
| | | | | | 進 | | | | | | 劦 | | | | | | 樹 | | | | | | 花 |
| 生涯をかけ心打つ祖母の実 | 物置に残るは父の肥柄杓 | 歳月を数え日に日に疎くなる | 盆墓参妻の留守居の冷や奴 | いごっそう言われ己を悔まない | 高知市北川竹萌 | | 妻帰る息子も戻る灯がともる | 台本はあと一章の人生譜 | 結局はあのひとも逝くるす電話 | 罪深きわれに添いたし妻の秋 | 高知県 小 澤 幸 泉 | | ひょっとするとひょっとするかも知れないぞ | その先は言うなと肩を抱いてくれ | 死ぬ時に愛しているよと言うつもり | 夫婦にはなれない人と遠花火 | 高知県 赤 川 菊 野 | i | 神様の怠け不美人まで造り | 眼が合って闘志と火花混じり合い | 嘘つきの顔まともには気の毒で | 眼が嘘と言っているのによく喋り | 八戸市 島 田 昭 治 |

| た知り | (実施)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)(大学)<th>大地蔵 膝の丸さへ青蛙 一大地蔵 膝の丸さへ青蛙 おれている心で夜汽車の窓を見る 勝組のけた夫婦に回る雪月花</th><th>てダに痴算</th><th></th> | 大地蔵 膝の丸さへ青蛙 一大地蔵 膝の丸さへ青蛙 おれている心で夜汽車の窓を見る 勝組のけた夫婦に回る雪月花 | てダに痴算 | |
|--|--|--|---|-----|
| ţ | 坪 | 人 | 門 | 岸 |
| E | 田 | 見 | 谷 | 本 |
| ส์ | 紅 | 茎 | た ず 子 | 豊平次 |
| 3 | 葉 | 記 | 子 | 十次 |
| 朝シャンをして面接に行くスーツがランコの綱を信じて漕いでいる後戻り出来ぬ流れだ身を任す。後戻り出来ぬ流れだ身を任す。 | 音読で解約条項見つけたり 音勝と言えど侮るものでなし 自分では強い女と思うてる を表示を を表示を を表示を を表示を を表示を を表示を を表示を を表示 | を展示する を関する を関する を関の を関の がのメニュー旬にはかかわらず ではいかからず ではいかからが ではいかからが ではいかからが ではいかからが ではいかからが ではいかからが ではいかからが ではいかからが ではいかからが ではいかからが | 大阪市では、大阪市のでは、大阪市のでは、大阪市では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪では、大阪 | 高石市 |
| ţ | 丸 | 岸 | 大 | 浅 |
| Ц | Ц | 野 | 塚 | 野 |
| J | ţ | あ | 節 | 房 |
| 1 | 单 | あ や め | 子 | 子 |

| 尾 す 〈 尾 る田か が 田市 市 で | 今にして亡母の言葉が身に沁みる | 流暢に流れる筆の字が読めず | 白壁の土塀へ街の歴史棲む | ほどほどに聞えぬふりも老いの知恵 | 年の差を見せつけられた針の穴 | 岸和田市 原 | 内職へ無理な納期を言うてくる | 秋風へ約束ごとを溜めている | 束髪に紬の似合う老母でした | 語り部のひとりになろうひめゆりの塔 | 原爆忌やはりアメリカ許せない | 岸和田市 古 | 神の手に寿命預けて気儘する | 拝啓と書いて昨日も今日も過ぎ | 別姓夫婦独身気分が抜けきれず | 水不足ダムから顔出すおらが村 | 炎天に人の情けの笠地蔵 | 岸和田市 島 | リゾートで会社をだしに昼の酒 | 死んだほうがましとぬけぬけ生きて来た | 葬式の帰りに披露するエロ話 | 穏やかな通じがあってひと日無事 | どついたろか大阪弁はげげげの下 | 岸和田市 福 |
|--|-----------------|---------------|--------------|------------------|----------------|--------|----------------|---------------|---------------|-------------------|----------------|--------|----------------|----------------|----------------|----------------|---------------|--------|----------------|--------------------|----------------|-----------------|-----------------|--------|
| 勝晴 | | | | | | 2 | | | | | | 野 | | | | | | 崎 | | | | | | 浦 |
| 学和田市 であるとこ気楽に生きておりますが なむときは何も考えずに飲もう 掌の中で妻に上手に使われる 語告知あなた見舞いに行けますが がむときは何も考えずに飲もう 掌の中で妻に上手に使われる 猫の手も借りたいなどと誘われる 現実と言うて公約まで破り 党是など捨て政権にたどりつき その昔社党と申す党があり 小犬だけ転び走ってきてくれる が起立を食べたべ話切り出せぬ 新装開店ニラとラッキョを買いすぎて 打儀よい晴着の孫を褒めてやる 忠告をしてくれたのは元詐欺師 通訳を手古摺らせてる国訛り 名優のセリフを借りて日記書く | | | | | | | | | | | | U | | | | | | 富士 | | | | | | 勝 |
| 打一度も打ったことがない とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが とこ気楽に生きておりますが と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで破り と言うて公約まで砂く を食べたべ話切り出せぬ が入尾市 りへ髪逆立てる伐折羅像 たしてくれたのは元詐欺師 を手古摺らせてる国訛り のセリフを借りて日記書く | | | | | | | | | | | | で | | | | | | 子 | | | | | | 晴 |
| P | 名優のセリフを借りて日記書く | 訛 | たの | 行儀よい晴着の孫を褒めてやる | お祈りへ髪逆立てる伐折羅像 | 尾市 | 畳替え一番嬉しいのは素足 | 61 | 枝豆を食べたべ話切り出せぬ | W | 刻は流れて待ち人は花の精 | 尾市 | 小犬だけ転び走ってきてくれる | その昔社党と申す党があり | 党是など捨て政権にたどりつき | 現実と言うて公約まで破り | の手も借りたいなどと誘われ | 田市 | ます | n | 飲むときは何も考えずに飲もう | 今のとこ気楽に生きておりますが | 打一度も打ったことがな | 田 |

シマ子

美津留

金

太

| 優劣でいえば笑ってられる劣政局はどうあれ雨はまだ降らぬ政局はどうあれ雨はまだ降らぬるよならを丁寧に書く女文字 | 動後線のこりおすかを楽しみに 年尾 | 浙 旅 | 君子豹変とかくこの世に多すぎる桃李成蹊きみもわたしもユートピア | † - | く耳を持たない人手に祈りの数と子手に祈りの数と子 | ふるさとの駅から声もでかくなり 日立たない母の意見が締めくくり 目立たない母の意見が締めくくり |
|---|-------------------|----------------------------------|-----------------------------------|--------------|---|---|
| | 緑良 | | 英 | - | 隆 | 風 |
| 売り切れと言われて余計欲しくなりもう椰子は流れつかない埋立地嚙み合わぬ対談だから面白いっないとも一つの策である | くちびるが乾き悪夢はまだつづく | 苦瓜のジュースを飲んで生きのびるいもうとの泣きぼくろから秋になる | こぼれ萩わたしになにができたろう誘惑にころぶ林檎の樹の下で和歌山市 | さませず i 年 | 水蜜桃母の機嫌を計ってる東っすぐな道だけ選って来た脆さ真っすぐな道だけ選って来た脆されいに行けば恩師の家がある | 出発なべ戻って見ずさせて主導権譲りのんびり生きて主導権譲りのんびり生きて |
| 2 | 三宅 | | 木 | | 垂井 | ている端 |
| | Ξ | | | : | 垂 | |

| 物持ちのいいひとでした肥後守 | オクターブ下げた本音を聞きもらす | 野良猫を味方に父さんよく喋り | 水田に水が入ってよく眠る | 眼を病んで心の声がよく通る | 和歌山市 細 川 | 精いっぱい生きてゴムの木たじろがぬ | 完熟のトマト噂のふたつみつ | グレープフルーツも恋もほろ苦し | きみの手に桃の香りを移そうか | キーワードまさぐり谷を這い上がる | 和歌山市 福 井 | まだ凝りず続けていますカワヤナギ | 板挾み持駒握りしめたまま | 真夏日へ消化不良の本を積む | お手やわらかに細い神経です私 | ぼろぼろになっても切れぬ血の絆 | 和歌山市 桜 井 | 生きることって声を掛け合うことだろう | 沈着冷静 萩も桔梗も秋うまれ | 憑きものがはがれたように弾む秋 | 口数を少し減らしてみませんか | きのうもきょうも翔ぶことばかり考える | 和歌山市 田 中 |
|----------------|------------------|----------------|------------------|-----------------|----------|-------------------|-----------------|-----------------|------------------|------------------|----------|------------------|--------------|----------------|-----------------|-----------------|----------|--------------------|----------------|-----------------|----------------|--------------------|----------|
| | | | | | 稚 | | | | | | 桂 | | | | | | 千 | | | | | | - 輝 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 子 |
| | | - 100 | 772790 | • | 代 | | 1221 | | | | 香 | | | - | 14. | , | 秀 | | case. | · ere | | _ | 7 |
| 便法が救うてくれる行きづまり | 薬屋に若い力は置いてない | 草屋根も冷暖房にアルミ窓 | ゲートボール落穂拾いの絵のような | 知らぬ方が良いこともある好奇心 | 和歌山市 | 締めくくる紀州茶粥の口当たり | 公私ともイカす上司のアメとムチ | 足向けて寝れんお方がまた増えた | ブーメランやはりあなたの手に戻る | 人と自然 利休七則いう調和 | 和歌山市 | 貧しくはあったが父が光ってた | 夫入院冷凍してた嫉妬捨て | 母の生きざま細かく語る外孫に | 義足の夫 中折れかぶり杖を持つ | 行でない滝にうたれるこの暑さ | 有田市 | 油切れしない程度のお付合い | 東大の同じ土俵へ紙一重 | 減反の土 豊作の日もあった | 内情でもう一杯が食べられず | 子と生きる母も空腹だったはず | 和歌山市 |
| | | | | | 池 | | | | | | 宮 | | | | | | 松 | | | | | | 玉 |
| | | | | | 永 | | | | | | П | | | | | | 井 | | | | | | 井 |

かなめ

豊

太

克

子

正

雄

| 有り難やライバルとなる友がある | 予定表書いてすっかり忘れとる | 欠伸する所作で空気を入れ換える | 輪の中でもちつもたれつボランティア | 暑いのも山かすいすい盆蜻蛉 | 岡山県 二 | 晴れた日の楢山行は似合わない | 手術室から大胆な咳払い | 重税に喘ぎ日本はいいところ | 冷奴 捧げて自転車家につき | 床の間も客間もいらぬマイホーム | 岡山県 荻 | 平凡な見合いで絆金婚も | 絵に描いた餅で終った夢いくつ | うんざりと晴マーク見る雨欲しい | 水出さぬ噴水炎暑なおきびし | 草いきれノモンハンの野偲ぶ夏 | 岡山市 井 | 鳳仙花真夏かしらと地味に燃え | ずば抜けたのが居て面白うない授業 | スリッパを揃えときめく胸を抱く | 一族の情けに抱かれ一休み | 会いたいと貧乏神が言いました | 岡山県 川 |
|-----------------|----------------|-----------------|-------------------|----------------|-------|----------------|-------------|---------------|---------------|-----------------|-------|-------------|----------------|-----------------|---------------|----------------|--------|----------------|------------------|-----------------|--------------|----------------|-------|
| | | | | | 宗 | | | | | | 野 | | | | | | 上 | | | | | | 端 |
| | | | | | 吟 | | | | | | 鮫 | | | | | | 柳 | | | | | | 柳 |
| | | | | | 平 | | | | | | 虎狼 | | | | | | 柳五郎 | | | | | | 子 |
| 生きるのが下手でしょっ | 趣味一途みんな他人で好 | 老い二人パントマイ | 一本 百の情け | やがて地に還るドラマの浮き沈 | | 建前と本音 一本橋 | 負けいくさの話は涙 | 七光 親と言う字が幅をとる | 豊作へまた百姓を慌 | 納得の笑顔へ菊を埋 | | 白桃の紅つつましき頬か | 拝まれて困るなんでもない善 | 新米が出たと古米が慌てだし | 唄踊り女性パワー | 台風よ来いと勝手 | | ふる里で仮面の裏 | 想い出はつきぬ夏夜 | 座り直してここから先は | 二の足はふむなとまたも | 不器用で本音もたて前も | |
| ちゅうけつま | 好い仲間 | ムで今日も暮れ | と百の僧 | マの浮き沈み | 岡山県 | 渡る | 話は涙さそうから | 幅をとる | 元てさせ | 埋めてやる | 岡山県 | しき頬かむり | んでもない善意 | 不が慌てだし | -の夏まつり | 手な水不足 | 倉敷市 | のすすり泣き | 夜の雨ざんざ | ら先はきく話 | またも風の私語 | て前もありません | 岡山県 |
| ちゅうけつまずき | 好い仲間 | 暮 | 0 | マの浮き沈み | Ш | 渡 | さそうから | 幅をとる | 元てさせ | 埋めてやる | Ш | む | んでもない善意 | 不が慌てだし | の夏ま | な水不足 | 敷 | すり泣 | の雨ざん | きく | 風の | ありませ | Ш |
| ちゅうけつまずき | 好い仲間 | 暮 | 0 | マの浮き沈み | 山県 | 渡 | さそうから | 幅をとる | 元てさせ | 埋めてやる | 山県 | む | んでもない善意 | 不が慌てだし | の夏ま | な水不足 | 敷市 | すり泣 | の雨ざん | きく | 風の | ありませ | 山県 |
| ちゅうけつまずき | 好い仲間 | 暮 | 0 | マの浮き沈み | 山県矢内 | 渡 | さそうから | 幅をとる | 元てさせ こうしょうしょう | 埋めてやる | 山県小 | む | んでもない善意 | 不が慌てだし | の夏ま | な水不足 | 敷市田 | すり泣 | の雨ざん | きく | 風の | ありませ | 山県山 |
| ちゅうけつまずき | 好い仲間 | 暮 | 0 | マの浮き沈み | 山県矢 | 渡 | さそうから | 幅をとる | 仇てさせ | 埋めてやる | 山県小林 | む | んでもない善意 | 不が慌てだし | の夏ま | な水不足 | 敷市 田 辺 | すり泣 | の雨ざん | きく | 風の | ありませ | 山県山本 |

| 暑いから熱いカレーを食べてます | 何か煮えてるお盆休みの台所 | お手製のジョッキは火の味土の味 | 終列車レールも心もまだ軋む | 洗い髪 命を洗うよう女 | 竹原市 岩 本 笑 | 二度三度許した僕は馬鹿でしょか | 食べ放題なんと日本はいいところ | なりゆきにまかせコーヒー飲んでます | 徒歩五分これでは少し走らねば | 夏過ぎてまだ風鈴にある未練 | 竹原市 時 広 一 | 妻の影踏んで荷物が手に重い | 曇り硝子の向うに君のシルエット | 病室に城を移して老母が病む | 嗚呼懺悔南無阿弥陀仏繰り返す | 自画像は未完のままよ雲流る | 呉市 槇田 英 | 左手より右手の麻痺が気にかかる | 脳外科で逢うたえにしに何かある | 倖せなことに母乳で未だ足る | ピンク色着せればやはり女の児 | 孫の句を創れと孫を連れて来る | 竹原市 森 井 菁 |
|-----------------|-----------------|-----------------|---------------|-------------------|-----------|-----------------|-----------------|-------------------|----------------|------------------|-----------|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|---------------|---------|-----------------|-----------------|---------------|----------------|------------------------|-----------|
| | | | | | 子 | | | | | | 路 | | | | | | 詩 | | | | | | 居 |
| ななかまど緑の頃も味があり | 激辛のカレーライスで持てなされ | 思い想い憶いを海へ流人墓 | 目標は乙女の祈りからソナタ | 知恵知慧ちえ亡母の好んだことばです | 広島市 森 | 古井戸にモーターポンプ設置する | 新陳代謝いつしか巡る世の定め | 水一つないもの欲しい人心 | 井戸掘り業この旱魃に休みなし | 嫌々ながらソロソロ故障と言う関所 | 竹原市 岡 | 平和です美容院から犬が出る | 人畜に無害な男になり果てる | 有為の山 超えて自由の風に遭う | 平山郁夫の五重の塔に暮れかかる | 老骨の乾いた音で鳴る真夏 | 広島県藤 | 落日を待ってうごめく影も減り | 興安嶺日ごとに戦友の減るつらさ | 白樺の林へ戦友を泣いて置き | 狼の遠吠え戦友を捨てて悔い | 興安嶺済まぬと詫びて戦友を捨て(興安嶺逃亡記 | 広島県 田 |
| | | | | | | | | | | | 本 | | | | | | 解 | | | | | 光記) | 村 |
| | | | | | 田 | | | | | | | | | | | | | | | | | 3000 70 | |
| | | | | | | | | | | | 清 | | | | | | 静 | | | | | | 新 |

風

造

水

文

| 綻びを繕う愛は持っている | | | | 氷屋の娘と熱い恋をする |
|----------------------|-----|---|---|------------------|
| 嫌われぬ位置から姑の鈴は鳴る | | | | 体温が上がると喧嘩したくなる |
| 一期一会こころを染めてみたくなる | | | | みやげかと思えばみんなお襁褓かい |
| 減税の戻りビールの泡と消え | | | | 頭の中が乾くとろくなこと言わぬ |
| 漁火のサインを読んでみたくなり | | | | 暑いから経は短い方がいい |
| 鳥取県 西 原 | はるお | 橋 | 土 | 鳥取県 |
| いのちありてまた日まわりと背くらべ | | | | 魂が迷って戻る盆の果て |
| 水不足うちげの井戸が役に立つ | | | | 円高よりも台風がおそろしい |
| 猛暑猛暑冷えているのは政治だけ | | | | 昆虫の墓をつくって夏終る |
| そうこうの妻ついにツメまで抜かれたよ | | | | 特攻隊で覚えた煙草やめられぬ |
| 「征ってきます」と もどらぬままの五十年 | | | | クーラーをかけて昼寝を三時まで |
| 鳥取県 さえき | 螢 | 橋 | 土 | 鳥取県 |
| はったりを効かせ元気を売りにゆく | | | | 善も悪もどうせ巡ってくるだろう |
| 色即空クーラーにへばりつく | | | | 善人の目に真っ直ぐな道ばかり |
| 向日葵に斬首の刑を言いわたす | | | | 対策はだまって頭下げるだけ |
| 放埓の果ての千振買いにゆく | | | | 登頂のしんがりという汗をふき |
| 脳天に釘をうたれているようだ | | | | 自己批判他人を意識した言葉 |
| 鳥取県江原 | たつみ | 下 | 松 | 鳥取県 |
| 世紀末開き直って生きたるで | | | | 本音吐く落葉の私語だ聞いてやれ |
| 足腰もまだ未だ口も減りません | | | | 飢えて死ぬ子があり神よ知ってるか |
| 孫と指す将棋負け機考える | | | | 大臣の首ならスペア置いてるぞ |
| 年々に仕来り廃る盆用意 | | | | くせ文字の温さ企みなど持たぬ |
| 朝顔の棚を簾と兼ねて咲き | | | | すがりつくその眼を僕は裏切れぬ |
| 鳥取県 林 | 洋々 | Ш | 両 | 鳥取市 |

とみお

露杖

やえ

艷

子

| 白桃の滴りは神の芸術か | 喘ぐ木も南瓜に肩を貸している | 瓢簞の実れば下葉枯れてくる | 主義持たぬ帽子洗って陽に干さん | 胸のオルガン消えないままに半世紀 | 米子市 林 | 風通しの悪い家だ頑丈な壁だ | 竹の蛇も父も首を縦には振らぬ | この手足と炎天に晒されて来た | 間伐を重ねてちちを太らせる | ひとり居て噂噺も零れない | 米子市 林 | 当然のように唇受けとめる | 体温を分けおうている旅の宿 | 何があっても信じていろと男から | 夏草の高さに男見失う | 太陽が迷うとろくな事がない | 鳥取市 小 | 秋めいて落とした影を振り返る | 妻の口だけは夏痩せしていない | 若さっていいな日焼けが美しい | 生ビール飲みに行こうか蟬しぐれ | 汗かいて戻って使いさせられて | 鳥取県 鈴 | |
|-------------|----------------|----------------|-------------------|------------------|-------|---------------|------------------|-------------------|------------------|----------------|-------|-------------------|-----------------|-----------------|-----------------|----------------|-------|----------------|----------------|----------------|-----------------|------------------|-------|--|
| | | | | | 3.1- | | | | | | | | | | | | 谷 | | | | | | 木 | |
| | | | | | 7111 | | | | | | -tut: | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | | 瑞 | | | | | | 荒 | | | | | | 美ッチ | | | | | | 公 | |
| | | | | | 枝 | | | | | | 介 | | | | | | 干 | | | | | | 弘 | |
| 大凶というから南窓開く | 親族に囲まれ涙もろい鬼 | 夏越せば元気が出ると鬼はいう | ドリンク剤とビールで夏にうちかった | 注射は魔物めきめき元気湧いてくる | 米子市 | 灯台から寒い話を聞いてくる | 真珠の重み母から娘にとあとを継ぐ | うちの鬼さんとうとう酒を断つつもり | 箸が笑ってなかなか豆がつかまらぬ | 死ぬ時は太鼓鳴らせて下さいな | 米子市 | スタートよりもゴールにほしい揚花火 | あの突風は神の試しであったのか | 神の鞭だろう日照りとこの猛暑 | 出雲路を出ようとしない老いた神 | 神の聖域もうこれ以上近よるな | 米子市 | 周遊券残さず使い一人旅 | 侮った紙で地獄を見た男 | 一枚の紙で人間踊らされ | 一枚の紙の重さよ五月病 | 折り鶴千羽 鬼は見事に折り終えた | 米子市 | |
| | | | , _ | | 政 | | | | | | 田 | , | | | | | 野 | | | | | | 石 | |
| | | | | | 岡 | | | | | | 中 | | | | | | 坂 | | | | | | 垣 | |
| | | | | | 日 | | | | | | 亜 | | | | | | な | | | | | | 花 | |
| | | | | | 枝 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| 仏とくらし気がつけばコスモスの咲く | それからは仏とおがむ丸い石 | 深い井戸の底にもゆれる月がある | 我がもの顔に地球をかける蟻の列 | 盃に重ねた恩が渦となる | 米子市 澤 田 | ひと眠りした間にのびる夏野菜 | 太陽の一途コースをはずせない | 互生する木の葉で亡兄に出逢えない | のうぜんかづら他人の幹に甘えてる | 藪陰に雨後の日射しがのびてきた | 米子市 寺 沢 | 他人には言えぬ話をする仏間 | 包丁も弾んで烏賊の糸づくり | クーラーの窓で朝顔数えている | 原爆の年の暑さを思い出す | 何時かは着る孫の喪服を仕立てている | 米子市 菅 井 | 梅ラッキョ漬けて私の満足度 | コスモスが秋をさきどりして揺れる | 赤トンボ見つけてからの秋狂い | 景気低迷 私も下降線たどる | 五十年夏の記憶はあざやかに | 米子市 青 戸 |
|-------------------|---------------|-----------------|-----------------|---------------|---------|----------------|----------------|------------------|-------------------|-----------------|---------|----------------|----------------|------------------|----------------|-------------------|---------|---------------|------------------|----------------|----------------|-----------------|---------|
| | | | | | 千 | | | | | | | | | | | | | | | | | | 田 |
| | | | | | 春 | | | | | | みど里 | | | | | | とも子 | | | | | | 鶴 |
| 奥さん | 豪邸 | 賞 | 西生 | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 奥さんに丸めこまれた秘書のメモ | の条件井戸と雪隠と | 味期限男にあった日の焦り | 酷暑酷寒葬儀屋笑い止まらない | 天国は地続きでした急カーブ | 唐津市な | 炎天の墓石を抱いて百日紅 | 感謝して箒持ちたい銀杏の葉 | これだけの薬じゃ肝臓も疲れよう | スタンドのスワンやさしいポーズとる | ねぎらいの声を素直にきく傘寿 | 唐津市 田 | 追分を越えると鈴がはずみだす | うぶ声に父たることが面はゆい | フェーン現象 炎の山に罪人はいず | 終の砦に切り札ひとつ時をまつ | 原点に立ってわたしも影も無垢 | 米子市 白 | 刺のある言葉をキスで封印す | ハイヒール脱いだら楽に逃げられる | 落し蓋のような私のお母さん | 子もタマも妻の味方に付く古巣 | くりの実が弾けましたと郵パック | 米子市 新 |
| に丸めこまれた秘書のメモ | の条件井戸と雪隠と | 味期限男にあった日の焦 | 寒葬儀屋笑い止まらな | 天国は地続きでした急カーブ | 久 | 炎天の墓石を抱いて百日紅 | 感謝して箒持ちたい銀杏の葉 | これだけの薬じゃ肝臓も疲れよう | スタンドのスワンやさしいポーズとる | ねぎらいの声を素直にきく傘寿 | 市田 | 追分を越えると鈴がはずみだす | はゆ | ン現象 炎の山に罪人はい | 終の砦に切り札ひとつ時をまつ | 原点に立ってわたしも影も無垢 | 市白 | 刺のある言葉をキスで封印す | られ | 落し蓋のような私のお母さん | の味方に付く古 | くりの実が弾けましたと郵パック | 米子市 新 |
| に丸めこまれた秘書のメモ | の条件井戸と雪隠と | 味期限男にあった日の焦 | 寒葬儀屋笑い止まらな | 天国は地続きでした急カーブ | | 炎天の墓石を抱いて百日紅 | 感謝して箒持ちたい銀杏の葉 | これだけの薬じゃ肝臓も疲れよう | スタンドのスワンやさしいポーズとる | ねぎらいの声を素直にきく傘寿 | 市 | 追分を越えると鈴がはずみだす | はゆ | ン現象 炎の山に罪人はい | 終の砦に切り札ひとつ時をまつ | 原点に立ってわたしも影も無垢 | 市 | 刺のある言葉をキスで封印す | られ | 落し蓋のような私のお母さん | の味方に付く古 | くりの実が弾けましたと郵パック | |

4

子

汀

剣

| 挨拶が上手過ぎても警戒し | 正義ばかり主張爪弾き詮もなし | 主なき家にサルビアいと朱く(入院) | 頑固さはベッドで頭割り六針 | 病んでより早や一月をまだ失語 | 唐津市 浜 | 菜畑似実留赤米農遺跡 | 無病息災出健脚朝於駆 | 井乃蛙跳躍大海出留夢 | 見帰乃滝紫陽花七変化 | 風流奈句座出柳友酌交 | 唐津市 筒 | 恋しさが募り憎さも二十倍 | 新婚の友を帰さぬ三次会 | 願いごと叶えばお神酒安いもの | 頷いているが納得しない貌 | 迷子札さげた坊やが神輿追う | 唐津市 山 | なるほどの噂に長い潜伏期 | 偶然にまちがいあるまい食当り | 運命の出逢いと今も彼が言う | 理で詰めて二で割ることに多数決 | 名月や馴染みの顔と二人きり | 唐津市 仁 |
|--------------|----------------|-------------------|----------------|----------------|-------|------------|--------------|------------|----------------|---------------|-------|----------------|----------------|---------------------|--------------|----------------|-------|-----------------|----------------|---------------|-------------------|----------------|-------|
| | | | | | 本 | | | | | | 井 | | | | | | П | | | | | | 部 |
| | | | | | ち | | | | | | 朴 | | | | | | 高 | | | | | | 四 |
| | | | | | ょ | | | | | | 竜 | | | | | | 明 | | | | | | 郎 |
| 炎熱の道片 | ふと旅にでも行 | 至福か | 夕暮れ | 大蛇 | | 境杭 | わけ | 坪庭の | 花び | 将来 | | お | 税力 | 税会 | 傷跡 | 時効 | | 手 | 窮鳥 | 達筆 | 一 日 | 生ま | |
| の道片陰がまだ見えぬ | にでも行くかと夫婦真珠婚 | かな睫毛の長い孫を抱く | 夕暮れ族そんな作家が夏に逝く | 太鼓鳴る斐伊川に水が無い | 出雲市 | 中風五年起きてきた | ありの特価の傷を確かめる | の石が耐えてる排気熱 | びらの数ほど多弁にならぬよう | 来につながる今かわからない | 出雲市 | しゃべりな母さんがいる秋最中 | 税を吸い小さくなってる愛煙家 | 税金を飲んでいるぞと愛飲家 | 跡に時々ふれる鐘の音 | 時効などない失言を嚙みしめる | 出雲市 | 手ごたえにハゼー尾のいのちかな | 窮鳥ふところに入り抱きしめる | 達筆で倒産しました店じまい | 日を燃えに燃えたる陽が落ちる | れる刻ひとり死ぬ刻またひとり | 島根県 |
| 陰がまだ見えぬ | くかと夫婦真珠 | の長い孫を抱 | 夏に逝 | 鳴る斐伊川に水が無 | 雲 | 風 | ありの特価の傷を確かめ | 石が耐えてる排気 | の数ほど多弁 | 不につながる今かわからない | 雲 | しゃべりな母さんがいる秋最中 | 小さくなっ | 並を飲んでいるぞと愛飲家 | 時々ふれる鐘の | しめ | 出雲市 尼 | こたえにハゼー尾のいのちかな | ふところに入り抱きしめる | +で倒産しました店じまい | を燃えに燃えたる陽が落ちる | れる刻ひとり死ぬ刻また | 根 |
| 陰がまだ見えぬ | くかと夫婦真珠 | の長い孫を抱 | 夏に逝 | 鳴る斐伊川に水が無 | 雲市 | 風 | ありの特価の傷を確かめ | 石が耐えてる排気 | の数ほど多弁 | 不につながる今かわからない | 雲市 | しゃべりな母さんがいる秋最中 | 小さくなっ | 並を飲んでいるぞと愛飲家 | 時々ふれる鐘の | しめ | 雲市 尼 | こたえにハゼー尾のいのちかな | ふところに入り抱きしめる | +で倒産しました店じまい | を燃えに燃えたる陽が落ちる | れる刻ひとり死ぬ刻また | 根県 |
| 陰がまだ見えぬ | くかと夫婦真珠 | の長い孫を抱 | 夏に逝 | 鳴る斐伊川に水が無 | 雲市伊 | 風 | ありの特価の傷を確かめ | 石が耐えてる排気 | の数ほど多弁 | 不につながる今かわからない | 雲市 板 | しゃべりな母さんがいる秋最中 | 小さくなっ | 並を飲んでいるぞと愛飲家 | 時々ふれる鐘の | しめ | 雲市 | こたえにハゼー尾のいのちかな | ふところに入り抱きしめる | +で倒産しました店じまい | を燃えに燃えたる陽が落ちる | れる刻ひとり死ぬ刻また | 根県小 |

ティー 暑中見 六十 冷ソー もう八 月 顔 越 0 月 寧に髪洗う命乞いするように ろいろとあってワイングラスひとつ 0 一貫 いたい人へ思案の途中下車 10 力少し残し えて来たことには触れぬ座り 孝と言う n 音 に行く一 L 0 衣も乾かずカナカナも止まず 0 の花を数えて暑気忘 五歳という後悔を捨てに行く め に曽孫 雨 + 花 舞に来てくれ ば影よお前もせつない メン夫の笑顔をとり戻す タイムい 0 距離 にはあ 熱く 路未だ八十路だと足さする 建てた自負ありひる寝する 字が風化 番 に確 降 7 0 h まり る黒く 河を渡 欠伸と御 近 つしか亡母 い橋を行く かな愛があ 喋らな たの て平 降 りきる n 対 3 か鬼ヤン 面 の話す 和 か (曾孫誕生 出雲市 出雲市 島 胼胝 根 3 7 県 市 吉 袁 島 松 本 岡 Ш 祥 文 きみえ 多賀子 庵 子 空想 嘘らし 潮満ち 失った事が大きな起爆剤 長 9 銭 追 看 気にくわぬ顔 添加物付けて街から娘が帰 献上という名が付 満 車 火葬場の新築予約したくなり 自 正 州 椅子 か バ の音させると鬼が寄ってくる わ 画 直 板 天商今年も来てた鼻め コに 笑うことが私 が 像 猛 な男が下手な嘘をつく 0 った今日 n 0) い風の 月 K 暑 彩を知っ て来る時に出る本 ては逃げ 猛 欲は言わ 酷暑 0 赤 火 犬 砂 41 とフル まで É 絵 に 便 敵 狆 ない りが の具が不足 だんだん僕 てる亡 の思案へ一服し てやるかと蠅も意 かい 、来て遊 0 か 0 いて落ち 暑気払 吹き止 に 医者通 道また戻 しこま 父 使 がね 調 13 0 3: 気味 切る た 空 ま 7 かい 4 る す 味 2 出雲市 島 出雲市 出 3 雲市 (暑中見舞) 根 地 県 佐 竹 久 板 17 木 治 谷 垣 鳳 ち まこと かし 酔 笙

朝

窓

耐

濡

Vi

八

酒

裸逢

逢 余 鈴

八

| 米櫃を満たして少しナマケ癖を開けて青い小鳥を待っている窓開けて青い小鳥を待っている | 透明な器に盛ってしまう嘘 炎天に真っ赤な夕日憎く見る 炎天に真っ赤な夕日憎く見る の母のため を踏む九十五歳の母のため ではいるとは知らぬ泡立草 | 世系の 他所ゆきの貌もちょっぴり紫水晶 中檀の香りとやらに負けている 中檀の香りとやらに負けている はまりとが高いです。 神国の話も少し夏牡丹 | 出雲市 と場を一寸覗いた黒揚羽 と場を一寸覗いた黒揚羽 と場を一寸覗いた黒揚羽 出雲市 |
|--|---|---|---|
| | 木 | 岸 | 石 小 |
| | 村 | | a 玉 |
| | あきら | 桂 | 美満佐江 |
| | 6 | 子 | 字 江 |
| そもそもは身の上話など少し気にするな紅一点の座る場所気にするな紅一点の座る場所を強いてどっこい生きている | 身を立てた人古里の家を捨て別算をせずに売ってる五味の市引算をせずに売ってる五味の市薬にも毒にもならず八十の春薬にもまけれる。 | を を を で を で を で で くれてるような 丸い月 を を で の の の の の の の の の の の の の | 番川県 電も水瓶干せたか降らぬ雨 でである。 ででは、 ででは、 ででは、 ででは、 でである。 でである。 でである。 でである。 でである。 でである。 でである。 でである。 でである。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でいる。 でい |
| | 池 | 工 | 川成 |
| | 内 | 藤 | 崎 重 |
| | か | 吟 | ひ放 |
| | おり | 笑 | か り 任 |
| | ŋ | 大 | , |

| j ī | お隣は入退院を老夫婦 - 原格市 - 中 - 家油攻め老いのグルメは茄子の紺 | 水期川の流れも遠慮勝ちの色白黒だけという差別の色白黒だけという差別のにくい青汁二本日課でみにくい青汁二本日課で | 操除三十六度の汗流す 一点夢の宇宙を見て帰っこりと八重歯のぞかっこりと八重歯のぞか | シルバーの誘いにはずむ靴をはく 香川県 新 川 |
|---|--|---|--|-------------------------|
| ĭ | 连 | サ | 葉 | 7 |
| ılı | 争 | ウ 子 | 香 | サヱ |
| 慣れている仕事へ油労力を惜しんだつけ分の悪い喧嘩受けね | さあ今日のうんとよい孫生まれ子猫も生まれ | 秋に稲穂が垂 らの泥んこの らの泥んこの | び近所に近ごろ多い万が それぞれの背に人生のバ それぞれの背に人生のバ 列島が最高気温を競い合 | 燃え尽きる贅 |
| 事へ油断忍び寄る がいるにけつまずく いるにけつまずく がっけが大き過ぎ の論争振り返る | 汗墓掃除 でで でで | 美ぎ む母す | トーコード にかも知れ | 沢が欲し余命表京都市 |
| 断忍び寄るが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎがからぬ羽目がならぬ羽目があるがある。 | 汗墓掃除で | 美食膳 おん好し おん好し 京都 | トーコード 京都 | が欲し余命表京都 |
| 断忍び寄るが大き過ぎが大き過ぎる。 | 汗墓掃除が解く | 美食膳 を立て 京都市 京都市 | トカも知れぬ 一 | が欲し余命表京都市 |
| 断忍び寄るが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎが大き過ぎ | 汗墓掃除脚の中へが解く | 美食膳 ・ 京都市 山 ・ 京都市 山 | トカー にかも知れぬ 京都市 松 | が欲し余命表 京都市 都 |

| 問診で病名摑んでいる名医 | 脈所押えて自分を考える | 政治改革人脈金脈狂わせる | 人脈をつなぐ真心地に落ちず | 一雨の欲しい葉脈萎縮する | 大阪市 | 床の間の柱寄る辺として磨く | 野々宮の竹よ焼き栗剝いた道 | すごく情のこわいお人と思う萩 | せっせせっせと金木犀をいつくしむ | 自分史に旋風起きた夏が逝く | 寝屋川市 | 何もかも暑い暑いがはかどらず | さなきだに少なき余生昼寝する | 再検診報せ白とは夏涼し | 水を撒くホースのままで水を飲む | 今日の頁とざす栞を水色に | 奈良県 | 南無三宝 終着駅に来て気付き | 送られてゆく日も近し夕茜 | 送られて送って夜みち小雨降る | ドライフラワーにもある自己主張 | ひょっとこの面から人情こぼれ出す | 名古屋市 |
|--------------|----------------|------------------|---------------------|---------------|-------------|---------------|-----------------|----------------|------------------|---------------|-------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------|----------------|------------|-------------------|----------------|----------------|-----------------|-----------------------|-------------|
| | | | | | 北 | | | | | | 柴 | | | | | | 長公 | | | | | | 越 |
| | | | | | | | | | | | 田 | | | | | | 長谷川 | | | | | | 村 |
| | | | | | 勝 | | | | | | 英工 | | | | | | 春 | | | | | | 枯 |
| | | | | | 美 | | | | | | 英壬子 | | | | | | 蘭 | | | | | | 梢 |
| 姑をけなすと共鳴音微弱 | 人物に触れず味方につけておく | きついこと言うが脱皮をしてほしい | ヒトと呼ばれてメデイア社会のあじきなさ | 世の中はみんないい人悪い人 | 守口市 結 城 君 子 | 夏休み旅で成長して来た子 | 冷夏にも猛暑にもいるサポーター | 暑い暑い思わず二回二百円 | 鱧鰻には恐ろしい夏が来た | 政権に就けば持論も裏返す | 和泉市 岡 井 やすお | 夫がいる唯それだけで安堵する | 見舞う度孫の玩具がふえて行く | 打ち水をして夫の帰りを待つ浴衣 | 甲斐あって夕べの膳にミニトマト | いつまでも咲く紫陽花の執念か | 堺市 黒 田 真 砂 | 似ていると言われアルバム出してくる | 留守番の老母の楽しむひとり言 | イヤリング浴衣姿にも似合う | 我が娘にもこんな大きな夢がある | シルバーシートまだまだそばで見ていましょう | 伊丹市 山 崎 君 子 |

| 面目躍如そんな戒名もって逝く | すぐごねる家系縦皺持っている | 寝るだけの所に選挙権がある | お互いにエール交換して夫婦 | おぼつかぬ記憶の中に炎の記憶 | 松山市宮 | 欲のない人と話を合わしとき | サラ金の甘い言葉も判が要り | 難問を先に延ばして惰眠する | 朝風呂で私のリズム整える | 昼寝から覚めたら覗く冷蔵庫 | 川西市 氏 | 夏休み財布が脱水症になり | 遍路道昔の芝居小屋がある | 豆腐屋が遠くにあってこそうまい | 黄の夕映え明日はもっと暑くなる | 夕波がひたひた念仏聞こえてくる | 守口市 森 | 亡母よまだ父を迎えになど来るな | 生き抜いた拳開いてひざに置く | 分刻む人に飼われた金魚の死 | 通院の坂道金魚二匹買う | 雑巾をゆるくしぼった自己嫌悪 | 東京都 山 |
|----------------|-------------------|---------------|---------------|-----------------|---------|-------------------|---------------|---------------|---------------|---------------|---------|---------------|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|---------|-----------------|----------------|---------------|----------------|----------------|-----------|
| | | | | | 1 尾 | | | | | | 林 | | | | | | Щ | | | | | | |
| | | | | | | | | | | | 洋 | | | | | | 72 | | | | | | 新 |
| | | | | | みのり | | | | | | 什敏 | | | | | | まさお | | | | | | 子 |
| 一年のグラフが描けた万歩計 | 捨てるにも技師はテスター当ててから | 半粒で効いたよ古希の睡眠剤 | 祝盃は脂肪肝なきエコー像 | 老化せず口三味線でモーツァルト | 町田市 竹 内 | ことわりの電話こわごわ押すプッシュ | 針の山より楢山の住み心地 | 整骨院恐縮してるサロンパス | 決心はしたが靴ベラ滑らない | 姑に耐え夫に耐えて嫁に耐え | 字部市 平 田 | 雨だけを秋台風に無理だのみ | 下手なウソ正直者と笑わせる | 芋蔓にばれても汚職は良いらしい | 眉つばであっても信じて居たい人 | おでんコロ松茸なみの値段表 | 大阪市 藤 田 | 嘘がある夫の顔を覗き込む | 挨拶へ朝顔賞めて通り抜け | 自慢する髭を鏡に笑われる | 真心は幾つになっても素直です | 生き残る覚悟ができて墓参り | 河内長野市 井 上 |
| | | | | | 紫 | | | | | | 実 | | | | | | 山 頂留子 | | | | | | 上喜 |
| | | | | | 715 | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| これでもかこれでもかとはコマーシャル | 参道の漢方薬が売れている | 女です柔道少しやってます | 墓参りしたと長男から電話 | 愛人やおまへん女房別姓で | 大阪市 桝 本 蕗 児 | SLが僕を無心にさせてくれ | 手袋で隠す賄賂を摑んだ手 | 朝露を苺と一緒に食うている | 謎が謎呼んで短夜ミステリー(サリン) | 天皇が家にもひとり居て困る | 静岡県薗田獏沓 | 夫婦とや方程式に似ておかし | あんなことこんなことまで知らず生き | むらさきは寂 奔放の顔を持つ | ベルを押す背中に活を入れてから | スマートにジョークが言えてもててはる | 西宮市 西 口 いわゑ | 炎天にあの日を憶う足の裏 | ボタン一つはずすと自分らしくなる | ライバルの貧乏ゆすり見てしまう | 角まがるまでは信用させておく | 憧れの絵となって押すべビーカー | 豊中市 吉 田 あずき |
|--------------------|----------------|---------------|-----------------|--------------|-------------|---------------|----------------|---------------|--------------------|-----------------|---------|-----------------|-------------------|----------------|-----------------|--------------------|-------------|----------------|------------------|-----------------|----------------|-----------------|-------------|
| 姑の好物だった栗おこわ | 秋の酒ひばりの歌をリクエスト | バスの中這うて探した五百円 | 看板を外すとただのおじいちゃん | 東向き西向き顔を使いわけ | 豊中市 | 島通い一番後で牛を乗せ | 冷やでよし温めてもよし夏の客 | 魚屋が来ると鯛から順に見せ | 風鈴の止まった部屋でふたりきり | アパートの窓で振る手を信じよう | 西条市 | 上向いて歩けば愚痴がつきまとう | 謙譲の美徳に遠いトップの座 | 石橋を叩いて残す悔いの数 | 反論を秘めて火中の栗拾う | 晩成の亀は焦らずマイペース | 大阪市 | 神を甘くみて遺伝子に背かれる | 包丁をゆっくりと研ぐある野心 | カラオケが好き胎教はクラシック | 反論は覚悟踏絵に躊躇せず | 浮気から本気単細胞になる | 美禰市 |
| | | | | | 滝 | | | | | | 片 | | | | | | 井 | | | | | | 安平次 |
| | | | | | 北 | | | | | | 上 | | | | | | 上 | | | | | | 次 |
| | | | | | 博 | | | | | | 明 | | | | | | 白 | | | | | | 弘 |
| | | | | | 史 | | | | | | 水 | | | | | | 夆 | | | | | | 道 |

| 謙譲の美徳いつしか貝になる ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ | 大阪市 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 では、 | 札一道暗位 | 水包の重さずっしり一万句 を魚まで私を馬鹿にして逃げる を魚まで私を馬鹿にして逃げる がな冷房病と言うやつさ | 寝屋川市 |
|--|---|--|--|---------|
| 1 | Ċ. | 福 | 田 | 平 |
| H | B | 元 | 中 | 松 |
| 柳 | ďρ | みの | 透 | かすみ |
| 景 | 4 | の る | 太 | み |
| 言い分は、 流打たれ | 場が落ちて神話の関が落ちて神話の関が落ちて神話の出る場がない。 | 触 陽 炎 と 別 な り が と り が と り が と り る と り る り る り る り る り る り る り る り る | を が が が が が が が が が が が が が | |
| 分は全部吞みこみ妥協するの下で雑兵が喘いでるの下で雑兵が喘いでるの下で雑兵が喘いでるの下のがある。 | 湖の稲田姫 帰らない 帰らない 帰らない にそう言われ | 荷とは一度も言わず母の杖 と別れ上手な影法師 炎と別れ上手な影法師 で服の奥底が熱くなる | 山も川も人間も 幸せほしいから を遊び好き なにしても喜ばぬ | 河内長野市 |
| 落駒 | 湖の稲田姫 帰らない 標らない 標らない | かける かける かったい かったい できる 西宮市 | も喜ばぬ 言田林市 | 河内長野市 植 |
| 落あち市 | 湖の稲田姫原らない | かける かける かったい かったい できる 西宮市 | も喜ばぬ も喜ばぬ 池 | 市 |
| 落ち市北 | 湖の稲田姫 原らない にそう言われ えぬ虹の橋 | 無うのがつらい あくなる 西宮市 秋 | を を を も 喜 ば ぬ も 喜 ば ぬ た ん 間 も た る る る る る る る る る る る る る る る る る る | 市植 |

| 札束の魔力人間失せてゆく | 終生を積んで崩した子守石 | わたしにもメルヘンくれる赤とんぼ | 舞いあがる風船気付かぬ殺意 | 溜め涙こぼした方が負けになる | 富田林市 片 | うな垂れて歩く八月十五日の晴天 | 移ろいの季節 黒人霊歌流れ | いちにちもの言わぬ日の夕日を呑み尽す | 海はかなしみ マンボウは総入歯 | 脱いでも脱いでも肌にまつわる虚栄 | 尼崎市 田 | つまらない噂は聞かぬ驢馬の耳 | 婦唱夫随妻のタクトで回る独楽 | 世渡りの下手な男と共白髪 | 喝釆も花束も来ぬ斬られ役 | 自画像は好きなスターの顔に似る | 藤井寺市 中 | 訃報つづくまだまだ歳に負けないぞ | ふぐなべの酒にうっかり打ち明ける | 病名は金欠病と言うカルテ | 満場一致 酒の用意は出来ている | 重荷ですなどと自信に満ちた顔 | 北九州市 梅 |
|----------------|-----------------|------------------|-----------------|----------------|--------|-----------------|-----------------|--------------------|-----------------|------------------|-------|----------------|----------------|------------------|----------------|-----------------|--------|------------------|------------------|---------------|-----------------|----------------|--------|
| | | | | | 岡 | | | | | | 中 | | | | | | 島 | | | | | | 田 |
| | | | | | 智恵子 | | | | | | | | | | | | 志 | | | | | | 宣 |
| | | | | | ぶ子 | | | | | | 薫 | | | | | | 洋 | | | | | | 司 |
| 平均寿命クリアー誰も拍手せず | 一人消え二人目も去るかくれんぼ | 老ホーム一人一人に嫁姑 | 無の意味を窮めきれないまま写経 | 籠を出てホタル世間を暗くとぶ | 伊丹市 | 目の位置を下げて私のしあわせ度 | あばら屋で良し八月の風通り抜け | 目印にバラ一本を持って会う | 散骨よ海鳴り遠く遠く聞く | 六波羅蜜修行に大暑暑からず | 吹田市 | もう牙を向くこともない窓の席 | 海原を眺め詩人小半日 | 海の民と言われ水漬く屍となった父 | 海鳴りに強く生きろと論される | うな重の並より上の暑気払い | 奈良市 | 四捨五入すれば間に合う棒秤 | 好き嫌い煎じつめると敵味方 | 底辺で炎える日もある日和傘 | 古里の川はナツメロ忘れない | 不倫の火死角に映る影法師 | 静岡市 |
| | | | | | 樫 | | | | | | 山 | | | | | | 米 | | | | | | 安 |
| | | | | | 谷 | | | | | | 本 | | | | | | 田 | | | | | | 本 |
| | | | | | 寿 | | | | | | 希久子 | | | | | | 恭 | | | | | | 晃 |
| | | | | | 馬 | | | | | | 子 | | | | | | 昌 | | | | | | 授 |
| | | | | | | | | | | 8 | - 2 | 29 - | - | ş: | | | | | | | | | * |

| 米櫃は知らぬ男のまま通す | 更年期鏡に文句つけてみる | 康法病 | 関訓時カ流 | | 為文庁 | 別れから三面鏡は曇りがち | 義姉がくると妻の目が三角になる | 首つりの服です胸がひらき過ぎ | 甘いものやたら目に入る血糖値 | 倉吉市 野 | スナックに夢のふくらむ席がある | ライバルに乾杯ジョッキ高く持つ | くぜ | 可能性求め新たな職につく | | カレンダー空いた日がない雑多趣味 | 甚六に生れて墓を掃除する | 穏やかに話せば旨い茶の香り | 正論であるが会社と言う所 | 鳥取市 武 | 目ざわりだ本屋に来てまで腕を組み | 夏山へ老妻とペアの服で出る | 妻も他人あれからことば考える | 香をたいて満足と言う茶一ぷく | 今治市 越 |
|-----------------|---------------|----------------|-----------------|-----|-----|--------------|-----------------|----------------|-----------------|-------|-----------------|-----------------|--------------|----------------|-----|------------------|-------------------|-----------------|---------------------|-------|------------------|-----------------|------------------|----------------|-------|
| | | | | 馬 | | | | | | 中 | | | | | 木 | | | | | 田田 | | | | | 智 |
| | | | | 不是 | | | | | | 御 | | | | | | | | | | 2000 | | | | | 首 |
| | | | | | | | | | | | | | | | 圭一 | | | | | 帆 | | | | | _ |
| | | | | オ | (| | | | | 前 | | | | | 郎 | | | | | 雀 | | | | | 水 |
| どこまでも一寸そこまで夫婦連れ | 老眼で母の耳くそ取っている | 出来過ぎた話を陰で聞いている | ハイハイのふたつ返事に迷わされ | 鳥取県 | | 友情のドア半開き営業課 | オヤジにも母にも見えるちぎれ雲 | 逆光のレンズで見るといい人だ | 長所だけ接写レンズで撮ってみる | 鳥取県 | 日めくりを捲る旅発つ日も間近 | へそくりも孫には即と妥協する | 雨を待つ限界人も草も木も | 若さかな時代に合った自己主張 | 鳥取県 | あきらめへ女一人の午後しずか | 亡夫の合図かまたたきをしている星だ | 五臓六腑の悲しみ亡夫の星さがす | 十指くむ心柔和な眉になる (夫逝って) | 鳥取県 | 湖岸線バスも優雅な景色縫う | ばあちゃんもお米つくりに命かけ | 愚痴だけは言わぬと腹にきめました | 新盆に仏を偲ぶ灯がゆれる | 鳥取県 |
| | | | | ± | - | | | | | 谷 | | | | | 石 | | , _ | | | 黒 | | | | | 津 |
| | | | | 梧 | Î | | | | | П | | | | | 尾 | | | | | 田 | | | | | 村 |
| | | | | 睦 | à | | | | | 次 | | | | | か | | | | | < | | | | | 八 |
| | | | | 子 | | | | | | 男 | | | | | つ乃 | | | | | に子 | | | | | 八重子 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| ー徹な風の主張に負けている 外米にやっと慣れたら豊作だ 外米にやっと慣れたら豊作だ の本が湧く | 老いの坂ぼちぼち自我の帆をおろす子の画いた船は母さんまで乗せる船名へ兄弟の名を一字ずつぶやかな目元へ油断してしまう | お香典お得意さまが一人減りお香典お得意さまが一人減りよった軽い靴の人の陰では少し物足らぬがあります。 | 遊びたい孫は相手にしてくれぬ痩身度二十の夫痛ましや一ヶ月の世界でやっと一ヶ月 | 鳥取県スポーツが日の丸好きにしてしまうがケットをいくつも持っているゲスト友情という一線を引くおんなふる里の緑に濡れて再起する | 鳥取県 |
|--|---|--|--|--|------|
| 幸 | | 石 | 西 | 羽津 | 上 |
| 家 | | 谷 | Л |)ॉ | 田 |
| 単 | | 美 | 和 | 公 | 俊 |
| 車 | | 恵子 | 子 | 乃 | 路 |
| あなたの があさん | Tシャツの お摩機で夏 | 応 大 物 水 援 根 し も を | 忘ヤミ 笑 吉北の 米袋の | 青島吐息老 お金とは縁 を見しい。 お金とは縁 | |
| なたの心には鶴が飛んでいたあさんの畑に草は生えてない関で笑顔をつくりなおしてる関での場に草は生えてない | 揃アはの | せずにぼちぼち聞引く人員整理等を覗きに来た | 忘却の彼方懺悔の青春譜 やミ米の検挙へ炎えた暗い過去 笑い袋喧嘩の種も入れてある | 書きがとれても渡れぬ橋がある金とは縁のない世話気が軽いの背を見ない振りして頼られる息吐息老舗気づかう鬼瓦 | 鳥取市 |
| の心には鶴が飛んでいたの畑に草は生えてな笑顔をつくりなおしていまなしています。 | ツの揃い着ているボランティアティア玉蜀黍を売ってきたの朝はピアノを弾いてみるで夏の疲れを取っている | せずにぼちぼちせよと言う間引く人員整理かなに溺れる構図とも | 過るン島 | 鳥取れても渡れぬ橋があるのない世話気が軽い のない世話気が軽い | 鳥取市美 |
| の心には鶴が飛んでいた くりなおしてる くりなおしてる の畑に草は生えてない 鳥取県 | 揃アはの | せずにぼちぼちせよと言う間引く人員整理かな際に溺れる構図とも | 過るン島取県 | は れても渡れぬ橋がある ない振りして頼られる ない振りして頼られる | 市 |
| の心には鶴が飛んでいた 笑顔をつくりなおしてる 笑顔をひとつ埋めておく 鳥取県 西 | 揃アはの | 世ずにぼちぼちせよと言う間引く人員整理かな に溺れる構図とも | 過るン島取県 | には、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 | 市美 |

| 角の折れた鬼を一匹飼っている | 鬼も八十そろそろ森に落ち着こう | ふる里に昔の傷の跡がある | 掌の中の礫が今日もけしかける | 米子市 | 逢う逢之ぬ一枚足らぬ花占い | はずされた副木に恩をかえさねば | 父は神 母は仏の顔に似る | 漕ぐことも許してあげるだまし舟 | 米子市 | 忽然と無くす赤い実と夏帽子 | 夢を詰めてしまったわたしの知恵袋 | 老父と居るわたくしの歳ふと消える | 血の絆淡しと鏡の中の眉 | 米子市 | ありがたやまだ蛇口から水が出る | 他人なら許せる事が許されぬ | 突然に病が惚れてくれました | オクターブ上げて浴びてる人の目を | 米子市 | この指に止ってくれた揚羽蝶若いねと言われしみじみ思う歳 | 体 網戸団扇で風通しイドか高い居りは退屈だ | |
|----------------|-----------------|--------------|----------------|--------|---------------|-----------------|--------------|-----------------|-------|---------------|------------------|------------------|-------------|-----|-----------------|---------------|---------------|------------------|-------|-----------------------------|-----------------------|---------|
| | | | | 木 | | | | | 中 | | | | | JII | | | | | 茂 | | | 金 |
| | | | | 村 | | | | | 井 | | | | | 上 | | | | | 理 | | | 山 |
| | | | | 富美子 | | | | | Φ | | | | | より子 | | | | | 高 | | | 夕 |
| | | | | 子子 | | | | | き | | | | | 子 | | | | | 代 | | | 子 |
| ささにしき裏街道を往ききする | 米騒動太陽までが敵になる | 浜風が熟年離婚せき | 新人の土俵に期待埋 | | しがらみの切れぬ鋏を持っ | 笑顔一つで幸せ色の風を呼ぶ | 山ほどの恩を知って | 愚痴袋干して余生の | | 八十の若さが護る | 毬突きも石蹴りもあ | 自己破産見捨て | 無神論だが祭りには | | 星占い信じる祖母 | 歳月の重みをしかと祖 | 生きている限りな | 開会式 旗はこん | | 繕いの針 裁縫箱 | れた歩み | Î |
| を往ききする | 配になる | せき立てる | めてある | 倉吉市 | いを持っている | の風を呼ぶ | っている花手桶 | の旅を行く | 倉吉市 | る柳多留 | もある京の路地 | てもできぬ幼妻 | には着る法被 | 富山市 | 母と孫娘 | かと祖母の背 | る限り続くか背くらべ | んなに美しい | 神戸市 | 箱で欠伸する | 影法師 | 神戸市 |
| を往ききする | 配になる | 立てる | めてある | 倉吉市 最 | てい | の風を呼ぶ | ている花手桶 | の旅を行く | 倉吉市 野 | 柳多留 | る京の路 | もできぬ幼妻 | 着る法 | Ш | と孫 | 母 | 続くか背くらべ | なに美し | 神戸市 木 | 伸長 | 影法師ついて来ずつ重うなり | 神戸 |
| を往ききする | 歌になる | 立てる | めてある | | てい | の風を呼ぶ | ている花手桶 | の旅を行く | 吉市 | 柳多留 | る京の路 | もできぬ幼妻 | 着る法 | 山市 | と孫 | 母 | 続くか背くらべ | なに美し | 市 | 伸長 | 影法師ついて来ずつ重うなり | 神戸市 |
| を往ききする | 吹になる | 立てる | めてある | 最 | てい | の風を呼ぶ | ている花手桶 | の旅を行く | 吉市 野 | 柳多留 | る京の路 | もできぬ幼妻 | 着る法 | 山市酒 | と孫 | 母 | 続くか背くらべ | なに美し | 市木村 | 伸長 | 影法師ついて来ずつ重うなり | 神戸市 山 |
| を往ききする | 吹になる | 立てる | めてある | 最 上 | てい | の風を呼ぶ | ている花手桶 | の旅を行く | 市 野 口 | 柳多留 | る京の路 | もできぬ幼妻 | 着る法 | 山市酒 | と孫 | 母 | 続くか背くらべ | なに美し | 市木 | 伸長 | 影法師ついて来ずつ重うなり | 神戸市 山 口 |

| 人に人不景気平気エアポートひらめきを因数分解教えけれならばると来たぞ来たぞえ北の果て | 水不足湖底にのぞく屋敷跡 水不足湖底にのぞく屋敷跡 神寺で人生開眼して帰る | 長いとも短いとも思う人生路夢の橋ハミングしながら風の中夢の橋ハミングしながら風の中夢の橋ハミングしながら風の中 | 裏切りの女秘めてる片エクボ 島根県 世もなく学歴ばかり飛んでいる 炎天に負けぬ畑に汗流す | 旅先で拾った恋の一行詩 歳月が許してくれた風の盆 歳月が許してくれた風の盆 | 以方 |
|---|--|---|--|---|------|
| | 瀬 | 石 | 藤 | 富 | Ė |
| | 尾 | 飛 | 原 | 田 | |
| | 六郎 | 水 | 鈴 | 蘭 | 号 |
| | 太 | 煙 | 江 | 水 | ř. |
| 善と悪セットのように胸へ棲む父さんの歩いた道を避けて生きただ酒の数をこなした回り椅子ほろ苦い思い出のある西瓜泥 | 一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、一次では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、では、 | 石橋を叩いてバスに乗り遅れ 石橋を叩いてバスに乗り遅れ | が原市 熱帯夜無かったような朝ぼらけ 関高をコーラの値下げやっと知り 変まわりペダルの好きな花の道 で父乗せてトンボ舞い込む盂蘭の盆 | 原ノい言 | 富上岩市 |
| | 青 | 山 | 古 | 石 涯 | 豆 |
| | 枝 | 地 | 谷 | 原 | É |
| | 鉄 | マ | 節 | 淑 | III. |
| | 3.6 | ツ | - | 7 7 | F. |
| | 治 | 工 | 夫 | 子 | 5 |

| へな事まで話せる友 卒のなんと淋しい言 | 肩書きを下取りにして天下りカルチャーへ妻が梯子という身分 | 和歌山市 | バンザイに徹する手足惜しまない | 小走りが続き自由のない歩幅 | 備長炭と思い込ませて焼く秋刀魚 | 風一陣語り明かして茄子の馬 | 和歌山県 | お育ちがいいのね かっとなりやすい | 花一輪折り目切り目をわきまえる | 天命に順じておおらかに生きる | 結界の扇子を忘れたりしない | 和歌山市 | 単純ですぐ熱くなる嫌いあり | 疲れますしっかり者で通すのも | 平凡の二字が私の旗印 | 豊作を期待している青田風 | 和歌山市 | 放し飼いされて古巣が恋しがる | 若い日の恋が落ちてる田舎道 | あなただけ知ってほしいの自閉症 | 露天風呂おんなは石と絵になろう | 和歌山県 | |
|------------------------|------------------------------|---------|-----------------|---------------|-----------------|---------------|-------|-------------------|-----------------|----------------|-----------------|-------|-----------------|----------------|---------------|--------------|-------|----------------|-----------------|-----------------|------------------|---------|--|
| | | 田 | | | | | 小 | | | | | 榎 | | | | | 堀 | | | | | 西 | |
| | | 中 | | | | | 倉 | | | | | 原 | | | | | 畑 | | | | | П | |
| | | 2 | | | | | ア | | | | | 公 | | | | | 靖 | | | | | 忠 | |
| | | ね | | | | | サ | | | | | 子 | | | | | 子 | | | | | 雄 | |
| 一火 | 昼寝する | | 人生七 | 枯野 | 死の | 五十 | | 何 | 潮 | 美 | 振 | | ム | Я. | ħ | 私 | | じ | 嫁 | 忘 | 暑 | | |
| を習い目薬買い | 気配り郵便待っている 冷房 自分の本も持ってゆ | | い坂これぞおとこの登る坂 | いく地図塗り変える風が鳴る | 美学抱いて神さま仏さま | 五の生命を癌に狙われる | 岡山県 | とでも言わせて女強く生き | 時を見てロックする老婆心 | 人女将の会話が美味い縄のれん | 版り向けば妻が去り状振っている | 倉敷市 | ードには酔っても醒めた耳がある | 凡人で上手に世間渡る人 | カラヤンを集めた女琴を弾く | には私に合った席がある | 和歌山市 | っと耐えそっと見守るそれも愛 | なぐ日も近しリンゴも熟れてゆく | 心れたい事多くあり遠花火 | 可いあついと交わす季節が来て疲れ | 和歌山市 | |
| を習い目薬買い | 気配り郵便待っている冷房(自分の本も持っ | | 坂これぞおとこの登る | く地図塗り変える風が鳴 | 14 | 五の生命を癌に狙われ | Ш | 言わせて女強 | を見てロ | 人女将の会話が美味い縄のれ | り向けば妻が去り状振って | 倉敷市 井 | ードには酔っても醒めた耳があ | で上手に世間渡る | ヤンを集めた女琴を弾 | には私に合った席があ | 歌山 | っと耐 | ぐ日も近しリンゴも熟れてゆ | れたい事多くあり遠花 | いあついと交わす季節が来て疲 | 歌山 | |
| を習い目薬買い | 気配り郵便待っている 冷房 自分の本も持ってゆ | 岡山県 | 坂これぞおとこの登る | く地図塗り変える風が鳴 | 14 | 五の生命を癌に狙われ | 山県 | 言わせて女強 | を見てロ | 人女将の会話が美味い縄のれ | り向けば妻が去り状振って | 市 | ードには酔っても醒めた耳があ | で上手に世間渡る | ヤンを集めた女琴を弾 | には私に合った席があ | 歌山市 | っと耐 | ぐ日も近しリンゴも熟れてゆ | れたい事多くあり遠花 | いあついと交わす季節が来て疲 | 歌山市 | |
| を習い目薬買い | 気配り郵便待っている 冷房 自分の本も持ってゆ | 岡山県 岩 | 坂これぞおとこの登る | く地図塗り変える風が鳴 | 14 | 五の生命を癌に狙われ | 山県嘉数兆 | 言わせて女強 | を見てロ | 人女将の会話が美味い縄のれ | り向けば妻が去り状振って | 市井 | ードには酔っても醒めた耳があ | で上手に世間渡る | ヤンを集めた女琴を弾 | には私に合った席があ | 歌山市北 | っと耐 | ぐ日も近しリンゴも熟れてゆ | れたい事多くあり遠花 | いあついと交わす季節が来て疲 | 歌山市 玉 | |
| を習い目薬買い | 気配り郵便待っている 冷房 自分の本も持ってゆ | 岡山県 岩 道 | 坂これぞおとこの登る | く地図塗り変える風が鳴 | 14 | 五の生命を癌に狙われ | 山県嘉数 | 言わせて女強 | を見てロ | 人女将の会話が美味い縄のれ | り向けば妻が去り状振って | 市井上 | ードには酔っても醒めた耳があ | で上手に世間渡る | ヤンを集めた女琴を弾 | には私に合った席があ | 歌山市北山 | っと耐 | ぐ日も近しリンゴも熟れてゆ | れたい事多くあり遠花 | いあついと交わす季節が来て疲 | 歌山市 玉 置 | |

| 最高の贅沢願う安楽死 | 負けるが勝ち知ってはいるがすぐ忘れ | 沈黙と言う抵抗にある強さ | 老いの膝乗り出す空襲体験談 | 交野市 福 | 漢薬を信じて巡る年の嵩 | 文机に喜怒哀楽を書きなぐる | カレンダーの赤マル楽しく取ってあり | 黙り込む術で抵抗する積り | 和泉市 西 | 企業戦士の妻はのんびり趣味にいき | 苦しかった話肴に飲む仲間 | 一本のマッチとなった風の中 | 千代紙の色美しくだまし船 | 枚方市 海老 | うちのコロ脳こうそくとは人間並 | 火葬場でこわかった亡父の骨ひろう | 世の流れ少しおくれてついて行く | 古希過ぎてまだ高望み手相見る | 池田市 岡 | 機能 経済 効率世の中きしむ音 | お互いの馬鹿さ加減を笑いあう | 自惚れの顔を時々たしなめる | 裏側の重みは見せぬよい笑顔 | 岡山県 江 |
|--------------|-------------------|--------------|---------------|-------|---------------|---------------|-------------------|---------------|-------|------------------|---------------|---------------|---------------|--------|-----------------|------------------|-----------------|----------------|-------|-----------------|----------------|---------------|---------------|-------|
| | | | | 崎 | | | | | 岡 | | | | | 老池 | | | | | 本 | | | | | П |
| | | | | しげお | | | | | 洛酔 | | | | | 洋 | | | | | 吉太郎 | | | | | 有一朗 |
| 清貧は奥まで風がよく通り | うかうかと過しもせぬに悔 | 奥義までの歳月語る白い髪 | 勝者など無い戦争の深い傷 | | 勲章のように手術を自慢する | 陶酔のできぬ私の自己嫌悪 | この人も逝くか握手の手に触 | 炎暑です酷暑です猛暑ですは | | 和蠟燭おがむ姿にもえつきぬ | 種うめて桃栗三年待とうかな | 桃の味台風ニュース聞きなが | なれるとは今日は涼しや三十 | | 何げなく言って差別語指摘さ | 灼熱へ泰然と咲くサルスベリ | 泡をふく酷暑 金魚もわたく | 脱がせたり着せたり孫の頭数 | | ポケットにどんぐり入れた遅 | 与党復帰 蛍が戻る甘い水 | 子の食事祭りばやしに落ちつ | 中間色好きで出世も遅れがち | |
| | い多し | | | 寝屋川市 | | | 点れず | 13 | 吹田市 | | | 6 | 度 | 吹田市 | n | | しも | | 吹田市 | 刻の子 | | かず | | 茨木市 |
| | 10 | | | 屋川 | • | | n | | 田 | | | 6 | 度 | 田 | ħ | | しも | | 田 | 刻 | | か | | 茨木市 藤 |
| | 10 | | | 屋川市 | | | n | | 田市 | | | 6 | -度 | 田市 | n | | しも | | 田市 | 刻 | | か | | 市 |
| | 10 | | | 屋川市 堀 | | | n | | 田市瀬 | | | 6 | -度 | 田市栗 | n | | しも | | 田市 茂 | 刻 | | か | | 市藤 |

| 灯台が仏のように見えてきた | 覚めれば三十二度の午前二時暮ったいままでおってや村山はん田町見てると嫌になる祖国の飢餓もこの飽食も知ってる胃 | 紫陽花の色に溶け込む雨蛙紫陽花の色に溶け込む雨蛙出れる | 第 市 まらめて磁石は今日も北を指す 楽か地獄かネオン美しい 楽か地獄かネオン美しい 楽が地獄がネオン美しい 場がである。 である。 である。 である。 である。 である。 のが、 のが、 のが、 のが、 のが、 のが、 のが、 のが、 |
|---|--|--|--|
| 吉 | 中 | 岩 | 椎 |
| 田 | 田 | 津 | 江 瀬 |
| 笑 | 純 | ようじ | 清福 |
| 女 | 次 | É | 芳 一 |
|) 7 6 44 11 1 2 15 | | | |
| はいきさつはどうあれあかんのはあんたいきさつはどうあれあかんのはあんたいきさつはどうあれあかんのはあんたがきさつはどうあれあかんのはあんたがしいと気丈な友がふと洩らすがしいと気丈な友がふと洩らすがしいと気丈な友がふと洩らすがらみを解いたらとてもよい女にある。 | トレスを発散できぬ律気店れているのは私より財られているのは私より財ることがいっぱいあって | 児の寝顔しずかに急ぐ夕支度 息子二人虹がかけない老夫婦 三姉妹会えばせき切る孫自慢 | とは見えぬ車内ら親父謝る図で日に母は冷たく |
| らみを解いたらとてもよい女にのぼせるほどの暇がないと気丈な友がふと洩らすいと気丈な友がふと洩らすいと気丈な友がふと洩らすいと気丈な友がふと洩らすので字が似合わぬ口語文 | レスを発散できぬ律気者して孫が主役の座を占めるれているのは私より財布 | の寝顔しずかに急ぐ夕支度子二人虹がかけない老夫婦子二人虹がかけない老夫婦がならえばせき切る孫自慢 | 大阪市 清 は冷たくなりました (母死亡) は冷たくなりました (母死亡) 動る図ではない 最の空寝入り |

| 第ペンの墨色きらう正統派 にげゆく若さ年輪の美を模索する うつろいの歩幅に合せてはんなりと 音をあげず猛暑を洗う洗濯機 音をあげず猛暑を洗う洗濯機 一手になる時もある親心 でレーキになる時もある親心 | き訳えの | ではずいて何かと見れば何もないでまずいて何かと見れば何もない。 夢でいい一目逢いたい同期生 が表してくれず | 炎天に暦通りの赤トンボ 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 大阪市 |
|---|--|---|---|
| 崎 | 中 | 堀 | 寺 松 |
| 山 | 野 | | 井 尾 |
| 美 | 櫸 | 良 | 東柳 |
| 子 | 子 | 江 | 東 柳 右 雲 子 |
| 電際の椅子はガタガタよく揺れる を際の椅子はガタガタよく揺れる を際の椅子はガタガタよく揺れる を際の椅子はガタガタよく揺れる を際の椅子はガタガタよく揺れる | 要は海しいものと知る で外吸 愛は寂しいものたりかな での夏は猫もわたしものたりかな である。 である。 で入の運不運 | 餓死の無い国に生れて金がない橋の名を残した船場中央区橋の名を残した船場中央区 | たにさえ以心伝心好き嫌い 大にさえ以心伝心好き嫌い 大にさえ以心伝心好き嫌い を見ず来る日来る日の町暮し |
| 井 | Ξ | 辻 | 江 指 |
| 上 | 宅 | JI] | 口宿 |

慶子

明光

つえ子

直次

| りかけ 大阪市 渡 | コメ不足水不足と何不足 水不足 墓に名水かけて上げ 上尾市 松 喜 | . 肪 店 | 百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百百 | しらを切る目もとに妻の風当り 追伸に母の鼓動が打ってくる 大阪府 八十田 | 恐竜は好きとかげには逃げていく埋め立ての島にすすきの穂がゆれる好きだからなにげない顔してしまう一本の線引いてやる親ごころ | 不眠症不倫の恋の後遺症 | ごけ虚さくしこ |
|--|---|--------------------------|---|--------------------------------------|--|-----------------------------|-----------------|
| 部 | 高 | | | Щ | | 田 | 100 m |
| さと美 | 秀 | ; J | L | 洞 | | 能 | 柳 |
| 美 | 峭 | } = | F | 庵 | | 子 | 弘 |
| 謎を解く鍵はあなたが持っている思いやる心忘れたホトトギス定年後の夫が急かす腹時計 | 虹消えて空いっぱいの蟬の声朝の虹黄色見つけたすぐ消えた朝の虹黄色見つけたすぐ消えた | 日コロと弄ばれた第九条 骨が役所で軽くあしらわれ | 見丁の遂い中末ない畐止 川西市 | 甲子園の土へ青春詰め帰る四十日続く浪花の熱帯夜応援も球児も燃える甲子園 | 年金のおかげ家計簿独立する 度忘れた言葉が喉に引っかかり | 夏休み子供の群れていない町敗戦忌語り部消えず灯をともす | 言い訳の下手さにじれる舌たらず |
| | 山 | 近 | 松 | | 清 | 乾 | 블 |
| | | 藤 | 本 | | 水 | 喜 | X |
| | 三 千 子 | 豊子 | ただし | | 利武 | 与志 | 美習子 |

和 田 市 寺 田 甚

真 歯 切 n よい 言葉温もりなく過ぎる

正 外科日 直ではないが嘘つきでない 課 のようにして生きる

Ш

池

 \mathbb{H}

半

仙

三度目は仏 の顔も鬼となり

尺玉 昔から見れ がどかんと消える夜 ば少ない 星 0

大阪市

Ш

端

歩

肩たたき券孫 がはすっ か うぶ n てる

地下鉄を老人パスで涼もろた

朝とタサラリー マンの違う顔

一般市

前

枝

の風するめ干す手を急き立てる

浜

炊飯器ブレンド米の唄うたう 好 べきの 墓前で交わす缶ビール

物忘れどうでもよい 事憶えてる

枚方市

 \mathbb{H}

敏

鏡 のぞく米 寿の母は まだ女

は婦唱夫随でケリ がつき 倉吉市

米

田

幸

子

争えぬ血 奥さんが のつながりが孫に出 知らず知 らず に出る

ウインクの届くくら

0)

位置に立つ

2 0 内 助 夜 明 け 前 か 6 朝 0) 膳

岸

和 田

市

藪

17

Va

子

縫針 に 老眼 鏡 がい る年

0 寝息うか がい ながら 読 むスリラー

JII 柳

塔碑」合祀について

されて以来、 ならびに川柳愛好家の拠金により「川柳塔 成 元年 + 今日までに一五二名 月十二日、 高野山· 0 大霊園に 柳 人が合 碑 同 記され 人 が 建 立

八月の盂蘭盆会に合祀法要を執り行っ 従来、 同 碑 ^ 0 合祀はた 毎 年七日 月 七 日を締 て参りましたが、 切 日として

今年から十月十日 月十二日に合祀法要を行うこととなりまし を締切日として建 立 除幕 記 念日 た。 0

十月十日までに川 きましては合祀 柳塔社事務所へご 0) 申請および合祀法要 連絡ください。 0 参列

古市三千代・谷垣史好・ なお、 本田 松村迷観子·友広千恵子· 今年七月現在 清 神谷凡九郎の十七氏です 江口葉子・ 葉子・加崎正雄・北山越山 在における新合祀予定者は、 山根いつを・岩本雀踊 羽 原 静 步 古川 子 覚然坊 林花仔 神保

— 39 —

やたら に少 生 寿 きの 司 自 搔 隙 だ 見 いて売れ か せてい 巻よく似 る洗 ないもの 髪

月

原

宵

明

も長頭背お

乾 たかと塗り立てに触れて見る 歯 茎 なんでも食べ てい 3

3

出

小

智

子

足

西

瓜

を

掘

る

小

西

雄

17

小

満ち 鬼にも浴衣 潮 に見えか

< P

n す

する親

せ

肩

車

オー -クショ た 石 10 油 断 を諫 8 られ

ンが苦手で煮え湯飲まされ

野 村 太 茂

п 住

遠

Ш

空赤墓

き缶 ちゃんが泣

の一つぐらいれが泣いている てよかっ

らいが守られずているのも懐かしい

10

還らない ごてごてと言

友よ灯台のと言い訳

灯せぬれ せ 居

しよう

る視

0 は

けを決

8

る五輪

書

みなが

b 恒

松

叮

紅

読回

を買っ

う泳

たた寝をした

* 里

げ

な

10

JII

故

を 時

でがうらめて

老兵 生真

面

H

有

能

面

白

味

な

男

の八月正

常

では

無ぬい

まだ

長

もり

43

0

欲

かい

出

る

その上に氏子檀 せ 乗る心配 は 6 揃う かカ 茶碗 がな V 一家がの 1 と鰺 行行が 金 匹 青 あ n 43 空

尋中ひ背

心

12

座

る

頑

固

な臍

がい

ま終る ある

寄せてくる

常

な汗と思えぬ家を建て

しとすじる

の近

合

をする

0

L

び 所と談

L

した口まで水が安

ひたすら 木行商 捨 冷八 山絵 太 鳥 閉 道 しポ 夏 コミカ 陽 め忘 日 匹 ケット を分け て猫 静 + 頂 0 10 b 0) 連 んみりと抱 で水水 傘 3: に 路 ŋ 0 が n n 空き荷 とい か 0 な n 蛍 た なると言葉も丸 坂 0 西 0 n ル た籠 で に灯 ば 住 楽 U 合 12 とても 0 か 奥でぼう 2 荷に託 瞼 う 演 2 旨さを讃え合う うて涼 n 6 籠 から ます が雨 きます つい 0 振 円 Ľ 火ほどの 出 を 玉の 元気 椿 た 裹 n た嘘に攻め 蛍出 6 ならよい 3 2 母 たまま早や五 す仕立ても 0 返 0 しさ深うなり な心 ぬ現代 と灯 るも 母 どうし 葉 0 クリーニング 雨 愛を抱 くなる 0 0 て 籬 がを点す WD 陰 電 濡 0 スタート まし 籠 つ子 0 か 6 n が だ D な 0 だ n < かい 1 る 年 て 水 久 八 藤 家 粉 村 木 代 Ŧ. Ŧ. 仕 男 代 翁 女 抱き合っ カラ 買う 老体 今頃 夏さな 十月 腕組 戦 怖 「天寿を全ういたしました」と同 路郎忌も過ぎてねぷたが近 家 除 け 争 たらなく蟬とちい 言 が だ 13 生 で自 恋を知 機 に 0 6 数 あ ほどすらすら が 0 h か放 ケの がが 3 だ 前 青 骨 根 風 せずとに 男が二 たまま 己主 减 向 春 までじ 来 13 か だっ よう 肩 きに 帰 6 b 0 0 お 0 たら ŋ 張 なら 2 打 坂 に来 角 嬉 ような する 酒 ピア なる たとは不幸 人 開 か か 生 嘘 邪 か お 屋 策 L 生きて居 た さい Ľ が 魔 た夫婦 L 後 K なく 赤 くる暑さ 0 61 ta てたた になり ち 気遣 出 紙 n 0 0 7 Va + 音 終 て終 た 方 孫 4 乗 吹 3 稲 た地 くなり h る終 雪 0 用· b かい 12 + す 穂 通 孫 地 n Vi 17 電 3 り球 蔵 船 道 車 有 I. 児 野 島 田 素 与

芳

仙

身郎

甲

呂

波 多 野 Ŧi. 楽 庵

\$ を出 0 妻も帰 鶴 7 か 淚 を拭 飢 82 文 終電 Va ただけのこと 声 車 かい 出 3

うつ 0 家だとも 6 知らずに嫁ぎしや

夏瘦 せと言える程度の 病なり

辻

白

渓

子

取られても 手な字をカ 知 n ル ている テに 書 0 10 12 7 油 61 る名医 断 せず

下

テート 用もこなして幹 代 余裕ない 事行き届 とは 言 10 に <

63

落目に

味

方してくれ

小 林 曲 多

新

大

臣

古

里

晴

n

た

お

玉

入

JII 杜 的

松

景気 五 + 4 肩平 Ŀ 0) 向 気 1 寿 に 見習う 若さを貯 なっ 7 JII ショ めて 柳 観 1 13 (紫香先生迎米寿 ル A

藤

井

明

朗

神 :楽見て思 10 出深 くなる祭

名所さくらきすきの斜張 橋 (木次大橋開通

手 お 0 づえをついてる姿見せてお なる 方 付 10 て行くとは かぎらない 正 本

水

手のうちをさら 13 け出してるように見え

花 3 人も はチワワをつれてたよりな 雨待ち b びる手をひろげ

女には甘い で付をし る 奴が 本 太れれ た釣 音 かい 方だとうわさされ 鐘 るように世 42 0 か 43 狂 7 みたくなり 一が動

漳 る 権 かい n 日 利 「ズボ 来 話 知 返 7 補 0 5 7 さぬ 11 聴 を脱 ない 器 2 つけ 規 からホ か BI て取 2 押 だまま過ごし 風 L .7 呂 返 0 たの とする 場 覗 12 か

れる

間

吊

0 アッと言

何

時

でつつ

づく真夏日

1

経

0

う間

0)

南

無

阿

弥 ば

陀

お

車

で安い かい

ル 盆 ま

を買い

に行

灯 りし

似

合うて 3:

0

仏さま

寄

せ

算

も引き算

1

下手

か

n

知

お 工 13 野 义

2

8

げにべ

スト

セラー

を

一冊買

う

1) さり 次馬

1 火

0

船

も

横

波

12

は弱

の中の

つに父が居

る

書

館

0

涼

しさ

書

はず

,ませ

る

0

U

とり 読

は

おとなし

12

秋

文

金

井

朗

奥

谷

弘

-42

資 産 三公開 退 1 もう 度

孫 目 木倒 は が合うた時 孫 継 伸 びる n 、若木へ 個 か 継 3 性 から を楽しもう 続 n 陽の < 7 お人柄 終 恵み 戦 H

> 大 矢 + 郎

n あ 向 b 1+ せ ば 0 噂の n L お h こんは穴を抱 なモジリアニ 3 高

L

鬼

缶

ピー が

ル

ゴ

た

銘

酒 燃えない

が秋を待ってい

病

み

暑く

て永

夏だっ ミの日を数え

西 田 柳 宏

ら定 従来 てい 慌 歴 影と像のように 郵 てふためく不意 訪 0 価 便 けずをしています など止めよ 51 物 6 0 円 料 金 0 が 円は当分、 84 かい 円となっ 1 居 月 3 0 23 客 てい 据 月 置 0 ます。 2 0 まま送 段 階 7 料 0 値 共のかけ Ŀ

15 戦

あ

夫婦

スタオ 争

ル る

U H

より

7

色即

是

定空無

終

文化 全 る三大年間行事ですので、 H 2祭文芸大会と並ぶ社団法人全日本公回の歴史を持つ全日本川柳大会、1日本川柳誌上大会」を昨年につづ 本 だれ でも、 こぞってご参加 年につづいて開催します。 どこからでも参加 九回 JII 柳 ください。 協会の権威あ 「を数える国民

題 と選者 (各題2句 連 記

加 五 「ときめき」 少快 平成 2 大臣獎 6 0 年 12 0円 野口 石井 江 佐伯みどり 分励賞 月 (投句料 、第19回全日本川柳長野大会 31日出 東白 初 「平成柳多留」第2集代) 山 広 瀬 田 柳 反省 宏沢竜子心城 共共共共共選選選選

発 締 加 方 所定 平成 費と共に左記へ(用紙は請求くだされば送ります)。 7 年6 紙 に各題2句と雑 Ă 詠1句を書き、 日本川柳長野大会

社 ₹ 530 団法人 全日本川 大阪市北区天神橋二丁目 北1| 11 702

謹

代を半

年分

4

0

0

0

再

1

年分7

9

Ö

改定

かか

させて頂きました。

され 9月

3

種



「講談社はじめ諸雑誌の投書家であった私「講談社はじめ諸雑誌の投書家であった私は、その二十五年の生活から井上剣花坊先生は、その永い間の憧れにヤキモキしつつも、どうその永い間の憧れにヤキモキしつつも、どうか先生へお近づきしたいと思ううち、たまたま、私の三女が一月元旦に出生したので、こま、私の三女が一月元旦に出生したので、これは私の川柳生活の記念に、ぜひ先生に名付親になって頂こうと思い、心中如何かと一抹の不安を持ちながらあつかましくも先生へ、その依頼の手紙をさしあげた。

を悲しんで先生の別の短冊 く物心ついた尋常二年生の歌子は、 ゆっくり祝吟でも差し上げましょう。 たる方です。多忙ですから要用のみ、 人で、三宅花圃と申され、樋口一葉の師にあ 申し上げた人。また中島歌子という有名な歌 の華族女学校長)畏くも皇太后陛下をお教え からこのくらいの名を付けてもいいでしょう。 で、どちらにしてもただものではないのです 上は太閤秀吉より、 旋風のように伝わった先生の死に、ようや このあと先生から、歌子嬢にまいらす。 昭和二年一月五日 剣花坊印. 歌という字は、明治の大才媛の下田歌子(元 鶯の歌で溶かせる梅の雪 下は清水次郎長に至るま 先生の死 剣花坊

の前に端座して合掌久しき姿を見たのも哀しの前に端座して合掌久しき姿を見たのも哀しい思い出の一つである。豪放磊落な先生の半というのも、如何に先生が円満な人格を持っていられたかを物語るに充分なものがあろう。いまや先生は、幽明境を異にせられしとはいえ、その言、動、また魂は永遠に生きて川柳え、その言、動、また魂は永遠に生きて川柳え、その一端をうけついで永劫に変ることなく、た生の御名を汚さぬよう、誓うものの一人で先生の御名を汚さぬよう、誓うものの一人である。

(1) 台市生れ。市立仙台商業卒業後、鶏卵店を営 兵夢助・本名喜三郎。明治23年4月20日仙 浜夢助・本名喜三郎。明治23年4月20日仙 八昭和九年十二月号川柳人所載)=要約 みちのくの果に守らん巨木の根」

母の代に、扶持を離れた暮らしのための渡世 明治維新の折、渡辺家の分家に当る祖父・祖 伊達政宗が米沢から仙台に来られ、城山を築 いた昔は、その政宗公に扈従して移り住んだ いた昔は、その政宗公に扈従して移り住んだ いた昔は、その政宗公に扈従して移り住んだ いた昔は、その政宗公に扈従して移り住んだ いた昔は、その政宗公に扈従して移り住んだ いた昔は、その政宗公に扈従して移り住んだ いた昔は、その政宗公に の姓名が変ったことは知る由もないが、遠く の姓名が変ったことは知る中心である。

から歌子としておきました。正月元旦生れは

黎明の大気の中に開く花

『はじめ詩子としましたが、面倒でしょう

つぎのような添え書があった。

『浜夢助君第三女・命名・歌子』に花印をお

長月の十一日は巨人の日

うだ。(『川柳人』雑記)で、「川柳人」雑記)で、「川柳人」雑記)で、「川柳人」雑記である。この浜稼ぎの仲買人や漁師たちが、いつる。この浜稼ぎの仲買人や漁師たちが、いつる。この浜稼ぎの仲買人や漁師たちが、いつるが、が。(『川柳人』雑記)

歳から川柳一筋に入り、昭和4年には河北新 で知られた。彼の初号は俳句の真砂だが、21 で知られた。彼の初号は俳句の真砂だが、21 を興したのは大正2年で、『大正川柳』の常連 を興したのは大正2年で、『大正川柳』の常連 を興したのは大正2年で、『大正川柳』の常連 を興したのは大正2年で、『大正川柳」の常連 を興したのは大正2年で、『大正川柳」の常連 を興したのは大正2年で、『大正川柳」の常連 を興したのは大正2年で、『大正川柳」の常連

昭和11年川柳北斗社を創立したが、これに 日東北柳壇で著名な柳樽寺の大谷五花村に、 は東北柳壇で著名な柳樽寺の大谷五花村に、 報柳壇選者となっている

死に絶えたやうな雪国今日も暮れ 夢助 死に絶えたやうな雪国今日も暮れ 夢助 雪国に生れ無口に馴らされる "雪国に生れ無口に剔らされる"にのは前記二人に夢助の三人のリーダーだけたのは前記二人に夢助の三人のリーダーだといってよい。

よって開花した。 機関誌『川柳宮城野』(昭和22年10月創刊)に 柳界は、戦後、夢助を主幹とする宮城野社の 明寺によって中断されていたこの東北の川

「浜さんの還暦を記念して、今度、『雪国』「浜さんの還暦を記念して、今度、『雪国』を書いたことがあったが、この観察は今も変と書いたことがあったが、この観察は今も変と書いたことがあったが、この観察は今も変と書いたことがあったが、この観察は今も変と書いたことがあったが、この観察は今も変と書いたことがあったが、この観察は今も変と書いたことがあったが、この観察は今も変とまた。

虚に述べている。

闘いであった」(同・序文前田雀郎)き姿を求めての、常に十七文字とのはげしいき姿を求めての、常に十七文字とのはげしい以来の創作活動というものは、川柳の在るべ以来の創た活動というものは、川柳の在るべいでは知らず、剣花坊を失って

楼が次の序文(要約)を書いている。にも死去前夜の雀郎が序文を寄せ、白石維想うど十年目の昭和35年の刊行であった。これうど十年目の昭和5年の刊行であった。これ夢助第二句集は『をぐるま』で、そのちょ

とで、多くの人の共感を呼んでいる」とで、多くの人の共感を呼んでいる」ということが浜夢助という人のすべてある、ということが浜夢助という人のすべての風雪の柳歴が濾過されている。泣いたり叫の風雪の柳歴が濾過されている。泣いたり叫の風雪の柳歴が濾過されている。これが浜さんが常識の一句一句には五十年を語っている。浜さんが常識の一切の歴史で

夢助句集二冊を手がけた編集担当の所感を謙無上の光栄です」と述べ、同人後藤閑人の、配り、『…親類だけに二段聞き』ともなれば、集雪国は、僅か三百部で、今回も知人だけに集雪は、でいりに、第一句とがきで夢助は「第一句

昭和35年10月30日、第二句集の発刊を見き昭和35年10月30日、第二句集の発刊を見きおかたように脳溢血で死去。70歳。大智院喜おめたように脳溢血で死去。70歳。大智院喜の公園に「雪国に生れ…」の句碑建立。

▼次号は「田辺 幻樹」

柳籠裏三篇研究(11+111-)

紀内恒久・西原 亮八木敬一・七久保博・岩田秀行瀬川良夫・青木迷朗・佐藤要人

鈴木倉之助 故岡田 甫

其夜からそばで三ばい女郎喰ひ 麦茂

瀬川=三会目の句であろう。それまでよそよれ。三ばい、はことばのあやでひっかけたくは、三ばい、はことばのあやでひっかけたくば、三ばい、はことばのあやでひっかけたくは、三ばい、はことばのあやでひっかけん

こともあるが、主題句は三浦団のことではなの意だけと思う。敷初めの句なら蕎麦というの意だけと思う。敷初めの句なら蕎麦というは、客の近くへ寄って

うに考えていました。

うに考えていました。

うに考えていました。

西原=そばは佐藤氏説。 がを沢山貰い過ぎたのか。 敷初-蕎麦。三ばいは三蒲団にかける。ソ

鈴木─索引には「蕎麦で三杯」とあり、それが子―索引には「蕎麦で三杯」とあり、それ

岡田=三会目。索引の「蕎麦」は誤り。

293 聟のおがむのがおもしろさにさそひ 三也

理に誘い出そうとする。婿はそればかりは勘はままならぬ。それをドラ連が面白がって無ら花だけで、あとで遊里へそれるなんてこと瀬川=入り婿はとかくあわれなもの。花見な瀬川=入り婿はとかくあわれなもの。花見な

青木―賛。 入むこはこれでお別れ申します

0 20

入聟はお慈悲~~と正燈寺

誘われた返事に聟は然るとこ

鈴木・岡田=賛。

294 麦をわかつて尋出す村の色

海川=田舎における男女の色事。あいびきな がは麦畑がよく利用された。またやってやが る、とばかりと親たちの詮議の手が伸びる。 またいうとこ

いろりにてくどきおとして麦の中

佐藤―賛。野良出合を匂わせた句。 まだのびもせぬにもう来る麦ばたけ 七55

村の色おじやるべえかと筵さん 二五14

西原=賛。「村の色」の句に、

鈴木・岡田―同。

郷川=百人のうちに大屋ハ壱人リ也 ・ 狭衣

青木―賛。

弁してくれと拝む情景

明八桜5

家持をいへもちと読む大屋の子 中納言いへ持と読む新大屋 一四〇3 五五15

鈴木・岡田=同

塩をもらふやつさとけんしんいゝ 間々

不安。友情のつもりでやっておきながら、腹 と、少々いい気になっている謙信の様がうか の中では、なあに俺から恩を受けた奴なんだ とは有名。この句はあまり分かりすぎていて 瀬川―上杉謙信が武田信玄に塩をおくったこ

青木=賛。図太い信玄を揶揄した句 越後から塩の廻った甲斐もなし

五九16

がわれる。

ここは「なんとまで図々しくも俺から塩をも 岩田=「一やつさ」という言葉には、 と揶揄性をこめた微妙なニュアンスがある。 い甲斐のなさ塩の恩水にする 八 23

鈴木・岡田―同

らいやがった」という感じだと思う。

297 瀬川 = 源頼朝が鶴ヶ岡八幡宮の社頭において 金の降ルやうに鎌倉中ゥへミへ

五楽

その様はきらきらとして、あたかも金の降る 片足へ金の短冊をつけてあったといわれる。 千羽の鶴を放ったという故事。その時、鶴の

ようであった。

千羽舞ふ時は黄色に日があたり

五八11

り、それに記す。ただし、この本は偽書と江 岡田=鶴ヶ岡八幡宮に、頼朝日記なるものあ 鈴木=この俗説、どこから発生したか不明 鎌倉を羽根のはえてる金が飛び 三四12

戸の学者もいっている。

がなく、

298 ひぢを曲ケ枕としてるねはんぞう 芹丈

其中」の文句取り。釈迦入滅の有様を描いた る図で、「ひじを曲げ枕として寝る」との語 涅槃像はなるほど北首右脇西面して伏してい 瀬川―『論語』述而篇「曲肱而枕之、楽亦在 に当てはまる。単にそれだけの句

鈴木一賛

肱を曲げ枕草紙読んでゐる

末三9

間男をいんだりにするずるひ事

五帆

岡田一同

はない。そこでこの亭王、その間男の女房か だらしないというもので、あんまりいい図で 瀬川=「いんだり」は『俚言集覧』に のは、とる女房も悪いけど、とられる亭王も 除して勝負なきをいう」とある。間男なんて 「相乗

> 咄にでもありそうな話 を取り立てたと解しています。だから「ずる 七久保―この句はいわゆる美人局で、内済料

ひ事」が利いているのではなかろうか。 また、数の中には、めがね違いで間男に金 取りほした上で間男よばりする 八12

なども起こりつる。 女房の落度間男不如意なり 安九松3

に述べたものと思う。 く、要するに金を取っただけのことを大げさ 西原=七久保氏説に賛。 しかし、 美人局でな

ない意だから、お互いごっこの方があるいは 岡田=鈴木氏と同。ズルイは色事にダラシが 「いんだり」の用例がほしいところ。

第三十回きゃらぼく忘年句会ご案内

ところ とき 米子国際ホテル(JR米子駅) 12月4日(日)午後零時半締切

手帳・垣・響く・土偶・結ぶ 椅子・沖・棚(各題2句)

なんかを寝取って相殺にしたという意か。小

鈴木―間男されたやつが、内済料をとってす

ませたのか、相手の女房で帳消しにしたのか

秀句鑑賞

同人吟奥田みつ子

9月号から

ただ、川柳の視野は広く、詠み方も、鑑賞 ちに月日が経ち、今頃になって、川柳のこと ちに月日が経ち、今頃になって、川柳のこと ちに月日が経ち、今頃になって、川柳のこと す。何となく、フワフワと句を作っているう す。何となく、フロフロと句を作っているう

を詠みたいものと念じてはいるのですが…。分かりやすい言葉で、リズムの整った深い句と思います。温かい目をもって、快い響きのと思います。温かい目をもって、快い響きのの仕方もいろいろあり、正解は一つではない

カードが怖いそんなことではなんとする

たに落ちこぼれるだろう。 西 出 楓 楽に落ちこぼれるだろう。 西 出 楓 楽

寂しいと言えばいいのに馬鹿笑い

されている。妻の胸にジーンとくる。 定年後(?)の男の人の淋しさがよく表わ 田 中 紀美代

真夜中にハハンあすこで忘れたな

高 橋 千万子 る。「あそこ」でなく、「あすこ」が面白い。 る。「あそこ」でなく、「あすこ」が面白い。

森を抜け小さな影と連れになる

も想いを巡らせることができる。

若かりし妻の姿で娘が嫁ぐ

とべそうでとべない古希の水たまり とべそうでとべない古希の水たまり と娘。父親の胸のうちは複雑で、美しい花嫁と娘。父親の胸のうちは複雑で、美しい花嫁とが、いつの間にか涙で霞んできたのでは。 とべそうでとべない古希の水たまり とべそうでとべない古希の水たまり とべそうでとべない古希の水たまり とべそうでとべない古希の水たまり とべそうでとべない古希の水たまり とべそうでとべない古希の水たまり

思い切って跳んだら何か開けるかも。が、きっとそうだろうと頷けるものがある。が、きっとそうだろうと頷けるものがある。天 正 千 梢

どんな村こんな村だという誇り

答え。そして、誇らしく胸を張っている姿ま上五から中七にかけてのリズミカルな受け

見る方が勝手に焦るかたつむり

で見えてくる。

ちな現代人の目が哀しい。かしいので、ゆっくり這うのが自然。せっかかしいので、ゆっくり這うのが自然。せっかかたつむりが百足みたいに早く動いたらお

人の和へだまって笑顔見せておく

飲みこんで、にっこりすることも必要。

道草をしてると友によく出逢う

は重礼賛。傍目もふらずに一途に進むのも 道草礼賛。傍目もふらずに一途に進むのも

受け継いだ太鼓のひびき忘れまい

今ここでやめてしまえば負けになる

はなく、自分に負けると言いきかせている。 と思った。でも、止めたら、人に負けるので は知らないが、私は、何度も川柳をやめよう 艶子さんが、何をやめようと思われたのか

眠れる獅子が起きて来た風の彩

これから、どのようにドラマが展開するの 風の彩がよく効いている。

うまそうな赤ちゃん運ぶ乳母車

可愛さって、分かる、分かる ないが、ホント食べてしまいたくなるような 赤ちゃんを「うまそうな」とは穏やかでは 子

石地蔵 帽子が欲しいなと思う

の『笠地蔵』を思い出させる られるだろうとの、一路さんの優しさ。昔話 今年の猛暑に、お地蔵さまも音をあげてお 時広一

わがことになれば話は別である

ると、途端に答がうやむやになってくる。 が本当にそんな状態になったら?」と聞かれ と、実に立派な意見ばかり。しかし、「あなた よくアンケートなどに答えているのをみる 風

深き瞳の人と聖堂までの坂

う。思慮深い年輩の男性のような気がする。 まいと、耳を傾けて登る坂が見える。深き瞳 無言か、または、訥々と語るのを聞き洩らす 恐らく、深い瞳の人とは女性ではないと思

と考えると全然違う情景になるが…。 子に掛けるどこまで掛ける縄梯子

と聖堂までの坂が動かしがたい。もし、女性

りする。縄梯子が言い得て妙。 幾つになっても子供は子供。親は心配ばか

真夏日は花も無口になっている

さんには花のつらさもよく分かるのだろう。 酷暑には人も青息吐息だが、花好きの君子 鬼も蛇も帰っておいで淋しいよ

疑えば鬼が聞こえる蛇も見える 岩津ようじ

が痛いほど分かる。 の何と可愛く見えることか。淋しい時の気持 鬼と蛇の句を並べたが、朱夏さんの鬼と蛇

仕立てられた。特に鬼が聞こえるとは、省略 のきいた面白い言い回し。 「疑心暗鬼」をようじさんが上手に川柳に

正気 狂気 つぎはぎ今日も生きている

「生きている」と強く結んであって救われる。 るが、確かに誰もが思いあたることではある。 正気・狂気という言葉にドキッとさせられ 佐 治 千加子

男とはいつも心に虫を飼う

らないが、そう言われるとそうかも…。 男の人がどんな虫を飼っているのか、分か

人は山に登ると叫びたくなる

中山

ないだろう。三三三メートルの東京タワーに 上って叫びたくなるとは思えないから。 荒削りゆえに人目をひく魅力 自然の中の解放感か?高さだけの所為では

小倉アサ

はなおさらのこと。荒削りの言葉も佳い。 人も、物もチマチマ、コセコセした現代に

夏

落ち込んだ谷間で母の鈴が鳴る 佐々木 鳳

慰めてくれているに違いない。 吸いこまれるほど。その青空の下で、何をし かすかに鈴の音が聞こえる。きっと亡き母が ても、うまくできない自分を責めていると、 に夏の疲れが出る秋の初め、空は高く澄んで どうしようもなく落ち込むことがある。特



黒

Ш

紫

香

選

大阪 市 藤 森 小 雅 子

年金 ジャ 点秋 滴 一で暮らす臑まで齧られ ンボくじ当った夢の夢を見る の上手い ナースの白 V 3

B

同 Ľ

菜 を

57. が抜けた路地裏なつか L 田辺市 む

人間 良 一 市 一 港 一 港 一 港 一 港

愚かな鬼を風と呼 二つ合せて夫婦

ぶかな 拗

ां

水

仏がひとりずつ

ta

7

大

峠 可 動

どう

ようもない

10

Vi 訳

0)

下手な人

窓際で切れなくなっているナイフ

寸ひま先ず切り抜きに目を通す

美 子

> 近頃 転職

> ねボケてますのとはしゃいでる のきざしまだない案山子です

奈

広島

市

流

D

えぐ

宿毛市

岡

村

Ŧ.

鳥

松原

の英気をもらう旅情かな

太になって熟女の仲間

入り

確

かなる愛よ絆

の太さかな

幼児

0 刻

独

演

笑い袋がはち切れる

ta

ぎ

む音から

朝

が明けてくる

泊二

H

妻に活性炭を貰う

哀歌

案山子に折れた矢がたまる

甘い 誇り高 炎天下稼ぐ ボ 台詞で い好きうちの嫁さん捨て上手 ットに 10 おん 追 蟻 風はおんなの火を煽る には負けら なが独り輪をはずれ われ失業者があ

れず

尼 崎 市 長

す 浜

澄

子

風の辻すらり本音も通り抜 泣き伏して見たい日もあ とカラスが 勝ちになる る夏 跳んだす H 衣 水溜

この辺で泣けば私 あっけらかん

0

て酔

0

7

2

て私

熊本県

大 III

幸

子

-50 -

| その時の気分写真の顔にある運勢欄あなたの月も見ています | 約束を破った理由はもう聞かぬ | 昼下り睡魔を起こす郵便屋 | かあさんの洗う器がキュキュと鳴り | 富山市島ひかる | ひぐらしがうるさく合歓が散り急ぐ | 終戦の記憶うすれた夏帽子 | 値段など気にせずしたいショッピング | お盆には帰らないよと子の便り | 敬老会少し派手目に出かけます | 富山県高畠五月 | 薬飲む時だけ真面目な顔になる | 罪のないジョークで笑う小銭入れ | 散りしきる萩へこぼしたひとりごと | 本当は淋しがりやの鬼と居る | 目覚めして昇る陽に逢う老いの凪 | 名古屋市 藤 井 高 子 | 道端の花とおはなしして通る | 地下道をたった一人で通り抜け | 齢だからなんて言われて気落ちする | 佗しさを優しく包む詩ごころ | 考えて考えぬいて諦める | 静岡市沢田きん |
|-----------------------------|----------------|--------------|------------------|---------|------------------|----------------|-------------------|-----------------|----------------|---------|----------------|------------------|------------------|-----------------|-------------------|--------------|---------------|----------------|------------------|----------------|----------------|---------|
| | | | | る | | | | | | 月 | | | | | | 子 | | | | | | ん |
| 無意識に手を握らせるかずら橋 | な夫婦絵になる隣の灯 | 風に乗る噂を抱いている女 | どのように燃えても所詮曼珠沙華 | 今治市 | 裏切られた思い出重ね老いとなる | 敬老やいびつな笑顔ありがとう | 老い軽し働き蜂が風に散る | 岸の向こうの妻に見せたい目玉焼 | 妻の忌の夏が毎年暑くなる | 宝塚市 | 個条書きにするほど腹の立つ話 | 開き直ると悩んだことが莫迦みたい | 合鍵が合わぬある日のハプニング | ひまわりの枯れた姿はみたくない | お経のように暑いあついと言うてたが | 藤井寺市 | 改心の証に髪を切って来る | 頼れるは神だけという頼りなさ | その先の先を読んでて眠れない | 間のわるい時は笑った顔をする | 笑わない一人が怖くなって来る | 旭川市 |
| | | | | 塩 | | | | | | 永 | | | | | | 高 | | | | | | 朝 |
| | | | | 路 | | | | | | 田 | | | | | | 田 | | | | | | 倉 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | | | | ょ | | | | | | 暁 | | | | | | 美代子 | | | | | | 大 |

| 乗りのいい私を誘う旅プランはりのいい私を誘う旅プランはたまんま戻って来ない福の神説算です私の笑顔配り過ぎ散髪屋に話の種が置いてある | れが何時花を知れる訳を知 | ばあちゃんの童謡すべてオリジナルシグナルは赤 母さんの低気圧 尼崎市 田 辺 鹿 太白桃の香りと揺れる帰省バス | とて、ついこう也に乗い戻いた石がおしえてくれた闇も土も何れ恋しくなるだろも土も何れ恋しくなるだろ | 誕生は同じで天と地の暮し実りの秋みんな田舎が好きになるくわがたが飛んで悲鳴の都会っ子 二 三分待ってと母のきゅうりもみ | 熊本市 宇 野 照 代 |
|--|--------------|---|--|---|-------------|
| 塾からの「休みじゃない」という電話早朝の風ははや秋雲速し早朝の風ははや秋雲速しまかせられまかせられまかせられまかけられまなの写真と語るお留守番熊本県 岩 | | 、 大方の出会い互いに美辞麗句、 大方の出会い互いに美辞麗句、 大方の出会い互いに美辞麗句 | に に を 生 生 生 生 生 生 生 生 生 生 生 生 生 | 有碑の文字深い浅いにある流れ がをとる舌に崩れる冷奴 京をとる舌に崩れる冷奴 | 今治市 野 |
| 切 | | Л | 宮 | 沢 | 村 |
| 康 | | eniu. | 弘 | SOMETIME. | 清 |
| 子 | j | 勝 | 治 | 翠 | 美 |
| | | | | | |

| 摂津市 | 木 | 下 | 道 | 子 | 寝屋川市 井 上 すみれ |
|--------------------|---|---|----|----|-------------------|
| 腕白らしいおなかを強く蹴る足よ | | | | | 星にも屑があるとは勿体ない |
| 向日葵がうなだれ水を乞う酷暑 | | | | | ボケかけて人の世話をしたくなり |
| 立秋を待ってたようにちちろ鳴く | | | | | 思い切り偽の笑顔で関所抜け |
| 台風に雨だけねだる人のエゴ | | | | | 何ごとも運命だっせと生きている |
| 久留米市 | 鶴 | 久 | 百万 | 両 | 宝塚市 嵯峨根 保 子 |
| 無料奉仕が人間くさくなっていく | | | | | 強がってみたが目に沁む月見草 |
| マドンナを恋の詐欺師に食べられる | | | | | 太刀打ちが出来ず仲良くしています |
| 葉隠れを嗤う愚妻にシャッポ脱ぐ | | | | | シグナルの赤が待てないリンゴたち |
| 水漏れが早くて懺悔まだできぬ | | | | | 虹消えて夢が尾をひく広い空 |
| 羽曳野市 | 芦 | 田 | 絢 | 子 | 河内長野市 大 西 文 次 |
| ノーサインで走ってくれる夫がいる | | | | | 七転び八起きしたとてたかがねぎ坊主 |
| 古希の恋 会話楽しむだけのこと | | | | | 来てみればやっぱり金のいる話 |
| 譲る気はさらさらなくて蟻の道 | | | | | 這い這いの孫の写真を見せ歩く |
| コンディション良好お誘い待ってます | | | | | 昼寝する時間予定に入れてある |
| 西宮市 | 牧 | 渕 | 富吉 | 喜子 | 今治市 渡 辺 南 奉 |
| ニュータウン「蝮に注意」と書いてある | | | | | 油売ることを覚えて社に慣れる |
| 樹も人も無口になった熱帯夜 | | | | | 言い訳がうまい悲しい癖が出る |
| 軽く手を上げて出迎えしてくれた | | | | | 足して二で割る平凡な妥協案 |
| 割り切りのいい人指が太かった | | | | | 東京へあこがれた日が懐かしい |
| 尼崎市 | 野 | 瀬 | 昌 | 子 | 静岡市 小 木 久 子 |
| 面影をゆっくり重ね過疎の町 | | | | | 近すぎて互いの愛に気付かない |
| 失言の張本人は知らぬ振り | | | | | よそ事に托し本心覗かせる |
| ピンチにも女は飾るイヤリング | | | | | 文具店の小父さん意外話し好き |
| 風よりも軽い噂が飛んでくる | | | | | 一歩引くそんな生き方損ばかり |

| 満の秘訣お口も八分目をない不公平にしていもなかなか天に届かないたの瞳が許さない不公平をいるなかなか天に届かないたのではないをした言葉じり刺を持たわりとした言葉じり刺を持たわりとした言葉にり刺を持たいもなかなか天に届かない | まなことで無見まできない血の半 というでは、こう暑いとであるい盆の月 というでは、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 は、 | お洒落してあすを素適に過したい人生の終りにランクつけられる人生の終りにランクつけられる味がかべーに糊を効かせて夏の夢 | た 本 |
|--|--|--|-------|
| 辻 | 上 | 山 池 | 高 |
| 上 | 鈴木 | 本 田 | 野 |
| <i>‡</i> | 春 | 義寿 | 育 |
| よしみ | 枝 | 義 寿 子 子 | · |
| バブル弾けて公害置いてきぼり がブル弾けて公害置いてきぼり にあり討ち 弱点を突いたばかりに返り討ち 眼で合図幸せそうな宵でした 秋の旅少し寂しい影連れて おの旅少しおしい影連れて | 、 c 上事を頂がつける て無口の好き スと誰がつけ アラバラ音を スと誰がつけ また こうしょう かんしょう かんしょう いんしょう いんしょう いんしょう いんしょう いんしょう しょう いんしょう いんしょう いんしょう しょうしょう しょうしょう はんしょう しょうしょう しょうしょう しょうしょう はんしょう はんしょく はんしょう はんしょう はんしょう はんしょう はんしょく はんしょう はんしょく はんしょく はんしょう はんしょう はんしゃ はんしょく はんしょう はんしょく はんしゃ はんしょく はんしゃ はんしゃ はんしゃ はんしゃ はんしゃ はんしゃ はんしゃ はんしゃ | 電柱で蟬が鳴くからなお暑い 電柱で蟬が鳴くからなお暑い を で 手まねきするバナナ を で 手まねきするバナナ | 余み 出兵 |
| | 525 | 向 古 | 100 |
| 吉 | Ш | h | |
| 吉永 | Ш | 向 | 脇 |
| | | 井 久保 泰 和 | |

| 染め分けに道を濡らして通り雨ふとんを叩くしあわせそうな音たてて | 涼しさを貰う団扇の両隣 | トンネルの向うはきっと青い空 | 鳥取県 岩 崎 みさ江 | 年金の出る日を孫も知っている | 吞みものはビールにします水不足 | 野菜高うちのトマトはしおれてる | パチンコ如きに万の金がいる | 新潟県 高 野 不 二 | 笑点の客に笑わぬ顔が見え | 一人相撲取って空しさだけ残り | 網棚に土産ひしめくバス旅行 | おふくろは頑固になったと倅いう | 静岡県 松 下 正 枝 | 相槌が打てず残った気の疲れ | 繁栄のゴミを狙っているカラス | ソウメンの妥協で胃袋軽うする | 金の力根強い傷を埋めている | 兵庫県 酒 井 靖 子 | 兄弟の絆が結ぶ宅配便 | 酷暑三十六度さるすべり悠々燃えに炎え | 頑固一徹川柳だけは捨てきれず | 五十年つないだ友の手離れそう(師・友義美さん倒る) | 唐津市 福 島 紀 一 |
|---------------------------------|----------------|----------------|-------------|--------------------|-----------------|-----------------|---------------|-------------|--------------|---------------------|---------------|-----------------|-------------|-----------------|----------------|----------------|---------------|--------------|--------------|--------------------|----------------|---------------------------|--------------|
| 米騒動水騒動で秋になり少年の耳受け付けぬ老婆心 | 上澄みの返事ばかりを貰ううつ | 愚痴縦に聞き流してる俄雨 | 酒田市 永 澤 裕 子 | おばあちゃんはくみしやすくてよい仲間 | 土用ぼしほくほくと梅 母の手も | うやむやにいつも別れてしまう会 | 地下鉄を降りると酸欠の金魚 | 寝屋川市 森 茜 | 出張に初恋の町胸さわぐ | ディズニーランドから少女になって妻帰る | 遠回りする日うきうき万歩計 | 使い途まだあるらしい呼びに来る | 枚方市 前 たもつ | 普通に式挙げてタレント騒がれる | 久しぶりや元気かいなと元刑事 | 心眼を開き平和な嫁と姑 | 長い出張見送る妻は美しい | 寝屋川市 北 岡 波留吉 | 養生を忘れて病気ぶり返す | 一番に報告弾んだ声の電話口 | 淋しくて刻を忘れた電話口 | お別れの後ろ姿を何時までも | 寝屋川市 冨 山 ルイ子 |

| は聞かないわかってい祭りを覗けば胸のほれ兵の出番ライトから外 | 深追いはすまい脛の傷嗤う | 反 | 聞いているだけで汗ばむ蟬の声 | 中年にまぶしいギャルの膝小僧 | 喫茶店寄らずに帰る水不足 | 香川県 | 話しかけながら遺影のガラス拭く | 青い目の尼僧に手向け倍にする | 素そうめんサラサラ食べて暑い昼 | 犬がきて水飲む音の熱帯夜 | 静岡市 | 竹馬で遊んだ頃は塾がない | 叱っても怒っていても子を思い | 駐在さん野鳥博士で人気者 | お盆には戦艦大和夢にみた | 富田林市 | 目刺しでもいいよと父の目が優し | 効いた効いた薬より酒効いて来た | エプロンを締めたら妻の顔になり | てっせん花また諦めた人を恋い | 宇部市 |
|--------------------------------|-------------------|-----------|----------------|-----------------|----------------|-----|-----------------|----------------|-----------------|-----------------|-----|---------------|----------------|---------------|---------------|------|-----------------|-----------------|------------------|----------------|------|
| iri | e) <u>—</u> | - | | | | 堤 | | | | | 増 | | | | | Ш | | | | | 中 |
| | Z | × | | | | , | | | | | 田 | | | | | 原 | | | | | 村 |
| | 身 | 自 | | | | くに | | | | | 扶 | | | | | 昭 | | | | | Ξ |
| | ナ | 7 | | | | 子 | | | | | 美 | | | | | 水 | | | | | 良 |
| しいと素直に言えぬ年棚の土産が主役帰りべむらさき粋に着こなす | 此の橋を渡ってからが正念場「「嶋市 | 奇り | 町会の行事参加に意義があり | 一言がこんなに明るくしてくれる | 終点で目覚め最後に降りて行く | 福岡市 | 耕して土の嬉しい私語を聴く | ご詠歌を唱える孫の目が丸い | お寺参り歳に不足はありません | 虫の声に耳かたむけて歯科の椅子 | 兵庫県 | 心眼で見ても不思議な平和論 | 柔らかい言葉に包む母の鞭 | 片言の孫にペロリと丸められ | 作句終え三面記事を読む安堵 | 天理市 | ちびた靴お暇出そうかよく馴染み | 飢餓の子の暮しを思うパンの耳 | バーゲンにつられて買った妻の愚痴 | 雑草も活ければ人の愛を受け | 和歌山県 |
| | ź | 1 | | | | 井 | | | | | 西 | | | | | 飯 | | | | | 藤 |
| | 倉 | | | | | 崎 | | | | | 井 | | | | | 田 | | | | | 井 |
| | きる | 7 | | | | ミサ子 | | | | | つや子 | | | | | | | | | | 春 |
| | Ŧ | z. | | | | 子 | | | | | 子 | | | | | 昇 | | | | | 子 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |

| 接待の野心片手に酌をするのいでにと言うが話に裏がある | 飽食のツケが届いた水不足 尾崎市 河 津美しく遠くに架ける虹の橋 | ほどほどに惚けて見せるも老いの知恵 歴乞いを見物してる憎い雲 | 裏の裏よんで人間不信する 尼崎市 湊事の裏よんで人間不信する | に夢中 気 | 名をすぐに忘れてトセラーは巡回図ペラペラ元気でナ | 河内長野市 橋 本 |
|-----------------------------|--------------------------------------|--------------------------------|--------------------------------|-----------|--------------------------|-----------|
| | 正 | 末 | 修 | 美 | 志 | 弘、 |
| | 治 | 貞一 | 水 | 羽 | 重 | 美 |
| 山里はうす紫に暮れふり向けばビルの上山里の虹は色濃く橋 | 気づかない働き過ぎがおそろ気づかない働き過ぎがおそろりへ窓から見せる揚け | いしつ | 頂 波 水 | 面離り | 晚料徨 | |
| 1れて行く 上にも虹の橋 | 働き過ぎがおそろしい費方の心読める仲 | 和さと | 天になって梯子をはずされる踊りてのひらの波寄せ返す米子市 | にお金が欲 | 水でも花をつけ、の入った夏座敷 | 枚方市 |
| て行く かける | | 元和さ と 田 居 | 子をはずされる 米子市 小 | 今日 (原爆 | をつけ 大阪 | 枚方市 森 |
| て行く かける | 西宮市 | 和さと居市 る | | 今治市 (原爆忌) | 夏座敷 大阪市 | |
| て行く かける | 西宮市菊 | 2 - A と居る | 小 | 今治市 越 | をつけ 大阪市 江 | 森 |

| これしきの石に流れを替えられる線香花火 一途に炎える意地を持ついろいろに見たくて眼鏡ふいてみる | 岡山県 国 米 きくゑ | こんな時嘘がつけたらなと思う | 晩学の騙されやすい樹に登る | 税務署から戻り熱い茶を貰う | 徳島市 安 宅 美代子 | 天邪鬼冬がよろしと汗を拭く | 間抜けても笑いも出来ぬ寡夫の家事 | 善し悪し事あるたびに亡妻思う | 泉佐野市 稲 葉 洋 | 老化ですなんてすげないお医者さん | 借金を返したとたん強くなる | いかめしい門ひき立てる鬼瓦 | 河内長野市 妹 背 尽呂久 | おはじきを散らして過去の恋にする | 堅物の口もと丸くするお酒 | ええ薬になったと言うてこたえてず | 大阪市 大 河 未佐子 | 義母訪ねともに吟じる能登の旅 | 悩む子に我青春を焙り出す | お中元 水くさくないミネラル水 | 大宮市 新 井 圭 二 |
|---|-------------|----------------|---------------|---------------|--------------|----------------|------------------|-------------------|-------------|------------------|---------------|----------------|---------------|------------------|---------------|------------------|-------------|----------------|-----------------|-----------------|-------------|
| 斜めから見れば頑固も丸い肩幸せな余生だったと人伝てに夾竹桃はがき一枚書けぬ日々 | 大阪市 勢理客 トミ子 | Tシャツに落書したい憎い人 | 短いが書ける鉛筆捨ててある | 人の群れ一息ついたビルの影 | 寝屋川市 後 藤 黎之助 | 不況風ダンジリだけは景気よい | 東京の娘の便り待ってるおっかさん | たこ焼き屋チャッカリ儲けて新車買う | 尼崎市 中 澤 向 西 | 僻地でも苦にはならない里帰り | つづく照り蟬は大いに合唱し | うなぎ屋の夫婦しっかり焼く匂 | 唐津市 山 門 夕 ミ | 古唐津に静かに生きる野辺の花 | コンバイン音高らかに早期米 | 嬉しいね酷暑に耐えて虫が鳴く | 唐津市 山 門 幸 夫 | 二枚目の舌で敷居が高うなり | うかつにも漏らした一言歩き出し | 円高を巧く操るギャルの群 | 岡山市 中 嶋 千恵子 |

| 人減らししているところに天下り屋台蕎麦 企業秘密の隠し味馬鹿騒ぎ寂しい心耐えている | | 前進もバックもできる靴をはくお世辞だとわかっていてもいい気分 | 恩少し返しにいってまた貰う | 八尾市 | 柳友と語る楽しさ合同句集 | 見回りの顔がほころぶ稲の出来 | アルバムを繰れば思い出湧いて来る | 熊本県 | 五十円ですむ孝行を筆まめに | 好きだから少し電話を控えとく | イベントの夜店にはしゃぐ団地の子 | 茨木市 | どこにでもある幸せをつかめない | 茶柱は期待できないティーバッグ | 筋が良いと賞めてだんだんしごかれる | 唐津市 | 自販機に文句言ってる酔っぱらい | 胃の中で消化されずにいる本音 | 無事帰還できたメダカに箔がつき | 今治市 |
|--|-----|--------------------------------|---------------|-----|---------------|-----------------|------------------|-----|---------------|----------------|------------------|-----|-----------------|-----------------|-------------------|-----|------------------|----------------|-----------------|-----|
| | 池 | | | 村 | | | | 増 | | | | 島 | | | | 市 | | | | 村 |
| | 田 | | | 上 | | | | 田 | | | | 元 | | | | 丸 | | | | 上 |
| | - | | | ミツ | | | | _ | | | | do | | | | 晴 | | | | 久美子 |
| | 男 | | | 子 | | | | 乗 | | | | 2 | | | | 子 | | | | 子 |
| 同じ柄の服を着ているエレベーターもういいかいどこかで鬼が舌を出すマッサージに行き我が身をもて余す | 松江市 | ご供養の酒に酔うとは不覚なり くの酒 婿の二人も呑めてよし | 仏壇の中のみんなと暮してる | 大阪市 | かけ足で今日も終った幸せさ | 夫ホット私アイスのティータイム | 電話口男が話すあっけなさ | 出雲市 | 泥の舟乗って後悔しています | 仲人が筋書き通り喋りだす | 井戸端がなくて話題が聞こえない | 鳥取県 | 一本の日傘大事にさした母 | ためらわず方言出せる県人会 | 退院の妻に茶の間が活気づく | 大阪市 | ひま人にされて老いの身さみしいね | 気安めに言った言葉に胸痛め | 深呼吸してから話す胸の内 | 静岡市 |
| | 佐 | | | 尾 | | | | 西 | | | | 橋 | | | | 中 | | | | 浅 |
| | 野木 | | | 崎 | | | | 尾 | | | | 谷 | | | | 田 | | | | 子 |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| | み | | | 黄 | | | | 和 | | | | 静 | | | | あい | | | | まっ |
| | みえ | | | 黄紅 | | | | 和子 | | | | 静江 | | | | あい子 | | | | まつゑ |

| ļ | 千円札使い上手になった孫 根回しも只ではすまぬ鼻薬 川柳塔ライバルがいて止められぬ | どうでっかぼちぼちですわ老夫婦値は張るが秋先取りの初サンマ | を苦にせぬいトイレで | 哲もない指なのに冴えるっとして筏流しの技を見アレイ年相応を忘れてる | 警友ベリ | |
|-----|---|--|-----------------------------|---------------------------------------|--|-------------|
| 6 } | 浜庫県 北 川 とみ子消費税取らぬ自慢の小商い回覧板十歩の道で長話うっかりと話噂にされている | 島根県 槻 谷 仲 子戦には触れたくなくて隠す傷名月や一人の下野の苦い酒台風の眼の中に居る星明り | さくなった老母の背電に帰れと里の山が行無常。写経に墨を | 信文を影身で守る母が居る 鳥取県 奥 谷 彩 子 掲糞害 夫は特許に挑む夏 | 寝屋川市 宮 崎 菜 月עの夢 母の半分しか見ない 現ってる猫の構えはミニライオン 同期会 二次会からが本音の場 | 吹田市 馬 渕 光 子 |

| 人生に謎があるので面白い | | 飲み忘れ薬を溜めて母達者 信号が赤と気付いて青くなり は大の表札上げて猫が住み | 宋次大橋歴史の里に新名所(木次大橋開通) 雨乞いをすれば台風向きを変え 子も孫も揃い和やか盆供養 | 作品が展覧会で待って居る 島根県 安 部 美朝顔を見て熱帯夜早や忘れ | 伊丹市 樫 谷 郁 |
|--|----------------------------------|---|--|---|-------------|
| 京 | 子 | 子 | ミサヲ | 美 恵 女 | 子 |
| マスクして街の歯科医へ行きました 別場で活動写真も芝居も見 割場で活動写真も芝居も見 出雲市 浜 圭 当雲市 浜 生 | 粒の米が古里語りだす 岡山県 伏 見 すみ形のような女が啖呵きり | 再婚を促すように灯がまわる 鳥取市 田 賀 八千遠州の庭に遊んだ宿浴衣 | 朝顔の花をかぞえて朝さやか 高槻市 芦 田 静緑先でビールのみつつ蚊にさされ | こちょこちょをしてもロボット笑わない鼻うたで店をひろげる金魚売りよれよれの枝に胡瓜がしがみつき | 島根県 菅 田 かつ子 |
| 三 | n | 代 — 61 — | 江 | 智 | 1 |
| | | | | | |

| げば回る喪の水車 | し饅頭すっきりしない | 握手して孫から元気貰います河内長野市 | 立秋に強く逆らう酷暑かな | 職探す女子大生の靴のへり | 水掛ける墓石ジュッと言いそうで | 羽曳野市 | 朗報に接して靴が軽くなる | また今日も下手な言い訳してしまう | おだいじに看護婦横を向いて言う | 八尾市 | 花の咲く方へと誘う万歩計 | 丸い背 粗食に慣れているふたり | やめてやると上司に啖呵夢だった | 枚方市 | 繁栄のゴミが浮いてる瀬戸の海 | 吹く風が心に沁みる海の風 | 澄んだ音だけが素速く走り抜け | 今治市 | 旅なかば一会の清水に出合う幸 | 美辞麗句ならべた舌が他人を刺す | ふるさとの絵にはカタコト水車 | 岡山県 |
|-----------|----------------------|----------------------|----------------|--------------|-----------------|-------|---------------|------------------|------------------|------|-----------------|-----------------|-----------------|----------|-----------------|-----------------|----------------|--------|-----------------|-----------------|-----------------|----------|
| | | 水 | | | | 西 | | | | 村 | | | | 濱 | | | | 渡 | | | | 土 |
| | | 谷 | | | | 村 | | | | 上 | | | | 田 | | | | 邊 | | | | 居 |
| | | (正笙 | 5 | | | ŋ | | | | 剛 | | | | 良 | | | | 伊 | | | | U |
| | | (正子改め) | ٤ | | | つえ | | | | 治 | | | | 知 | | | | 津志 | | | | での |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| 憂する心を覗く胃の | の荷物温うなって着に角素者を負ませた | 太易こ解熱乳を次ませたい大阪市 | カラコロと下駄の音する夏の宵 | 祭の夜親父の広い肩車 | 肩の凝る一人芝居で孫の守り | 大阪市 | 退院の見通したたぬ靴のちり | 一か所の逃げ道やはり気付かない | バイパスが生きてるように店を呼ぶ | 和歌山県 | 負けたのは弱いからだと口閉ざす | 抜け荷にはまず西海屋顔をだす | 一筋の糸に釦がしがみつく | 鹿児島県 | なるほどと見出しに引かれ週刊誌 | 新芽しなやか根は鉢を巻く古盆栽 | 跳ねもせず妻の掌に乗る雨蛙 | 高槻市 | 欲しい物買えぬ両手をポケットへ | 三輪車孫も運転慣れて来た | 暑いとて冷えたビールでまた汗に | 唐津市 |
| 憂する心を覗く胃の | 配の荷物温うなって着層に角蓋音を負ませた | こ解熱剝を次ませない 大阪 | ラコロと下駄の音する夏の | の夜親父の広い肩 | の凝る一人芝居で孫の守 | 大阪市 川 | 院の見通したたぬ靴のち | かな | イパスが生きてるように店を呼 | Ш | けたのは弱いから | け荷にはまず西海屋 | の糸に釦がしがみ | 島 | 出しに引かれ週刊 | は鉢を巻く古盆 | ねもせず妻の掌に乗る雨 | 槻 | しい物買えぬ両手をポケッ | 車孫も運転慣れて | いとて冷えたビールでまた汗 | 津 |
| 憂する心を覗く胃の | 配の荷物温うなって着層に角蓋音を負ませた | こ解熱剝を次ませたい 大阪市 | ラコロと下駄の音する夏の | の夜親父の広い肩 | の凝る一人芝居で孫の守 | 市 | 院の見通したたぬ靴のち | かな | イパスが生きてるように店を呼 | 山県 | けたのは弱いから | け荷にはまず西海屋 | の糸に釦がしがみ | 島県 | 出しに引かれ週刊 | は鉢を巻く古盆 | ねもせず妻の掌に乗る雨 | 槻市 | しい物買えぬ両手をポケッ | 車孫も運転慣れて | いとて冷えたビールでまた汗 | 津市 |
| 憂する心を覗く胃の | 配の荷物温うなって着層に角蓋音を負ませた | こ解熱乳を次ませたい 大阪市 中 橋 恵 | ラコロと下駄の音する夏の | の夜親父の広い肩 | の凝る一人芝居で孫の守 | 市川 | 院の見通したたぬ靴のち | かな | イパスが生きてるように店を呼 | 山県村 | けたのは弱いから | け荷にはまず西海屋 | の糸に釦がしがみ | 島県 大 山 舞 | 出しに引かれ週刊 | は鉢を巻く古盆 | ねもせず妻の掌に乗る雨 | 槻市 江 | しい物買えぬ両手をポケッ | 車孫も運転慣れて | いとて冷えたビールでまた汗 | 津市 入 江 喜 |
| 憂する心を覗く胃の | 配の荷物温うなって着層に角蓋音を負ませた | こ解熱乳を次ませたい 大阪市 中 橋 | ラコロと下駄の音する夏の | の夜親父の広い肩 | の凝る一人芝居で孫の守 | 市川原 | 院の見通したたぬ靴のち | かな | イパスが生きてるように店を呼 | 山県村中 | けたのは弱いから | け荷にはまず西海屋 | の糸に釦がしがみ | 島県 大 山 | 出しに引かれ週刊 | は鉢を巻く古盆 | ねもせず妻の掌に乗る雨 | 槻市 江 原 | しい物買えぬ両手をポケッ | 車孫も運転慣れて | いとて冷えたビールでまた汗 | 津市 入 江 |

| 大空の汚染に虹も出にくかろ | 虹を追う新空港の一番機 | 落ちつかぬ心が膝を抱いている | 羽曳野市 酒 | 台風に恋いこがれてる渇く街 | 夫婦喧嘩もほどほどにする暑さかな | 八分目を不足と思うふしあわせ | 西宮市 古 | 下心あるサービスに引っ掛かる | 糊ぴんと父子浴衣の奴凧 | 雨の気配空振りなんてにくい雲 | 松山市 丹 | 連日の猛暑に負けず熱いお茶 | アリバイが下手で父さんボロを出す | 字が下手でいつも損するラブレター | 河内長野市 印 | 母を見てコーディネートを身につける | うぬぼれを打ち掛け風に身にまとう | 外柔と見られ内剛自負してる | 沖縄県 杉 | クーラーの断続何かせわしない | 兄妹申し合わせて盂蘭盆会 | 得心がいかないときは動かない | 尼崎市 萩 |
|---------------|----------------|----------------|-------------|---------------|------------------|----------------|--------------|----------------|----------------|----------------|-------------|-----------------|------------------|------------------|-----------|-------------------|------------------|------------------|-------------|---------------------------------|--------------|----------------|-------------|
| | | | 井 | | | | 谷 | | | | 下 | | | | 藤 | | | | 谷 | | | | 原 |
| | | | 壶 | | | | ひろ子 | | | | 美津子 | | | | 智子 | | | | 一栄 | | | | しげる |
| 近道をした訳夫は知っている | 浜辺のデート風に時々覗かれる | 人形が私の愚痴を聞いている | 鳥取市 谷 口 侑 里 | 乱れ籠 躾のよさが瞭然に | トピックス一人よがりの空振りで | 地唄舞 動く浮世絵見るようで | 和歌山県 福 田 和 子 | 避けるほど根が深くなる嫁姑 | 昨日の夢忘れ兼ねてる妻といる | お百度の妻の素足に惚れた僕 | 箕面市 木 村 天 弘 | 喋ったらさっぱりしたと晴れた顔 | 価値観の違う夫婦の持つ財布 | おてもやん面をはずせば老紳士 | 吹田市 西 岡 豊 | 台風は怖いが雨の欲しい夏 | どん底のわたしを母は叱らない | 田が割れることしも不作かも知れぬ | 福岡県 本 田 忠 男 | 路郎師を囲む川原で鮎が焼け(昭和二十五年球磨川遙拝堰川原にて) | 割勘と決り安心して飲める | 病人は無言付添婦が答え | 熊本市 遠 山 夏 生 |

| 1 | ごいとて | イベントに群がるさまは蟻のよう四角にも丸にもなれる社会党和歌山県 | 幸せを桃むく母の指に見るひやかしの客が戻って買いにくるいないにくる。 | 母の背にやいとの痕が痛々し 水不足ゲロゲロ鳴くも効き目なし | 切ってマニ | 原爆忌戦の影をまだ背負い南瓜がスパッと切れずにもどかしい、八尾市 | 故郷が出張夏の甲子園説明を省いてボタンかけちがい政権の椅子に届かぬ援護法 | 羽曳野市 |
|--------|-----------------------|----------------------------------|------------------------------------|----------------------------------|---------------------------|----------------------------------|--------------------------------------|------|
| j | 永 | 上 | | 澤 | 木 . | 生 | | 徳 |
| 1 | 倉 | 岡 | | 田 | 村 | 嶋 | | Щ |
| ŧ | 柳 | 正 | | 和 | - | ます | | みつ |
| 3 | 華 | 直 | | 重 | 笛 | み | | つこ |
| れもな恋 | 警備費をケ | 散らかし | 理御利な益 | 火中の | 極楽の | 黒 究 | 風許か | |
| 打化 化 | をケチり盗られた五億円は達者若者には負けぬ | らかした小部屋私のすきなとこまってた時計頼りにしたうかつ | 由など言える立場が羨まし利益は望まぬ茶漬さらさらと | 栗爆ぜないうちに拾いぶす程のたくらみなど | の風が吹いてる風呂あがりドウに似合う水着を探してる | 珠 核はやっぱり黒ですかのキムチ旨味に熱い汗 | 鈴の涼しさが来ぬ熱帯夜すとは何と心の休まる夜 | 静岡市 |
| 打化方唐 | チり盗られた五億者若者には負けぬ | 屋私のすきなとこ頼りにしたうかつ | 島根 | 栗爆ぜないうちに拾い上げぶす程のたくらみなど持た | 風が吹いてる風呂あがりワに似合う水着を探してる | 核はやっぱり黒ですかもムチ旨味に熱い汗 | しさが来ぬ熱帯夜 | 岡 |
| 打化 唐津市 | チり盗られた五億者若者には負けぬ | 屋私のすきなとこ頼りにしたうかつ | 島根県 | 栗爆ぜないうちに拾い上げぶす程のたくらみなど持たぬ | 風が吹いてる風呂あがりりに似合う水着を探してる | 核はやっぱり黒ですかもムチ旨味に熱い汗 | しさが来ぬ熱帯夜高槻市 | 尚市 |
| 打ち書市野 | チり盗られた五億者若者には負けぬ | 屋私のすきなとこ 高槻市 乙頼りにしたうかつ | 島根県福 | 栗爆ぜないうちに拾い上げ 兵庫県 倉 | 風が吹いてる風呂あがりのに似合う水着を探してる | 核はやっぱり黒ですかもムチ旨味に熱い汗 | しさが来ぬ熱帯夜 高槻市 執 | 岡市 中 |

| 親離れして欲しくない旅に発つ年金の枠を食み出す熨斗袋 静岡市 物 | न | | 陸橋の焼け付く今日の原爆忌他人とは思えぬ嫁の亡母に似る寝屋川市 1 | 笑う母の周りに弾む声を花にも告げるひと柄杓福岡市 | 道順を変えて思わぬ人に逢うあの方のよほどと思う愚痴を聞く島根県一島根県で | りと父はいつでも平泳ぎっくりと父はいつでも平泳ぎ和泉市が多すぎるのと父はいつでもでいる。 | 橿原市 |
|----------------------------------|-------------------------------------|--|-----------------------------------|--------------------------|--------------------------------------|---|-------|
| 柳 | 4 | | 坂 | 森 | = | 加 | 西 |
| 沢 | 均 | | 上 | 志 | 代 | Щ | 本 |
| た | 破 | 楚 次 | 高 | げ | 朝 | よし | 保 |
| ま | Æ | 5 枝 | 栄 | る | 子 | お | 夫 |
| 女から一部 | にが倫す | お客さ | 身気の | 盆になった。 | 夕 安 | シ駅就 | |
| 部始終がもれていきれて本社に忘れられる歌山市 | にがい水ばかりで蛍いなくなり不倫する方もされてる方も隙がありず ポート | れに向く雑貨屋の扇風機が読めたら桂馬躍びはせん 愛媛 | 身代りになった水子の忌がそこに気の弱い診察券になりました 鳴門市 | 夜秋風一寸姿見せ泉南市 | の来そうな空を見上げてる の土を探しに出た蚯蚓 豊中市 豊中市 | 意気にたじたじ企業側が主張んでもたかが屋が上飛んでもたかが屋が | 羽曳野市 |
| 始終がもれていきて本社に忘れられ | なりあ | れに向く雑貨屋の扇風機 が読めたら桂馬躍びはせん 愛媛県 | た水子の忌がそこに 券になりました 鳴門 | 夜秋風一寸姿見せかむと仲間の輪には誘われず泉南 | の来そうな空を見上げてるの土を探しに出た蚯蚓豊中 | 大手話も弾んで夏の午後 京野話も弾んで夏の午後 | 曳野 |
| 始終がもれていきて本社に忘れられ和歌山市 | なりがありま | れに向く雑貨屋の扇風機 が読めたら桂馬躍びはせん 愛媛県 中 | た水子の忌がそこに 鳴門市 | 夜秋風一寸姿見せかむと仲間の輪には誘われず泉南市 | の来そうな空を見上げてるの土を探しに出た蚯蚓豊中市豊中市 | 支気にたじたじ企業側が屋根の上の上のが上でするが上でするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでする< | 曳野市 |
| 始終がもれていき 和歌山市 木 | なり す 吉 吉 | スに向く雑貨屋の扇風機 が読めたら桂馬躍びはせん 愛媛県 中 居 | た水子の忌がそこに 鳴門市 八 | 夜秋風一寸姿見せ 泉南市 坂 | の来そうな空を見上げてるの土を探しに出た蚯蚓豊中市田豊中市田田 | 支気にたじたじ企業側が屋根の上の上のが上でするが上でするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでするが上のでする< | 曳野市 山 |

| 天然のベール窓越しのサルスベリ | 手作りの蘭を仏に見て貰う | 米子市 | 追伸の方が長くて読み直し | また来てとそっと女は手を握り | 明石市 | 遺産分け納得したか苦笑い | 見合の席母がついつい喋り過ぎ | 岸和田市 | 父さんはガンバッテ居るドリンク飲む | 夏の朝疲れた影がついて来る | 千葉県 | お悔みの言葉足らずの頭下げ | 少しずつ母に似て来た顔になる | 兵庫県 | 雨雲へ祈る気持ちの鬼瓦 | 評判が良くて親まで誉められる | 松江市 | 旅に出て孫のみやげに気をとられ | なまぬるい風に眠けをさそわれる | 鳥取県 | 整理整頓 妻が棄ててる僕のもの | 都合よく断ってきた小さい義理 | 寝屋川市 | |
|--------------------|---------------|-----|----------------|----------------|-----|------------------|----------------|------|-------------------|---------------|-----|-----------------|----------------|------|---------------|-----------------|-----|-----------------|-----------------|-----|------------------|------------------|------|--|
| | | 服 | | | 小 | | | 井 | | | 大 | | | 玉 | | | 浦 | | | 権 | | | 籠 | |
| | | 部 | | | Щ | | | 齋 | | | Щ | | | 田 | | | 辺 | | | 代 | | | 島 | |
| | | 朗 | | | 酔 | | | _ | | | 晚 | | | 三 | | | 静 | | | 康 | | | 恵 | |
| | | 子 | | | 月 | | | 齌 | | | 翠 | | | 重 | | | 江 | | | 女 | | | 子 | |
| ビールだってきれいなコップ好きと言う | 父捜す写真一枚が手がかりで | 米子市 | 山門に入れば法話が身に沁みる | 台風も歓迎される水不足 | 唐津市 | さるすべり蟬はしっかり止まり鳴く | 健康法に歩く楽しみ汗流し | 姫路市 | 女子寮の物干竿はカラフルだ | 女房の母校が出てる甲子園 | 鳥取市 | 缶ビールすすめ合ってる二人の夜 | 九回の裏のチャンスに電話鳴る | 泉佐野市 | 休むより動きまわって銷夏法 | もがいてもなおもがいても夢の中 | 島根県 | くたびれた頃に外来名を呼ばれ | 発言が自由で議長困り果て | 静岡市 | あだのない茄子には水もたんとやり | そこのけそこのけ瀬戸の大橋水通る | 寝屋川市 | |
| 百う | | 池 | | | 浜 | | | 福 | | | 近 | | | 河西 | | | 松 | | | 大 | | | 太 | |
| | | 尾 | | | 本 | | | 島 | | | 藤 | | | 原崎 | | | 本 | | | 村 | | | 田 | |
| | | 保 | | | 治 | | | 姫 | | | 秋 | | | 礼 | | | 聖 | | | 正 | | | とし | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | - | |
| | | 子 | | | 幸 | | | 女 | | | 星 | | | 子 | | | 子 | | | 雄 | | | 子 | |

| 若者と交わす対話の種探す | E) | 子園夾竹桃と共に燃 | 追い越した車が並ぶ赤信号 | e e e e e e e e e e e e e e e e e e e | 幸せな日々をホイホイ無重力 | エリートのメダカ嬉しい宇宙旅 | 和歌山市 | 置き場所を変えても水銀下がらない | 相槌が欲しい視線に目を外らし | 尾張旭市 | 嵐くる蔦は必死でからんでる | 孫クイズ欲がないので直ぐ解ける | 東大阪市 | 一人住まい肌もあらわに涼をとる | 風通しいい人柄でアッケラカン | 米子市 | 体温計壊れるほどに炎えてます | 浜焼きに舌打ちながら地酒酌む | | 喜んで好いのか医療費タダになる | そろそろと憎まれ役の出番来る | 海南市 |
|---------------------|-------|-----------|-------------------|--|---------------|----------------|------|------------------|------------------|-------|-----------------|-----------------|-------|-----------------|----------------------|---------|----------------|-----------------|-------|------------------|-----------------|-------|
| | 福 | | 片 | 4 | | | Ш | | | Ξ | | | 松 | | | 鹿 | | | 杉 | | | 谷 |
| | 原 | | В | 1 | | | 根 | | | 浦 | | | Щ | | | 島 | | | 本 | | | П |
| | 辰 | | 矢 | Ĭ | | | めぐ | | | き | | | | | | | | | 孝 | | | 義 |
| | 江 | | Ŧ | - | | | 2 | | | ぬ | | | 隆 | | | 繭 | | | 男 | | | 男 |
| 麦わら帽 | | 老夫婦 | 良いた | ţ | 姑が | ビル | | 雷路 | 老 | | enc. | | | nte | 雪 | | - | w | | 4.7 | 他 | |
| プールのふちで声をかけるへ宿題持ち帰る | | る機能出し合って | 空気くれる替りこ落葉帚き、藤井寺市 | 会 · · · 女 · 会 · · · · · · · · · · · · · | 笑うと家も笑ってる | ルの影風あびている夏帽子 | 香川県 | 一天商ちいさな字での但し書 | ~いの坂何をするにもよっこらしょ | 大阪市 | 地獄どころか孫ウキウキと塾通い | おふくろがもうおいでよと石の下 | 東京都 | 青春のアルバムたまに開けて見る | 解けの水湧く街の夏祭り | 河内長野市 | 死んだとて地球は回り続けます | 指間から漏れる清水に急かされる | 出雲市 | 好きな証拠で素直にハイと返事する | 心人ごと口をはさんでみたくなる | 鳥取県 |
| プール | 姫路 | 出し合って | れる替りに落葉帚き繭み | 会 · 《女子会 ·) · · · · · · · · · · · · · · · · · | 笑うと家も笑ってる | の影風あびている夏帽子 | 香川県高 | 天商ちいさな字での但し | いの坂何 | 大阪市 中 | 獄どころか孫ウキウキと塾通 | ふくろがもうおいでよと石の下 | 東京都 松 | 春のアルバ | 解けの水湧く街の夏 | 内長野市 木 | んだとて地球は回 | から漏れる清水に | 出雲市 荒 | きな証拠で素直にハ | 心人ごと口をはさんでみたくなる | 鳥取県 橋 |
| プール | 姫路市 | 出し合って | れる替りこ落葉帚き、繭井寺市 | 会 · 《女子会 ·) · · · · · · · · · · · · · · · · · | 笑うと家も笑ってる | の影風あびている夏帽子 | 県 | 天商ちいさな字での但し | いの坂何をするにもよっこらしょ | | 獄どころか孫ウキウキと塾通 | ふくろがもうおいでよと石の下 | 都 | 春のアルバ | 解けの水湧く街の夏 | 内長野市 | んだとて地球は回 | から漏れる清水に | 市 | きな証拠で素直にハ | 心人ごと口をはさんでみたくなる | 県 |
| プール | 姫路市 服 | 出し合って | れる替りこ落葉帚き、繭井寺市 | 如 () () () () () () () () () (| 笑うと家も笑ってる | の影風あびている夏帽子 | 県高 | 天商ちいさな字での但し | いの坂何をするにもよっこらしょ | 中 | 獄どころか孫ウキウキと塾通 | ふくろがもうおいでよと石の下 | 都松 | 春のアルバ | 解けの水湧く街の夏 | 内長野市 木太 | んだとて地球は回 | から漏れる清水に | 市荒 | きな証拠で素直にハ | 心人ごと口をはさんでみたくなる | 県橋 |

| 靴の紐結び直して第一歩 | すれ違う札所参りの合言葉 | 出雲市 加 藤 スズコ | 関空の赤字試算は早すぎる | 旱天にひまわりしかと根をおろし | 大阪市 山 本 憲太郎 | 北鮮の核の疑惑は渦の中 | 金運は無いのに立派な象牙印 | 寝屋川市 瀧 本 八十八 | 塾塾と幼い内から可哀想 | 年金ぐらし老人大学という余裕 | 唐津市 山 口 ふさ子 | 集落の子供がたたくむら太鼓 | 風土記出てこぬ祖先砂鉄とり | 島根県 岩 田 三 和 | 仕出しや誉めたら鱧の子たんとくれ | 熱帯夜枕に汗のたまるほど | 泉佐野市 大 工 静 子 | 覗くなと書いてあるから見たくなる | ペンダント彼の写真が代ってた | 米子市 永 井 三津子 | 褒めすぎの祝辞に顔があげられぬ | 若者のいない里にも盆帰り | 吹田市 吉 川 渉 | |
|-------------|--------------|-------------|----------------|-----------------|-------------|---------------|---------------|--------------|---------------|----------------|-------------|-----------------|------------------|-------------|------------------|------------------|--------------|------------------|----------------|-------------|-----------------|-----------------|-----------|--|
| の人まだ帰らない鉄 | 又しても部屋中捜す老眼鏡 | 八尾市 | 開いた口塞がったから浅蜊買う | 老人が老人ホーム慰問する | 大阪市 | 頼り切る誰をうらむか影法師 | 面影に達者がしのぶ年忘れ | 兵庫県 | 強くても弱くてもよい雨台風 | 貴方だけよ壁に耳あり知れ渡る | 鳥取市 | 生き甲斐に十鉢育てたミニトマト | 母の世話 姉にまかせて暑を過ごす | 鳥取県 | 熱帯夜どちら向いても愚痴が出る | スーパーへ猛暑の冷えを買いに行く | 鳥取県 | 暁天の法話を聴いて澄んだ気に | うら盆会あの世の人と車座に | 青森県 | 目が合えば以心伝心縄のれん | 譲られてわが老いを知るバスの席 | 高槻市 | |
| | | 高 | | | 平 | | | 中 | | | 津 | | | 高 | | | 中 | | | 諏 | | | 傍 | |
| | | 橋 | | | 井 | | | 野 | | | 村 | | | 尾 | | | 西 | | | 訪 | | | 島 | |
| | | 明 | | | 部路 | | | とよ子 | | | 静 | | | | | | 智由 | | | 明 | | | 克 | |
| | | 子 | | | 芳 | | | よ了. | | | 枝 | | | 京 | | | 恵子 | | | 雄 | | | 治 | |

I 新 指 新 洒 趣 他 朝 真 晚 風 満 P 米 折 米 味 顔 酌 月 7 给 潮 コ 0 谷 80 を 中 大将も今では C 0 0 0 D 0 E 先 T 瑞 る 褒 0 時 旅 1 字 から 生 は 13 穂 明 加 8 蟬 間 で 宙 塾を繁盛させてい ては 迎 H え余 0 0 た かい 前 祈 売 0 だけ 之 年 間 玉 か 鳴 呼 0 K n n 胸 6 忌 生をこれ は が 0 反省多くなる 10 かい 4 出 吸 をは 蘭 でに をかぞえます 花 ょ てる 待 元 4: す みが また の愛好家 火となりにけ 気 0 プ かい 種 僕 7 7 D 照 満 明 で行 えり 0 7 Vi 0 3 日 耳 3 E か 根 鳥 和 大阪 尼 鳥 雲市 6 取 津 取 崎 田 岡 n 県 12 क्त 市 市 県 市 क्तं 岩 藤 中 = 亀 Ш 乾 松 Ш 村 临 # 浦 本 F

皎

月

川柳塔鹿野みか月大会

實

1

ク子

弘

子

と き 11月20日 (日) 午前9時開場 ところ 鹿野町営国民宿舎 山紫苑 (JR浜村駅からバス15分)

兼題と選者(各題2句・午前11時締切)

単 「館 橘 高 薫 風 選 尾 俊 平 寺 選 木 「占 中 恵美子 選 野 畳 浜 奇 童 選 1 劇 内 田 久 枝 選 「輝 政 岡 日枝子 選 1 「動 < 1 江 原 とみお 選 絵 野沢 大 漁 選

会費 2000円(軽食・発表誌呈)投 句 11月10日までに投句料1000円を 添えて下記へ

〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野 1279 中 原 諷 人 方 川柳塔鹿野みか月事務局

川柳塔唐津支部

0

ta

12周年記念川柳大会

īF.

光

哲

静

弘

と き 11月2日 (水) 午前11時半締切 ところ 唐津シティーホテル(JR唐津) おはなし 野村 太茂津 氏

兼題と選者(各題2句)

「走 る」 田口 虹汀選 T AHE \Box 久保 正剣選 Tx. モ」 仁部 四郎選 「太 鼓」 古川 静枝選 「布 団」 橘高 風選 董 「青 101 板尾 岳人選 「 声 林 荒介選

会 費 2000円

連絡先 久保正剣 09553-73-2471

仁部四郎 09553-73-2262

水 煙 抄

9月号から

田 あずき

愛らしい顔してトマト熟れてきた

いかに丹精したかがよく出ています。擬人化 手がけた者にしか、こうは表現できません。 菅田 かつ子

のうまさと実体験の確かさです。 過去の愚を溶かすクレパス買い足して

に生きましょう。 です。目立たぬ色になったら、またしたたか 愚を新しいもので溶かす。すばらしい発想

てにをはの一字が足らぬ倦怠期

完璧だと思っていた愛情が、どこからか崩 塩路よしみ

れはじめる。何かつまらなくて、何故か不満。 てにをはの一字で終れば、いいのですが。

熱つづく夾竹桃の赤たわわ

次の句に風邪とありましたので、多分その 岡本道子

> もたわわに。逃げ道のない苦しさを受け止め 思います。夾竹桃の食い込むような赤。しか ました。 熱でしょうが、これが情念であってもいいと

さみしいとつい足が向く猫の墓

を皮肉っているようにも思えます。 来ます。素直な表現の中に、人間社会のエゴ さみしさがストレートにこちらに伝わって 久保良 子

人情がからむと崩れだす背骨

パチンコの背の淋しい男たち 森安 夢之助

Щ 勝

辻褄を合わせて雑魚の中にいる

伊津志

ダンス入門へアトニックも変えてみる

治

ていて、いい句だと思います。一見、力強く て頼もしい男が吐く本音は、女達にとっては 以上の4句は、男の虚と実の表情がよく出

実は溜飲の下がる快感なのですが…だから。 筋道を説けば古いと笑われる

るのですから。 も知らなくてもボタン一つで結果が現れてく 今の世には筋道なんていらないのです。何

父の日に値札のままのプレゼント

な攻めに合わねばなりません。しかし。 故郷の荷の紐のかたさは老父元気 感謝の日のプレゼントにも、家族のリアル

全く頭が上がりません。

今は老いた父でも、その確かな荷繕いには

次に帽子の句二つ

無駄なことしてると機嫌いい帽子

無駄な事をする時の心の豊かさ、機嫌のい

い帽子とよく合っています。

お若いと誉められたのは夏帽子

鍔の広い夏帽子は歳を隠してくれます。僻 勢理客 トミ子

まないで中身も負けずに若返りましょう。 医者の軒借りて燕は子を育て

白い設定だと思います。楽しい句です。 賢い燕ですね。事実であってもなくても面

木下道

お隣の朝顔一日早く咲き

方が歩が悪い。こんな気持よくありますね。 真面目にやっているのに何故かいつも自分の 何もかもが、そうではないのでしょうが、 近藤



季の移ろいを 追うていて歳をとり

横浜市 菱 \mathbb{H} 満

秋

路郎賞準優秀作

第一席

散骨もいい

かぎ

お墓に妻が居る

路郎賞候補作品

黒 JII 紫 香

鳩飼って手品のけいこしています

歩いても歩いてもひとりの夜明け 立読みの残りを買うた気の弱さ 頂点で足引っぱったのは女 敵にした方がよっぽど楽な人 本を活かすに捨てる花もある 島崎富志子 野村 松村迷観子 石垣 吉田あずき 京子

路郎賞準優秀作

第二席

柳井市

弘、

津

柳

慶

安心のかたちに

妻も子も眠る

富田林市

池

森

子

ジャンケンはするなと蟹の親が言う 簡単にノーとは言えぬのが未練 池内かおり 田中 久保 正剣 薫

望外の喜び

田 満

要なのであって…川柳の中に溶け込んで またま不朽洞入会を喜ぶ路郎先生からのこの度の受賞でさらに励みがついた。た この度の受賞でさらに励みがついた。 していたので戸惑うことも多かったが、 を誓うものです。 葉書が出てきて「川柳は不断の努力が必 柳を軸にしようと決めた。三十年も中断 下さい」とある。これを機に一層の精進 昨年三月、 年金生活に入るのを機に川

私の柳歴

平平昭昭昭 成成和和和 65393127 年年年年年 作句を再開する関東へ移住して作句中断 川柳塔社同人に復帰する 川柳雑誌社不朽洞会員となる 明和川柳青蛙会入会

推薦句

季の移ろいを追うていて歳をとり 菱田

ホイホイと梯子登って外された 金山 夕子

満秋

西 田 柳宏子

恋人のように親子のようにいる 小島

熟れ初めのリンゴわが娘の顔してる

かくれんぼ探せば鬼は塾の中 丁坪サワ子 真喜内 実

卒業式レモンの味のまま別れ お見舞にまごころこめた嘘を言う 甦光

まんまるな石ポケットに落着かぬ 吉田笑女 新家 完司

無位無冠三度三度のうまいめし 玉置 重人 都合よく忘れ上手に生きている 父親は由緒正しいなまけもの

原

さよ子

江原とみお

安心のかたちに妻も子も眠る

池

村 太茂津

距離おいてあなたの愛に生きている 妥協する度に指紋が消えてゆく 保州

グラスの中のたわむれなのだこの浮世 仮の世を散歩と思うこともある 顔洗う嘘つきがいる顔洗う 奥田みつ子 田中 西口いわゑ 内芝登志代 薫

にっこりと構えられては手が出ない 楊井

個人差を物差し容赦してくれぬ 疑いの深まる穴を掘っている

大橋

一南

英子 政良

孫弟子がしっかり癖を継いでいる

人間を見る人間の目が怖い

玉置

重人 楓楽

> 加 萬 萬

閑という悪魔が時々わるさする 踏み台があるから登れたのを忘れ 島崎富志子 河井 庸佑

ロボットは良いな頭痛の種がない 年金の引き算だけで済む暮し 石人形作るも丸い石がよい 堀端 三男

わけ言えというから嘘を考える おしゃべりも女多忙のうちに入れ 矢野 瀬 佳雲

本を活かすに捨てる花もある 〈推薦句〉 松村迷観子 高橋千万子

うぬぼれにこの頃多い誤字脱字 松下たつみ 幸運の女神 理詰めが気に召さぬ 秋元てる

高 薫 風

橘

唯物も唯心も無し唯昼寝 八十歳おもちゃのほしいほどのどか 寂しくて取り縋るひと間違える 山頭火歩き放哉座す秋よ 舟渡 越智 荻野鮫虎狼 杏花

長旅の終りにやさし母の郷 桜散る父と歩いた日のように 顔芸の要るお見舞をして帰り 舟木与根 本間満津子 木村貴代子 春子

的 砂曼茶羅 砂のみ仏

砂の経

佐治干加子

和が過渡期ながら実現した。腕振り上げてシ た。日本では五五年体制が崩れた。 散骨もいいがお墓に妻が居る メーデーの後に抽選会がある ュプレヒコールを叫んだメーデーも様変りを (評)世界的視野では東西の冷戦が解消し 弘津 小島 一応の平

この世もあの世も成り行きに任せることだ。 に心を打つ。自分の理想は散骨なのだが、す おたのしみ抽選会がある。時代を抉る。 でに眠る地下の妻を無視することは出来ない する。家族連れのお祭り気分の行列のあと、 あとの句は言わずもがなの夫婦愛、まこと

路郎賞に思う

西 尾 栞

ある。現在横浜に居られるが、之を機に の受賞で眠れる獅子が目を覚ました感が 輝かしい。長らく沈黙していたが、 んや菁風君と同窓生のベテランの柳歴が 川柳雑誌からの路郎門下生で、 いよいよのご清吟を祈る。 川柳塔横浜支部の結成を待つものである。 今年の受賞者は、菱田満秋君である。 今回



疑えば

海の碧さも空の蒼さも

宝塚市 永 田 暁 風

川柳塔賞準優秀作 席

女もう

女になった日を忘れ

和歌山市 榎 原 公 子

川柳塔賞準優秀作

広島市 森 田

文

児の寝顔

いくさにご縁ないように

第二席

金魚売りも風船売りも四苦八苦 どうしても思い出せない傘がある 手紙文他人行儀になり他人 牧渕富喜子 Ш

バイオリンもピアノも銀婚の音色 どこまで続く枕木 月といる 永田 晚風

森子

翠

犬の病院私の病院先ずさがす

森本

Ш 柳塔賞候補作品

小 出 智 子

新子

日本語でカルテは書いてくれないか 原 章峰

石川 勝

穂高仰いだ眼でバーゲンを選っている

何をしていたのか

田 風

などを近作柳樽に選んでくださった。そ を受けるのに違いありません。 十数年、何をしていたのか」と、お叱り 居る」「選っても選っても疵のある茄子」 みる。昭和五年に『川柳雑誌』で麻生路 の路郎先生が今ご在世なら「それから六 郎先生が、「ぐらついた椅子教会の隅に たいやら恐縮やら。古いノートを出して 「死んだ真似したまま蜘蛛は殺された」 川柳塔賞をいただくと聞いて、 ありが

私の柳歴

由吟中心に作句、 1989年 1972年 1925年 1909年 ほとんど、 どの川柳社にも属せず、 句集「風の貌」刊行句集「白磁の壺」刊行 川柳を作りはじめる 大阪に生れる 今日にいたる。 自

赤い実に群がる鳥よお前もか 岡本 道子

おみくじを何度引いても吉の寺 鳩の出ぬ帽子を父は放さない 大西 古久保和子

山よりも大きい夫の背の温み 玉 置 重 杉山

図書館へ行って欠伸をして帰る 大西 文次

湯の宿でうちとおんなじテレビ見る

移ろいの哀しみ背骨から曲がる 忘れたいことが邪魔して眠れない 長浜 澤田 沢田 和重

恋成就

大噴水も立ちあがる

ユーモアが欲しいと思う五十肩 通夜の席突如ポケットベルがなる 高田美代子

高畠 五月

児の寝顔いくさにご縁ないように

背中あわせで丸く生き 森田 土橋睦子

文

板 尾 岳

躍進の夢は捨てないかたつむり 少しずつ動き大きな乱となる 鳩の出ぬ帽子を父は放さない 喝釆は終着駅に待たせよう 満月へいたずら心ちぎれ雲 人間に戻ると流れ急になる 島 塩路よしみ 大西 木村 牧渕富喜子 高田美代子 ひかる 文次

〈推薦句〉

哲学をひとつ固持する自尊心 いさぎよく着地を決めた落椿

平川

ふつふつと木の芽言いたきこと多し

疑えば海の碧さも空の蒼さも

永田

暁風

杉 鬼

遊

魚屋のハエがもみ手をして迎え 右しよか左しようかやめとこか 岩倉キク子 村上久美子

きん

三文の得もないのに目が覚める 誰からも愛されていて恋されず 妻が居て子が居て父の軽さかな 電線のほどよいたるみ皮下脂肪 江城 松岡 河原崎礼子 出 遼雲

椅子が一つ壁に向って置いてある 永田 暁風

ふと亡父とエスカレーターで擦れ違う

女もう女になった日を忘れ 榎原 牧渕富喜子

宫 口 笛 生

暖かい息が見えそう如来像 窓の灯がみな幸せと限らない 骨董屋の時計狂てた方がよい 居て喧嘩居らねば淋し夫婦独楽 女の群へ少し油断をして這入る 人間が好きで喜劇を繰り返す 森田 文次 弘治 高子 文子 文

母の周りの空気はいつも澄んでいる 道子

会

諦めるために大根スパッと切る 三浦千津子

犬釘の強さを誰も疑わぬ

杉山

嘘ついてないから御飯よく食べる

川柳塔賞に思う

西

尾

栞

男性に替って、気を吐いた。暁風さんの なん、さもありなんと首肯した。昨年の ンの、永田暁風さんと知って、さもあり 御長寿とご清吟を祈る。 両賞受賞者が女性であったのが、今年は 今年度の受賞された方は、大大ベテラ

豊中市民川 柳大会

۲ ところ 豊中市立中央公民館1階集会場 課題と選者(各題2句・午後1時締切) 「風」住田英比古 11月23日(水・祝日)正午開場 「指」竹森 雀舎

形田中 「本」田頭 正坊 顔 「欲」波部 松本初太郎

1000円 (記念品・発表誌 友田茶の子

河 内天 笑 選

世渡りの下手な息子に看てもらう与野党の仲良くなってから猛暑 英 子

小雅子

川の無い橋から浪花暮れかかる レポーターよお前も何時か嵌められる 岡山県 小 子

疲れ 振 n 切った案山子点滴でも打つか 向きもせぬ神様へ雨を恋う

海南市 保 州

実を知らない大がよく吠える

ニセ札が出て本物を確かめる

箕面市 津 ようじ

不謹慎ながらも当を得た邪推

惚けてなお威厳を保つ元教師

木 公

弘、

ひぐらしの雨に草刈り機を止める 夏痩せのとんぼ眼鏡がよく似合う

本当は尻尾を巻いた武勇伝 清

史

逃げ道をつくり啖呵を切っている

まだ杭にひっかかってるあの喧嘩 紫の精がわたしを引きつける

強がってみても群れから出られない 悩みごとみな吸い込んで陽はまっ赤

ひやひやとさせつつ子らはひとり立ち きっぱりと否定しているのは背中

がんばって漕ぐがんばっただけ進む人並みの暮らしで敵も二三人 砂川市

ななめから見ている寒い目に出合う 溜飲を下げる遠吠えしか出来ぬ

欲望の電車に乗った青い毬 ひまわりのような女でまだ独り

い話ばかりを拾う通夜の客 兵庫県 北 111

今更とおっしゃいますな美顔術 倉吉市

説明が過ぎて感動ややうすれ

子

未佐子

西宮市 奥 みつ子

П いわゑ

新 司

政 良

祥

庵

ざこざを裁き仏と同居する とみ子 節 子

V2 V2

メルヘンの月を信じる子はいない

のめられたわけじゃなかった正直さ 久

なつかしの曲には動く耳を持

吹田市

まだ知らね横顔もありフルムーン ち

よく燃えるように心をほぐしとく 剛

治

旭川市 大

柏

お早うを返し長生きしています

風通しよくしておこう年だから 倉吉市 米子市 H 垣 和 花

勇敢に一つ残った菓子を取る

枝

子

笑ってる顔でバカンスが終る 河内長野市 橋 本 弘 美

セールスの電話を揶揄うてはならぬ 寝屋川市 岸 あやめ

騙されてみようか赤い便箋に 大阪市 本 勇 太

兵庫県 靖 子

孫ばなれ田圃ばなれをしようかな 和歌山市 秀

名古屋市 藤 子 転がされてみようあなたのてのひらで

ころころと笑い火種を撒いてゆく

ちょっぴり呆けて嫁に甘えて花いちもんめ 和歌山市 子

火くぐりをすませて神の声を待つ 米子市

うぬぼれで招いたミスがこたえます なだめてもすかしても炎になると言う ほのかなる思慕だんだんに熱を帯び 本棚に秘密が一つふえている ゆるやかなのぼりくだりの坂だった 寝たような寝てないような夏の朝 川幅が私の盾をしてくれる 絵 珈琲豆は友の顔見て挽くことに 陽炎に抱かれて狂う花時計 夫と息子が母の知らない話する 10 水すまし円描いてみる水が無し 重い人が握手をしてくれた ま降れば百万ドルの雨だけど 日記の一頁から蟬しぐれ 岸和田市 寝屋川市 籠 和歌山市 古久保 米子市 米子市 林 枚方市 安来市 木 唐津市 野 谷 本 橋 原 Ш \mathbb{H} みざ江 政 まこと 夕 U 晴 節 恵 頂留子 和 瑞 夏 宵 介 花 子 子 生 子 枝 子 子 明 旱天に死んだふりして生きのびる 熱風に攻めたてられて蟄居する もくれんの狂い咲きする水欲しや アスファルトに靴を取られるほど暑い 台風の待ってる時は来てくれず ため息を吐きつつ天気予報見る から梅雨の空に広がりゆく不安 太陽に解熱剤でも飲ませたい ダム涸れて埋れた村が顔を出す クーラーが鳴り続けてる夏の乱 仏さま井戸がお役に立ちました 義理人情忘れはせぬが暑すぎる 夕立に街が呼吸をととのえる 水撒くとトンボが尻をつけにくる 鳥取県 尼崎市 春 出雲市 弘前市 大阪市 鳥取県さえき 米子市 横浜市 菱 中 中 中 城 Ш 島 原 橋 田 崎 恵美子 年 はるお 勝 3 志 ちかし 満 中 P 雅 章 代 之 美 2 繭 久 重 實 秋 城 \$ 虫たちの指紋は花の底にある 街を出てでっかいひまわりに出合い 茴香に花 ひまわりがうつむいているもう秋だ シー 僕の笛みよちゃんだけが聞いてくれ あの世でも口外出来ぬ傷ひとつ ゴキブリに部屋の隅から見つめられ 湯上がりの鏡に亡母が重なった ご機嫌と後ろ姿に書いてある ストレスを詰めて風船旅に出る 水吞場みな近道を知っている 泣き所見てから鬼をおそれない 守ろうとするからボロが出てしまう スルー見た目ほどではない暑さ お隣もお向いも 五所河原市 藤井寺市 米子市 枚方市 米子市 鳥取県 米子市 小 大阪市 海老池

谷

笙

子

劦

岡

日枝子

さと美

富美子

富

子

林

保

水

倫

子

智加恵

美代子

田

鶴

美恵子

| 村長の髭に賄賂がぶら下がり | 鳥取市 田 賀 八千代 | 年金でやっと保っている父権 | 和歌山市 青枝 鉄 治 | 身内から水が漏れてた村護選 | 奈良市 米 田 恭 昌 | 空中散布で益虫も共に死ぬ | 静岡県 薗田 獏 沓 | 過保護食だんだん細るあごの骨 | 広島市 流 奈美子 | 体制に傾きかけた目を読まれ | 唐津市 久 保 正 剣 | リストラリストラ耳にタコ出来ました | 和歌山市 宮 口 克 子 | しくなる | 青森市 漆 戸 凡々子 | る | 香川県 山 地 マツヱ | 善人の嘘は笑って聞いておく | 大阪市 桝 本 蕗 児 | お悧巧に育ったひとの人嫌い | 大阪市 尾 崎 黄 紅 | ライバルの握手を果たし状ととる | 柏市 上鈴木 春 枝 | 真ん中に女を抜擢した布陣 | 兵庫県 遠 山 可 住 | まずボクが消される妻の消去法 | 綾部市 藤 田 芳 郎 |
|---------------|-------------|-----------------|--------------|----------------|-------------|-----------------|-------------|-----------------|-------------|-----------------|-------------|-------------------|--------------|------------------|--------------|------------------|-------------|----------------|--------------|------------------|-------------|-----------------|-------------|-------------------|-------------|-----------------|-------------|
| 試験紙に出ない私の彩もある | 弘前市 村 田 善 保 | 写経する妻のこころを計りかね | 川西市 氏 林 洋 敏 | 逃げ腰の男は追わぬことにする | 倉吉市 奥 谷 弘 朗 | 風化したはずの想いが疼き出す | 香川県 新川 マサエ | 言い過ぎた悔いを伝える術がない | 鳥取市 小 谷 美ッチ | ただ酒を飲んで深みへはまり込み | 高知県赤川菊野 | ガソリンのにおい残してご出勤 | 香川県高橋たみ | 前略と書いてひと時思案する | 鸣門市 八 木 芳 水 | 姑の元気素直によろこべず | 岡山県 矢 内 寿恵子 | 孝行は出来ず遺産はあきらめず | 神戸市 向 井 泰 子 | 過ぎ去ってみれば修羅場も喜劇だナ | 今治市 村 上 久美子 | 街ひとつ燃えあがらせて大ネプタ | 弘前市 佐 治 千加子 | 小選挙区 喧嘩の火種ありすぎる | 吹田市 吉 川 渉 | 怯えながらも原子の光あればこそ | 鳥取県 乾 喜与志 |
| 諦めを理解したのと勘違い | 姫路市 服 部 一 典 | パラセーリング鳥一族の仲間入り | 和歌山市 楠 見 章 子 | る | 八尾市 村 上 ミツ子 | 五分五分の不満で夫婦つつがなし | 京都市 松 川 杜 的 | 仮の世の灯に動くけものたち | 鳥取県 土 橋 螢 | 通帳の裏で野心も積み立てる | 茨木市 藤 井 正 雄 | ふと拾うヒントで流れ変り出す | 和歌山県福田和子 | ジェラシーが吠えて夫の灰汁を抜く | 和歌山市 山 根 めぐみ | すっぽりと出腹がはいるズボン買う | 出雲市 板 垣 夢 酔 | 別姓を名乗って女翔んでいる | 羽曳野市 吉 川 寿 美 | 足 | 豊中市 辻 川 慶 子 | テクノロジー神の心に爪をたて | 弘前市 一 戸 ツ ネ | おすもうさんのお乳搾ればこぼれそう | 青森市 工 藤 甲 吉 | 時々はへまをやらかす人間味 | 今治市 渡 辺 南 奉 |

居 この 自分史を書いてみたいと思う蝶 今頃に傷の深さを知る別れ 峰打ちの情けが今だからわかる 片言の童話の声に拍手する しばらくは浮きうきしてる待ち合わせ 貫禄はあるけどカルテ要注意 キラキラと優勝杯を敵が抱き 餅肌の赤ちゃん食べてしまいたい 棚経につきあ 字も口も下手で図太く生きている 老妻に波長合わ 時々は落雷もある孫の夏 酒屋の蠅 日から風の便りとなる別離 匹を追って飲む い細い声を出す せている余生 寝屋川市 寝屋川市 守口市 姫路市 鳥取市 大阪市 有田市 大阪市 唐津市 本 本 浦 間 城 田 本 田 田 上 江 田 久仁於 光 千津子 芙美子 満津子 とよの 忠 まさ子 君 帆 7 まさお 子 子 雀 度 京 111 男 もつ 二次会でことの真相聞かされる 円満の秘訣 少しでも私に味方あるすくい 助 足並みが乱れぬうちに手をつなぐ 山の神に伺い立てて返事する 祈禱料次第でという願いごと 泳げない女と水着知っている ファミコンのせいでメガネの孫がふえ 貝になることでわたしを守り抜く 悲しさは教育勅語まだ言える ああすると女房との縁切れるだろう みごもってペチャパイ丸くなってくる かっ たいないそれがわが家の悪いくせ た病の重さ自慢する 夫が妻をたて 岸和田市 有田市 出雲市 茨木市 豊中市 静岡市 永 町田市 静岡市 堀 佐 Ш 田 内 下 藤 崎 Ш Ŀ 中 原 П 塚 かなめ かおる 美津留 富志子 次 美 よしみ 良 Œ 柳 次 紫 公 遊 江 坊 枝 羽 峰 華 錆 子 男 番組 じい 塔社事務所へお送りください。 名も告げず去る親切を嚙みしめる 子の嫁はナース余生の主治医です

ちゃんにあけびのうまさ教えられ 根果 路 H よしみ 和

原色の好きな女でよく弾む

岸和田市 田 中 文 時

下手くそはとかくデュエットやりたがり 東京都 本

この命みんなの力もろて生き 河内長野市 岸和田市 喜 代 齋

松江市 登志子

はらわたを洗うと黒い汁が出る 違反金はバイトで払え母強し 鳥取県 隆 男 風

和歌山県 中 悦

金貸してなじみの糸が乱れ出し H 敏

の都合で亭主しまい風呂 枚方市

H 俊 路

鼻ひげの立派な部下が居て困る 岡山県 原 辰 江

を書き、毎月15日までに到着するよう、川柳 どの攻めにもゆるがぬ女城がある 欄への投句は、 必ず川柳塔用箋に三句

(河内天笑)

前舎のむ 八木干 代 選

十まで燃えると燻し銀になる

以名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名名

宝塚市 丸山よし津

後に摑むものはなんだろうね 銀になれるとすばっと書きました。この言い切りの力強さ。私は信じます。 えなくても、とにかく一所懸命燃えておれば、八十まで頑張れば自ずと燻し に書いているような気がします。よし津さんは燃えると、 今はただ自分のために川柳どころか、まるで判っていない自分を探すため どと投げ棄てたい気持になったこともあります。勿論、出来ればの話です。 あります。何のためにこんなに苦しむのか、どんなメリットがあるのかな ずっと前でしたが、私もわけが解らなくなったり逃げ出したくなった事も い加減に錯覚して見くびったり、揉みくちゃになって潰れたりもします。 をよほど確かめていないといい川柳が書けはしません。こんなものかとい 進んで自分なりの考えを持つようになりますと、まるで坩堝。自分の場所 してどうして大きくて深くて何度も壁に突き当たって、そのうち少しでも 紙と鉛筆さえあれば書けると、単純に入ってきたこの道でしたが、どう 難しいことを考

優しいことば遣いにひきこまれているうちに、作者の真意は真剣に「生き 不安ながらも何とか生き甲斐をみつけてみんなが生きています。前へ進む 凶なのか、それさえも判りはしませんが、摑まなくては大きな運を逃がす んとうにいちばん最後にしっかりと摑むのは何でしょうね。 るという意味」を常に凝視して暮らす日々なのかと合点させられます。 かありませんもの。「なんだろうね」と掌に問いかけている美代子さんの のものは何だったのでしょうね。摑もうとしたものが果たして吉なのか 今この掌に摑んでいるものは何でしょうね。たしかに昨日摑んでいたは まったくこの世の出来事は一寸先は誰にもわからなく、

藤井寺市

高田美代子

新聞ひらく

私の位置他人の位置

和歌山市

田

輝子

立ち眩みわたしで加減する行方 秋までに逢うておかねばならぬかと 元気の振りをする元気が付 外気には触れさせたくはない思い 祈るための時間を少しだけ残 白旗は私の影が振っただけ 交差して芽ばえたこれは何だろう 水がめの水面 定着の芥が流れ変えている 沙羅の花 わたくしの秋へひとりの縄をなう 苦の底を歩いてからは身が軽 りんご すぐ曇る眼 古人や豆腐 陽炎に影溶け込んで消えて 身のうちの 嚙む 鏡 花 月に浄化されしもの わたしに罪はなか くずれるように 瓶 何本あり生きる に花の 命と書いてある ない日なり 臥 いてくる 0 たか

アイロンでストレスぐいぐい伸ばしちゃう 八十のピエロ わたくしの微熱を知ってい 噴水をぐるっとまわりグッドバ しらじらと明けまなうらの人消える 陰干しでなだめておこう種袋 風を見に行こう背骨がきしむから うしろ姿映る鏡を買いに行 神護寺の闇に奏でる琵琶法師 の瞳は哀愁だ る 1

> 羽曳野市 米子市 歌山市 吉川 木本 板野 政岡 西出 北 日枝子 寿美

寝屋川 和歌山 米子市 米子市 島根県 八尾市 西宮市 枚方市 西宮市 堀江 山本 堀畑 新 松本 宮西 森本 奥田みつ子 西口いわる 靖子 半銭 文子 正子 弥生 節子

和歌山 米子市 尼崎市 野坂 春城 白根 小谷美ッチ 古久保和子 ふみ 年代

和歌山 寝屋川市 名古屋市 桜井 藤井 千秀

寝屋川市

姫路市

岸野あやめ 丁坪サワ子

幸せを割っ、の気持とわたしへのを 豊かさに女の針が錆びてきた 死に急ぎ妻を忘れてきて候 不足すると少しかしこ 波う 答 道地青 本 森 どう 下 芸 下の娘に生まれな! 云終えた象の笑顔! 心を殺 を伸 Н ٤ ヤの えには 順 0) かい 然と老 目 深 Ĺ は ち ガ 雨 を かの 42 ぎわり p 間 1 ら執 ばの 池 < て b 先ず がも てみ to 0 せ 破 12 違 水 たうは 大人 さらばえ 歩きつづ 11 0 1 ょ 睡 羅 n 窓か 入 針 は 0 つく 蓮 んな仏に見 0 如 答え 朝 との n 14 0 ta 0 3 をとき かっ に から ろい げ 顔 虹 む 向 0 **へるの** よろこ 拍手す けてな ば 旅 0 n 12 かい たふ 老い 脱け かい なるし せ £ 始 変えられ 8 えてくる ゑぼうし まっ 3 お 7 U # 蒼 気持 そう O VD だ 14 <

++ 和 米子 歌山 歌山 米子 歌山 西宮 屋 尾 I 市 市 市 市 市 中 木 宮 高 福 野 村 渕 倉 とし 富 木 芙 富 瑞枝 小みえ 佐 克子 夕花 喜 WD

き

米子 弘前 東京 H 歌山 田 塚 市 都 市 市 栗 池 玉 H 安 Ш 治 谷 H 寿 T 美子 加子子 新子 美子

幼

富田 西宮 歌 歌 Ш Ш 出 たず子 智

投

句

6

8

3

米子

市

花

園

町

1 4 和

待忘 に 表溢 札れ ゆるる よと肩 S: 0 を 抱 £

鳥

公 万

高

宫

月 \$ 過 朝芽 命 見 あ 去 顔 L \$ る ば あかの 数 か なたがいなかが 時 n 語 ボ り上手 かタンぐられるとたわれ 待 0 てる 人む はれ はち 誰る つも けん

> 姫 屋

路 JII

遊

峰

市

平 中

松 塚

か

す

煮 木植 茂 矢 KK

Ш

多賀

その川の 無拓には1 とり 茄 子 あ の草 えず 皮 深さを知られない雑名 赤 ち 40 2 が臥 i む ぬ魚 o It おる が # す 7 湯 自 浴嘲 ねい たちい るびか せてね 3

x

4

カ

赤水つ 亀 幾 ŧ 涸 の山 す 河 n -のけ 歩で余生 川に戸惑うじ えて花野 歩 12 H 雑魚の群れ と祈 辿 n るこ 0 3 症 群 居

3

毎 8 で糸 蟬 10 も た ぶ私 0 n 話 んと を陰 0 に同 夏とならぬ 甘 Ľ < 尻 7 なる 聞 す 13 V 気み 7 11

0

7

か

b

0

不

眠

出 明 3 42 服 心と定 8

な を Vi 鉢 ねつ あ て 路 ŋ か か 3

米子市

理 内 津橋

高

Ш 取

寿 Ш Ŧ

恵

取

H

たず を 12 12 1D なめ Vi

米子

村

春一

鳥 屋 青 取 庫 Ш 森県 県 福士 田 倉 森 村 垣 きみ 美 茜 丰

豊中 米子 有 宿毛 本 H 辻 岡川 村 松 永 井 田 か 智 加な 俊

寝屋 鳥 歌 歌 Ш Ш 藤 Ш 林 橋 井塩 三千春 紀 美 睦

8 木 T 代

岡 井やすお選



防災訓練筒から落ちてくるこわさ 筒先の力をためす出初式 掃除機のホースへそくり呑んでくる 筒先に使命のこもる消防士 筒開けて八十八夜の茶の香り

齋

竹筒の酒うやうやし癌封じ ピンク封筒祖母を案じる孫のペン 水鉄砲子の夢乗せた虹を生む 筒袖が袂になって娘が巣立つ 筒袖のドラマ泣かせた大根飯

筒袖に洟をこすった立志伝

凡々子

久

祝砲が響き沸き立つ二重橋 筒の向こうに貴方の未来見えます

師の活けた花で筒まで生きて来る 筒の花誰が替えるか無縁墓地 花筒に水たっぷりと盆の墓 竹筒を吹いて味わう釜の飯

内定が早や筒抜けになる社宅 竹筒に伝統見せる池の坊 筒抜けを知らず秘中の秘と温め 花筒へ新妻と言う花を添え 美しい花に逢いたい竹の筒 「止め料出したことまで筒抜ける

智加恵

筒抜けに話も走るバスの中

水筒の水がとりもつ君と僕 山あいの清水水筒並ばせる 筒抜けに裏まで見えるくらし振 筒抜けの方に宣伝してもらう 筒抜けを百も承知のほめ言葉 筒抜けの筈だ水面下で握手

筒 良心を詰め込む筒を手放さぬ 筒先の向きで正義が変えられる 問答無用筒向けられて何とする 北からの筒が日本を向いている 水筒が遺品となった玉砕地 一杯詰めると物が出しにく

企みは筒抜けですと妻笑う 花火師の気魄もこめる太い筒

時

波留吉 美代子 あずき 万華鏡夢が広がる筒の底 水筒の水は少うし残しとく 火吹き竹筒に女のドラマ詰め

振り向いて欲しい発煙筒をたく

剣

頂上に立てば筒先向けられる 銃身が悲しく光る平和展

濱田

良知

巣立つ子へ古い躾が生きてくる

古いものばかりではない粗大ゴミ

鉄倫

筒の中

天女は舞うてメダカ飼う

子

マジックの筒に楽しい花が咲き よし津 たもつ サワ子 重 圭一郎 もめるたび妻 古傷に触れて来る 古い物残したいけど場所がない 古簞笥捨てる勇気がまだわかぬ

朗 ネジかけてかけて励んだ古時計 ビル街でふんばっている古い屋根 ぼんぼんと柱時計の古い音 捨て切れぬ古着やがては捨てられる 着古したゆかたが肌によくなじむ 人間も道具も古く仲がよい

か

寿恵子 シマ子 落書の残る土塀にある温み 震度4古い柱を信じ切る 古いけどおだてて使うわが五体

太

子 昔からの漢方薬は古くない 財産は無いけど古いしきたりが 古いのが光る迫力には勝てぬ

> 智加恵 あずき 多賀子

清

戦争貧乏古くさいきなくさい 古い机が父さんの顔をする 酔えば出る古い話を聞いておく 邪馬台の史実を探る倭人伝 砂時計古い話は切り捨てる

みつこ

艷

子水 風

古

選

Ш 夕子

子

閑

遊時

古くさいと言われてもよいはったい粉

保

州

世紀末なるほど予言あたりそう

日枝子

保

なるほどと後で気がつく舞台裏

古くとも錆びてはいない脚がある 古日記むかしの唄は忘れない

たず子

IE

古いものためこみ原始林しずか

満

秋

サスペンス古い話で終りそう 年式は古いがまあだ走れます そうですねん私古いと笑う母 古い話を私に聞かれても 隙間から覗いてみたい古い家 保守のまま枯山水の中に住む 古傷にときどき酒を飲ませとく 古傷にこっそりくすりつけている 古女房と言われ潤滑油になっている お祭になると担いで来る古老 古疵の中のひとつがまだ痛む 誠実に生きて古いと言われてる 古傷に飛べぬ蛍を棲まわせる セピア色の写真の中に彼がいる 古いもの死なず仕来りあるかぎり 古い付き合いだから信じて貸したのに 曾祖父さんも首をかしげるから古 父の樹に古い話が吊ってある 40 たつみ はるお ダン吉 しげお ミツ子 み高正 京 めぐみ 圭一郎 英

なるほど

端 Ξ 男 選

なるほどなあと身につまされて見る芝居 なるほどと親も一目できめる嫁 なるほどと素直に言えばすむもの なにしても母はなるほど無駄がない なるほどの意見聖書に書いてある 別々に聞けばなるほど嫁 守備位置を替えたら飛んできたボール なるほどの一言だけで済む妥協 なるほどと次は予算がないと言う なるほどと聞いてるうちは脈があり なるほどと自信をほこる筆さばき なるほどと思う気持がゆとり生み なるほどと父に言わせた嫁の機知 若者の一理に老いをうなずかせ なるほどと思う鋭い野次もある あやめ ダン吉 虹 正 京 公 なるほどと後から分かる子育てだ なるほどと皆が納得して帰る

なるほどと気付いた深いふかい穴 嫁がせてなるほど親は損な役 なるほどと見れば見るほど血の絆 なるほどと気付くにひまのいる頑

なるほどと皆まで聞かず手を握る

なるほどと思うあとから妬心湧く 立候補するらし愛想よくなった 大正の知恵なるほどとうなずかせ なるほどとうならせて見る不発弾 プロ意識なるほど手抜きなどはない なるほどと膝を小さく叩かせる

めぐみ

白光子 サワ子 芳

郎

玉志佳

重雲兆

母が打つ釘はなるほど効いてくる なるほどと素直になれぬ行きがかり しげる よしみ

正芳 英

なるほどと得心させる太い眉 なるほどと思う老舗の隠し味 なるほどと敵の攻め手を賞めている 効くとこはちゃんと効かせる父の釘 なるほどという灰皿が出してある 地 高美代子 しげお 正 雄

抜け道をなるほど隅に書くチラシ 天 明

真心で煮るから旨い ・母の味

安美代子

なるほどと降参させる芸が無い

受け継いだ古い簞笥はインテリア

はやるのはなるほどうまいラーメン屋

三差路で古い雫の切れぬ傘

小西

雄々

なるほどと気付いた頃に夜は白み なるほどとここは息子に花持たせ なるほどと思い当るが口にせぬ

なるほどと素直に受けぬ子の不満

平野あず はるお 水 ŧ

少步数室

題 探

出 美 房

吉

す。それでは添削句から発表します。 比較して勉強して頂くようお願いしておきま を取り上げるようにしていますので、それと ないことです。そのような場合、代表的な句 の場合は同想句が多く見られるのは止むを得 ることです。盗作など論外ですが、特に初歩 言われるまったく同じ句が生れるのはよくあ 短詩である川柳の場合、 同想句や暗合句と

初恋の記憶を探すクラス会

恋人を探すと昔友だった

孝

原

人生の伴侶探してまだ独り

侑

里

(気まぐれな縁を探してまだ独り)

会場ですぐ探し出す白い髪

幸

夫

待ち合わせすぐに探せる白い髪 探し物欲の深さも測られて

宅

癌告知 見つからず意地になってる探しもの) 胸痛む薬は探せど見つからぬ 薬探してあきらめず 志

重

(子が探す特売場で燃えるママ

一日に一度何かを探す父 毎日の仕事の一つ探し物

、犬探すビラに家出と書いてない 電柱の貼紙可愛い犬探し

涼み台二人の星を探してる 涼み台二人で探す星の位置

(探すのに老眼鏡を先ず探す 落し物探そうとせぬ児等が増え 直幸

探すより買えばいいさと児の台詞

職探す身には日照りがきつすぎる あてもなく足を棒にし探す職

(二度の職探す肩書き邪魔になり 肩書きを捨てて探した仕事先 しのぶ

いつの世もコネがもの言う職探し

職探すわずかなコネも見逃がさず プライドをけずって二度の職探し (今)

子

プライドを段々下げて二度の職

探すこと大好きですと豪語する

郁

子

探すのは好きと牽制してる妻 言い訳のことばを探す帰路の足

春

枝

雄

残り火に風を探して燃えるもの

残り火にいい風下さい燃えたいの

とし子

母はどこベソかき探す特売場 言い訳の言葉を探す千鳥足 (義理買いをしてから探す家を聞く)

壺

無意識に児の唇が探す乳

いとし児の唇乳房探してる

ミツオ

義理買いをしてお目当ての家尋ね

(坂)

子

トミエ

文 子

退職後居場所を探す家の中

、失せ物は秘密探して落着かず

職退いて居場所を探す一軒家

黎之助

顔が合う僕のポケット探す妻

探し物している妻と顔が合う

重

心当り失せ物探し落着かず

姫

女

りつえ

探すには先ず老眼鏡探さねば

(おろし金一つも探す嫁の留守

大根のおろし機探す嫁の留守

(大)静

子

君

枝

ますみ 子 困るのはあなた探す気さらに無い 探す気がなくて物事動じない

足許にあった遠くを探してた 疑った夫へ詫びる探し物 疑った心を詫びる探し物

(足許の幸を遠くで探してた) 私の夢探しに行こう山の彼方に (古)正

子

閑

きっとある山の彼方に夢探す 人生迷路探し続けてはや還暦 彩

人生迷路出口探してはや六十路 子

、晩年の今どの辺りかを探す 晩年のいまどのあたり探してる 幸 枝

グルメ旅探し求めた味にあう

探してた味に出合ったグルメ旅

行 子

111 栄 84

7

高

| (光射す蓮のうてなに亡母探す) | 光さす蓮の花から亡母探す | (夕焼けに明日の幸せ探してる) | 夕やけのひと日を探す日にあてる 美 | (反撃へ意地で探した言葉尻) | 反撃の材料探す言葉尻 | (先達の句に真髄を探してる) | 先達の句の絞り粕拾ってる 忠 | (ばれぬ嘘どう探しても見付からず) | 吐いた嘘ばれぬ表情探してる | (空いた席ついつい探し年を知る) | 空いた席いつの間にやら探す年 辰 | (大人への入口探す青リンゴ) | 大人への入口探し四苦八苦 噺弘 | (探すのをやめて幸せ見えて来る) | 探すことやめて幸せ見えました。 | (福耳を信じいまだに探す福) | 耳朶が厚くて福を探してる | (フルムーン若さを探す旅にする) | フルムーン外で探している若さ | (想い出を探せば故郷盆の月) | 想い出を探せば笑うおぼろ月ッ | (ライバルを探してファイトかき立てる) | ライバルを探して今日の糧にする。 | (いつまでも夢を探して古希の坂) | 幾星霜探し尋ねて古希の皺っ |
|-----------------|--------------------------------|-----------------------|-------------------|----------------|----------------|-----------------|------------------|-------------------|-------------------|------------------|----------------------|-----------------|------------------|--------------------|------------------|-----------------|------------------|------------------|--------------------|----------------------|---------------------|-----------------------|-------------------|-------------------|--------------------|
| | 三重子 | | 美寿子 | | 男 | | 心 男 | | 碧 | | 男 | | 子 | | ミツ子 | | 瑠美子 | | 笑 | | ネ | (6 | 八重子 | | フク子 |
| 悠々とへそくり探す妻の留守 | アラ探しすれば一杯あるわたし | 特売を探す我が家も不況風 | 二の足を踏んで決らぬ嫁探し | 四方八方拝み倒して嫁探し | 血の絆探す孤児等に増える皺 | 子育ても済んで生き甲斐探す趣味 | 着想・表現ともに立派な句 | (大ショック眼鏡探せば冷蔵庫) | 惚けたかな眼鏡探せば冷蔵庫 | (国連の苦悩を探す世界地図) | 国連の動きを探す世界地図 | (古傷を探し政治を覆す) | 古傷を探し政治は流転する | (安売りを探す特技に支えられ) | 年金で安売り探す名人に | (父眠る戦跡探す半世紀) | 半世紀義父の眠る地探し当て | (青い鳥探しあぐねた道祖神) | 青い鳥探す旅路に道祖神 | (邪馬台国探し求めているロマン) | 邪馬台へ探し求めた土器ひとつ | (割り込みの隙間を探す目が刺さる) | 割込みの隙探す目に立たされる | (ふるさとの地図で探した遠い縁) | 地図の上故郷あるが縁探す |
| あずま | ふさ子 | 志華子 | タミ | 君江 | 隆 | 孝男 | | | 三千子 | | 一乗 | | 勝巳 | | (中) 弘 | | 方 子 | | 俊一 | | 武春 | | 晋 | | 義子 |
| 吉 岡 美 房 | 宛先 〒 583 藤井寺市道明寺2丁目11-4 | 題「山」 10月15日締切(12月号発表) | ♦ | 探すなと書いて家出をまだ迷い | パートナー探す政治の数合わせ | 私の句 | 伝承を探せば村に貌がある 半 畳 | たかが道問うに菩薩の顔探す キヨエ | 大欠伸出口探していたマグマ めぐみ | 原点に戻って探す忘れ物 敏子 | 好きな子は探さずにおくかくれんぼ 克 治 | 飽食のつけ探してる内視鏡 芳水 | かさしさを探し男は旅に出る 行子 | ポケットを探し出て来た飴一個 姫 女 | 生き方を探して寺を梯子する 彩子 | 探されてひっぱりだこの青い鳥碧 | 青い鳥探して森が深くなる 三津子 | 余生なお探しつづける青い鳥 絢子 | 待つのやめ探しに行こう青い鳥 よしみ | ひょっこりと出て来ますよと妻余裕 泰 子 | それぞれに探せばどこかある長所 さち子 | これ以上探しようない狭い語彙 ・ 直幸 子 | 支え棒探して蔓がうろたえる しのぶ | 引っ越して当分探すものばかり 芳水 | 片付けて探すに時間かかりすぎ ふゆ子 |

記念句集『川柳塔』を読んで

″重畳たる作品群よ″

寺尾俊平

はじめに

川柳塔八○○号記念川柳大会が盛大に開催 されたのは、今年の一月十六日であった。 やかに絢爛としたすばらしい大会であった。 そして半年後の路郎忌の七月になると、川 格式百六十八人の作家たちがひしめいてい る豪華句集である。一人十五句とあるから総 る豪華句集である。一人十五句とあるから総 る豪華句集である。一人十五句とあるから総 る豪華句集である。一人十五句とあるから総 をであるが が上梓された。参 れはこの句集を「川柳塔万句合」だなと考え た。その「万句合」の感想文の依頼が編集部 から届いた。これにはまいった。実は私は毒 から届いた。これにはまいった。実は私は毒 から届いた。これにはまいった。実は私は毒 た。その「万句合」の感想文の依頼が編集部 から届いた。これにはまいった。 を読ん

ろもとない。とにかく書くことから始めるしかない。なにしろあなた一万句と格闘しなくかない。なにしろあなた一万句と格闘しなくかない。なにしろあなた一万句と格闘しなくかない。なにしろあなた一万句と格闘しなく ま題を二つに分類して、それぞれに感想を主題を二つに分類して、それぞれに感想を申し述べさせていただくことにする。

出句者の県別分類について

までを何時間もかかって、確認を重ねた。そ効かない私は、出句者と県別のぴったり合うの興味である。悪い癖で出句者の県別の数つの興味である。悪い癖で出句者の県別の数加されているかどうか、これは読む側のひと加されているかどうか、これは読む側のひと

駄をした苦笑なのである。 いっ自答にいたった。自分が相当の無 が、という自答にいたった。自分が相当の無

出句者はやはり本家の大阪が群を抜いてい

きる。一番強い反応を感じたのは、同人出句 とに第二位に鳥取県があった。同人の部では を挙げて鬨の声を発しているような感じがし ものを莫として感じたわけである。かくして である。なにか川柳塔社諸君の誠意のような ゼロで一般参加の出句者数が第四位の愛知県 れによき指導者がいらっしゃることが理解で れから兵庫、 作家たちの顔が十何人か浮いては消えた。そ 営たるご努力であろうと、存じよりの鳥取 出句の約一八%を占め、一般投句者を合わせ てならなかった。 全国の精鋭たちの数が度数分布表の中で、手 ても八%強の数値で堂々の第二位である。 て約二〇%を占めていた。そして驚くべきこ これは鳥取の先人たちの川柳塔に対する営 和歌山、島根と続くが、それぞ

作品について(同人の部)

て比較しながら作品を吟味させていただいた。り昭和四十九年版の『川柳塔』句集を拝借しり昭和四十九年版の『川柳塔』句集を拝借しる基準として、橘高薫風氏から二十年前つまる国のこの句集の作品を評価するためのあ

なくなったためと言えよう。そして同人諸君 品の中にあるべき思いというものが極めて少 現がこの二十年間にほとんど単純化され、作 り、やや軽いタッチの作品が多くなった。こ 現の中にあるペーソスのようなものが無くな るように、いわゆる "川雑調" といわれる表 間に半数以上亡くなられ、このことを証明す 雑誌社時代からの作家諸氏が、この二十年の が強い。しかしながら同人三百三十人、四千 のことの一要因として日本語の持つ曖昧な表 を大きく変化させた感があった。それは川柳 の作品はそれぞれに個性の固定化された印象 二十年の歳月は川柳作品のその表現の傾向

のは当然である。 ヴァイキングゆっくり食べたことがない

河内天笑

九百五十句には味わい深い佳品が多くあった

好きな彼の照れかくしの表情が見える。私も 料理をするが、味があまりわからない。 筆談してくれてパッと若くなる 料理は味わうものでなく、味わわせるのが

んでいて心が温くなる。 毒虫になりたし君を殺したし 難聴の哀しみをほのぼのと歌っていて、読 小林

夫

私もこんなこと言って、女性に迫ったことが ある。若いというのはいいものである。 視力ぼうとリラが匂うて来るあたり 若者の慕情は時としてこんな表現をする。

がよい。 んにくの句がした。句はやっぱりリラのほう である。山妻とはじめてキスをしたとき、に 眼を病まれる彼女の感覚が冴えている作品

いんいんと鳴る間に永遠の時間を刻む。 に微妙にくいちがう。なかんずくお寺の鐘は 私と山妻の時計も、そのこころと同じよう 政 岡 日枝子

時計はいつもお寺の鐘とくいちがう

このように忘れなさいと花が散り

はなかったのであろう。 しみに耐えている人には、こういうよりほか そんなに簡単に忘れられるわけがない。哀 部 さと美

うなものから生まれる。心すべきことなので ありますぞ、諸君 そんなこんなはすべて作家たちの安心感のよ になった途端に創造力が平均化してしまう。 許し願いたい。私などもそうであるが、同人 感想を述べ、その責を果たそうとする私をお 同人諸氏の作品からたった六句を掲出して

作品について(一般の部

ーバーな表現をしたが、私のおののきが叶う 下手くそなりの美しい夢があるのである。枯 くまで下手な作品群である。そしてそこには 極まるものがある。そのかわり下手くそはあ こそ玉石混淆ならぬ玉々石々重畳の作品群な 種の身ぶるいを感じる。というような少しオ 淡と夢の重畳する中をさまようことは、ある であろうか。ためらわずに前へ進もう。 のである。よいものは凄くよい。枯淡の味の モナリザの顔して試着室を出る 般とひとまとめに呼称するが、この場所

自分の容姿に酔ったのかは不可解です。 とに把握しています。服が気に入ったのか 振り向かぬ約束二人とも破り 陶然とした顔で試着室から出た表情をみご

と帰った。私はそれから負け続けである。 って別れ、すぐ振り向くと彼女そのまますっ 抱くものを亡くしてなにを抱く秋ぞ わが山妻に、振り向きっこなしだぞ。とい

るところであるが、亡妻記は胸を撃つ。 氏の作品の凄絶さは、予てより承知してい

絶対にいかない。電話をした先方様の形相はうまい比喩である。人間はこんなわけにはうまい比喩である。人間はこんなわけにはあきらめたように電話のベルが止む

やっと終りの青い扉を閉じた。と、たった四句掲出したのみで紙数が尽きと、たった四句掲出したのみで紙数が尽き修羅であろう。

読了感というものは、なにかこころの中で

を感じたのが印象として残る。そして最後にれは美術館でたくさんの名画と対面した後とれは美術館でも伝わってくるからであろう。 一万句は川柳塔社のこの時代の歴史書である。ぱらぱらっとページをめくるたびに喚声る。ぱらぱらっとページをめくるたびに喚声る。ぱらぱらっとページをめくるたびに喚声を感じたのが印象として残る。そして最後に表現できない昂りを感じるものである。こ

「川柳塔ばんざい」こう叫びたい。

男性同人五名を摘み食う

中原諷人

対い日からの記憶にないような酷暑。山陰 が地でも五十五日間も雨の降らない灼熱日が にこの句集の中の男子同人の句について論評 を…云々」と本社から届いた封書。確かに私 を…云々」と本社から届いた封書。確かに私 を…云々」と本社から届いた封書。確かに私

檄を思い考え、応えねばなるまいなと未開封れてしまうのだ…」の柳友の声と本社からの「日頃、本社への出句が無いからからかわ

を自覚し、反省しています。

ぱり私は田舎生まれの田舎育ちで世間知らずがつきかねる未知の御名が多いのです。やっ

いが男性軍の作品と感じました。男女の区別

参加同人三三〇余名のうち、一八〇名くら

の荷を解き、皆さんとの対話の始まりです。の荷を解き、皆さんとの対話をしなくてはなる」と記されているように、すべて個性の集る」と記されているように、すべて個性の集め、皆さんとの対話の始まりです。

さすがに男性の作品、妻・夫婦・政治・会性など社会派が多く、自らの心を吐くことに は照れがあるのかなと思うと共に、不必要な 中八の作品・それで何だの作品・生々しいことばで飽きたりぬ作品・その日その場限りにとばで飽きたりぬ作品・その日その場限りに とばで飽きたりぬ作品・その日その場限りに とばで飽きたりぬ作品・その日その場限りにとばで飽きたりぬ作品・その日その場限りに とばで飽きたりぬ作品・その日その場地を学びます。

川柳塔には、惜しまれる人であり、蘇って 自欲しい人、谷垣史好大先輩は、昨年の秋十 月に六十九歳で路郎師のもとへ走りました。 「元気やったら鳥取行くのになあ…」を口癖 にされた "おめでとう会" などの会話を偲ぶ。 尿はつめたしおしっこはあたたかし なつかしい見舞い明石の焼あなご 蟬三日蛍二十日の尊厳死

私を攫わないで私を育ててください。合掌結果的には、死に急いでしまわれたのです結果的には、死に急いでしまわれたのですがに急ぐことはないが誰かが呼んでいる

あの世から密書が届く出かけねば

何かテーマをもって、一頁全体で物語る手

は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集は避けたいものである。合同句集と個人句集はかろうか。仲良く頑張りたいものである。

伝統的リズムと無駄な助詞が一つもない。 ながく雪国の人の情けに会えますこと切に。 今治・越智─水の生命観の作品も魅かれる 今治・越智─水の生命観の作品も魅かれる

とも否めない事実かなと私自身も感じている。 気をつけねば他人の二番煎じになりやすいこ 気をつけねば他人の二番煎じになりやすいこ でのち、テーマは永遠の課題であるが、 でのち、テーマは永遠の課題であるが、

天高し善いことをしてみたくなるなる。おもしろい…ではないか…。 は参考に江原とみお作品の "ひらきなおり"は参考に江原とみお作品の "ひらきなおり"は参考に

枕の底から早春の陣太鼓

尻もちをついた形でいる独り弱点を曝そう今日はよい天気

冶の真情美の詩』、努めて遺さねばならない。気恥ずかしい作品鑑賞です。先ずは "人間陶気むなどなど、有能な作家の前に跪きながら、

路郎賞受賞の女性を拾う

まっていることに何度も気付きました。その所へ通った忙しかったけど充実した日々を、今なつかしくふり返っています。
「腐整理や校正などで、応募された句に目を通していると、うかうかと引き込まれてした。

みそうで、暗記まではしない。

雪国の人あきらめて雪の下

おもんみれば一行だけの我れである

人生はよいしょこらしょにどっこいしょトンネルを出ると青春過ぎていた蟹の泡うふふうふふど笑ってる

見直します。こういう場合は句との距離を保たび「はっ」と気をとりなおし、あらためて

みたくなりたいと念う。が、真似した句を生

"つぶやき型"になっている作品群。必ず詠

と大人らしくなったとき詠めるかもしれない。大先生の作品には目を通しておきたい。もっ

川柳塔に所属して、青森・工藤甲吉という

仕事にならないのです。 ち、冷静な眼で字ヅラを追ってゆかなければ -

るものではありません。 薫風理事長ほかスタ いたちのほとんどが、激動の昭和をくぐり抜 大たちのほとんどが、激動の昭和をくぐり抜 大たちのほとんどが、激動の昭和をくぐり抜 がとも言える句を、字ヅラだけ追って読め

たことと思います。

鑑賞を仰せつけられたのは、同人の応募者

爼板を叩いて愚痴は千切りに

書きすぎぬように大事なひとへ書く

賞させてもらいました。

私も手紙のやりとりは大好きなのです。けれどよく考えると、あとに残るこわさがあるし、表現力不足で相手に誤解されることもあるでしょう。そんなリスクを超越して余りあるでしょう。そんなリスクを超越して余りある、この句のような手紙を書きたいし、いたがきたいものです。けれどよく考えると、あとに残るこれさがある。

見え過ぎる眼鏡で友が減ってくる

この「見え過ぎる眼鏡」で、人の心を打つ句そうはゆかないのが世の常というもの。でも条件が満たされれば申し分はないのですが、友達は数でしょうか質でしょうか。両方の友達は数でしょうか質でしょうか。 手 千寿子

がたくさん生まれるのだと思います。

人の世は十人十色ですが、それを全て容認

はつ絵

春の一日洗濯をして終る

て表現され尽していて見事です。 ない というという でも全この中に主婦の憂鬱、アンニュイ、喜びも全この中に主婦の憂鬱、アンニュイ、喜びも全に表現され尽していて見事です。 小 出 智 子

梅のささやき他人の頬の温さともくの人に感銘を与えました。中途失明というくの人に感銘を与えました。中途失明というこの六月に上梓された句集『銀髪』は、多この六月に上梓された句集『銀髪』は、多

それぞれのやり方ですと蟹が言うばに、梅の花がたしかにささやいています。としました。今この句を鑑賞している頬のそとしました。今この句を鑑賞している頬のそれぞれのやり方ですと繋が言うれているが、梅の田、組久子

ttりし子きで乗っなりと言わせていると言葉を使わず、蟹にさらりと言わせているところが、心にくいと感じました。

誰よりも好きで嫌いなのが自分

友達にしたくはありません。 「誰よりも自分が好き」なだけの人なら表わせないことが、ズバリと指摘されていま表わせないことが、ズバリと指摘されていま

余白残してあなたの意見待ってます

じいちゃんに勝つばあちゃんが嫁に負けこの心の「やわらかさ」だったのです。秘密を垣間見ることが出来ました。それは、秘密を垣間見ることが出来ました。それは、

はっきり見えてきます。はっきり見えてきます。

どの彩を足しても虹が落着かぬ

木枯しに美味しいパンを抱えてる

ひょうたんの駒を出そうとあせってる。 ラーイーオー

麻生路郎の作品とその周辺

大学のこころ

(46)

橘高薫風

は変らぬ忙しさ、五月七日夜行で簸川支部五ほっと一息ついた余韻の中で、路郎先生だけほっと一息ついた余韻の中で、路郎先生だけ、川柳雑誌百号記念号は好評であったし、付

周年大会のため出雲今市へ。 出席の通知もされずに突然線之助君を訪ね とうです。大会は線之助君の孤立の立場にありながら地方としては稀に見る盛会だった事りながら地方としては稀に見る盛会だった事りながら地方としては稀に見る盛会だった事は同君の労が如何に大であったかを思い、感は同君の労が如何に大であったかと思い、感は同君の労が如何に大であったかと思うない。

朝日会館で「川柳の夕」が開催されたすぐ

本誌の選者として左記の諸君を推薦するこ本誌の選者として左記の諸君を推薦することになりました。従来、共選選者の朝田新水、とになりました。従来、共選選者の朝田新水、桜井円角、阿形一杉、生田翠夢、西村明珠、福井円角、阿形一杉、生田翠夢、西村明珠、福田鶴峰の諸君を共選選者に推薦することになりました。とある。

でに選者の推薦制が行われていたのである。たず共選選者の資格を得て、その後、個人選先ず共選選者の資格を得て、その後、個人選の選者に推される。筆者が川柳雑誌の編集部の選者に推される。筆者が川柳雑誌の編集部のを頂戴したのを覚えているが、その頃にはのを頂戴したのを覚えているが、その頃には、個人選供選選者というのはなかった。

参加、 峰、 川句会が昭和図書館で開催され、八十名から 時の新聞社の肩入れの傾向が分かる。 本社から水車、夕鐘、豆秋、柳秀諸君ほかが 朝日十周年記念川柳大会を開催されたので、 後の五月十五日、大阪朝日新聞社楼上で週刊 りだが、様子は一転して、六月十日橋本緑雨 杯を手にして帰阪する。と相変らずの多忙ぶ モスフェアを楽しみ、翌朝、 念の延長で、散会後、 の出席者が作句三昧に浸った。これも百号記 六月四日の夜、 変人らと京の街で飲み、花見小路でアト 約二百名の出席があった。とあり、 川柳雑誌社京都支部の加茂 路郎は緑雨、 平野家で再び洋 、琴人、

と盛会を祈るのみで出席は見合わせる。共に研究方面へも伸展せんことを切望する

以上、今回は百号の催しの余波を記録した。

第一回に招かれた路郎も、

「この会が親善と

回が函館で開催されることになっているが、

路郎のペンで、なお次のように続く。路郎のペンで、なお次のように続く。十一日の本社句炎の手術を受ける、とある。十一日の本社句会は縁雨君は入院中だし、路郎も健康を害し会は縁雨君は入院中だし、路郎も健康を害し会は縁雨君は入院中だし、路郎も健康を害し会は縁雨君は入院中だし、路郎も健康を害した。

明けても暮れても髷物がやりたくてたまらず、 役者としての実力を発揮するだろう。社会劇 女形。 だけでも納涼劇の価値は充分だろう。目下一 剣劇に出演するのであるから、ヒヤヒヤする 近く句会の余興として上演するそうである。 と続いた緊張感のあとの心のほぐれが窺える。 杏三、柳秀、素人に、かくいう路郎である。 なら出てもいいという色気のあるのが葭乃、 ふで一座を圧するだろうし、華水君は二枚目 南君が脚本執筆中である。かほる君は天性の 剣道四段、二刀流の使い手である二南君が かほる君、 また、七月三日に青函親善川柳大会の第三 里十九君は多年浄瑠璃で鍛えた名せり 里十九君、二南君、華水君等は



毎月25日締切・ 30句以内厳守

尼崎尾浜川柳会 前田いわ お報

この辺で一雨欲しく

孫はしゃぐ 笹舟流すキャンプ場 メリットがなくても人の世話が好き 緑蔭で一息入れる 市場籠 間違いをうんとは言えぬ父と住む 、ストは尽した無駄だったとは思うま 徹も時の流れに丸くなり 末貞一 よしる す 治

左巻きの渦が流れて荒れ模様 車椅子浮世の声は聴き流す 血の流れ孫のジョークに眼を細 S

夢之助

勇次郎

治

れいじ

峰

過労死をした一生が無駄なのか 夏まつりお化け屋敷で泣かれてる 無駄だとは思うが最後の手を尽くす 山水の絵から涼しさだけもらう 結び目を手抜きはしない母の糸 A型の女で思いきりがいい いわお 十四郎

園山多賀子報

いずも川柳会

今日も晴れ同じ挨拶繰り返す

子

頭上から吹く風だもの返事する 仏壇へ合掌出来る子の安堵

うれしくない電話にも妻のはずみ声

酔いざめの水に後悔少しある 未練のように懺悔のように水が洩る 駆け足のように短いスケジュール 短足でないと似合わぬ田んぼ道 短い影と石段降りていく ありがとう母へ短いメッセージ さよならの短い言葉聞く重さ スピーチの短い人に湧く拍手 男とは短い言葉で用が足り 近過ぎて短所ばかりが目に入る あいまいな返事で濁す処世術 なんべんも足を運んでいい返事 里からの返事待ってる夾竹桃 イと言う返事一つで任せられ

ちかし

岩清水飲んで水筒補給する 陽と水が育てる大きな明日の夢 八月の悲しみ深い水溜り 誘い水うっかり吞んだ天の邪鬼

夾竹桃水を欲しがる原爆碑

生かされて今日も仏の慈慈を知る 誤解今晴れてきれいな天の 仏にも鬼にもなれず只の人 そわそわと仏も盆で里帰り ふところを知らぬ娘の晴れ 古井戸に助け求める晴れ続き 隅を照らす仏の手にすがる 111 姿 石

ひろし 茂 まこと 美 子

諷云児

真

子 柳

罪深く仏の道は通れな

多賀子 きみえ 草 蘭 裕 丘水 良 よい眠り亡父とゆっくり話し合う 放置自転車身の置きどころない梅雨 造成地の夕日私も染め上げる 土がある花を育ててみたくなる

魚煮る秘訣は母の落し蓋 ナイターへやっとお星が見えた宵 おふくろの味に秘訣などありません 商いの秘訣しってる招き猫 野心なんか捨てよう秘訣がないのなら よその子と比べあせらないのが秘訣 十年一日妻に敷かれるのも秘訣 ご婦人を口説く秘訣は知っている 狂い死するほど恋がしてみたい 永持ちの秘訣何にもない夫婦 狂わない時計ときどき持て余す 宵寝して祭囃子をそとで聞 宵山に知らぬ女と手をつなぐ 人間ドックそれから体調狂いだす 風向きが再々変り草臥れ の花狂い咲きする猛暑の京

白渓子

求

夕凪のほてり繕う通り雨 悪友がまたも予定を狂わせる 今宵こそ月下美人の咲く予感 明星とスペースシャトル宵のショ 旅三日花の水遣り口にする 今宵こそ逢える気がする星月夜 英倫正 飛杜 鳥 子坊

7 る 女

武庫坊子

波留吉

礫

子 的

百合子

生涯に何度戦う男たち どん底を耐えて男の顔になる

頼られて男が咲かす多年草

高槻川柳サークル卯の花 川島諷云児報

ひたすらに老後の石を積んでいる

ひたすらに海見てござる島の墓地 わが党をひたすら守る屁理屈で 冷静になろうとするがこの暑さ ひたすらに生きてあの日の花言 雨はひたすらわが愚かさを打ちにくる 葉 太茂津

的

満洲子

圭

秀

改悛のこころで叩く地獄門

苦労せぬ子が偉そうに口叩 叩きつけられてこの世にある未練 雨垂れのリズムで夜が更けてゆく 真っ直ぐな意見末席から叩く 利かん気の子叩きたい手に鍵かける

冷静を装い修羅の風を切る 冷静に夫婦のもつれ糸を解く 遺産わけ父の羅漢は太っ腹

ひでお

あきら

よく歩いたと撫でて労わる土踏まず 子を抱いて地蔵の足に踞る せっかくの素足やぶ蚊は見逃さず 叩き台踏めば聞こえる父の声

しゃかりきに生きて血管浮く素足

悪気などないから常に汗流す 汗かいて上着も取れぬ辛い席 ササヤカな城を汗して守ってる 熱帯夜やせたい汗を絞り出す

百合子

蹐

桂

しんがりの汗の辛さを忘れない

波留吉

艷

三千子 美智子

殼を脱ぐたびにトンネル長くなる 冬彦がときどき脱皮考える 大胆に脱いで女の試着室 歩く姿で靴を脱いでる夏休み やっと義理果した白い足袋を脱ぐ 松芳 恵美子 重 スミ子 英

公保鉄 子州治

約束の小指が疼く待ちぼうけ

妨げがあればあるほど燃える恋 刻を待ち信じて祈る仏間の灯 仏壇に灯 先祖へ語りかけ 年金を貯めて子供に不和残す 無い袖も振らねばならぬ時もある

脇役の似合う女でアッタカイ

あきら

マサエ

爪切ってくれる女と旅に出る 尊敬はせんけど頭下げておく 株式をノートにつける妻が居る 教科書にのる川柳だ胸を張ろ

諷云児 紫正節 坊 子

どうせならガッポリ欲しい袖の下 柳塔おっぱこ吟社 木村あきら報 マツエ ひかり

天狗には見えぬ敗者の涙壺 妻とふたり終のすみかの豆ごはん 佳句地十選 111 端

美恵子

汚されたまんまで街は病んでい 暗い過去語らず羅漢まるくいる 少年の夢ははるかに虹を越え どの指も宝石持ったことがない 良妻でいようか残り火が揺れる いい答欲しくて森をかけぬける 武庫坊

妙なところで男の意地が邪魔をする 逞しい男の背なについて行く

まだ苦労したい相手と出合わない 忘れたいひとが心の底に棲む ほころびをつくろい合ってまだ夫婦 コメ不足なんとかすめば水不足

白渓子

雑兵が盥で泳ぐ波しぶき さくさくと乙女の匂い立つりんご 男ならここは堪えろと喉仏

脱ぎ棄てたままでひとりのめしにする

妻だけが男の面子立ててくれ

いた男を試す夜叉の面

さち子

気の弱い男におくる肝っ玉 拷問に耐えた男の優しい目 男なら怒鳴るばかりが能じゃない 星ゆれて億光年と対話する NASAからの対話宇宙へ夢ひろげ 不景気で神と仏が話し合う 美女対談スパンコールがよく喋る 対談の火の粉かからぬよう終る 寝つかれず母の写真と対話する 灼熱の砂素足で踏んで想い断つ

ーモニカ吹いて男が泣いている

(9月号から

災いの口を縫う針ノド仏 逃げの手は教えなかった亡父の駒 漁り火が水にキラメク鵜飼舟 早起きでウマイ空気を送り込む 来る人の目を楽します花菖蒲 作り笑い頭カキつつ恥かくす ソッとしておくれ男の恥だから お節介焼いたばかりに恥をかく 遠い灯も近い灯もあり蛍狩り の人の名前を捜す川

d. かおり いさむ チカエ くに子 仙 延 貫 燃えるゴミ燃えないゴミか妻の留守 チンと鳴る料理へ情け冷えて行く 料理した夕食たれも帰らない 残業のうどん社長の分もある 三者三振みな簡単に料理され 川柳若葉の会

迷

治

宮崎シマ子報

信じてる時は大きく見えた人 それぞれに神いらっしゃる信じよう 生きている信じるものがあるらし うどんやで立てた謀反はすきだらけ 庶民とはいいナーうどんすする音 信用度ゼロたよりないうちのパパ 信じたら死ぬまで友を信じぬく 後継がぬわが子の夢を唯信じ 横文字のカルテに伏せてあるいのち 一人きり小さくなったゴミ袋 ーゲンにつられ袋が重くなり 千枝子 シマ子 光子 あずき 欣史子 田実子 香 能

母の日も母の料理でみんな寄り

風

病窓へ燃ゆる大空語りかけ 湯上がりのビール飲み干し至福かな

川柳クラブわたの花

宮崎シマ子報

中なみ子

III

竹

松風報

トシエ

道

惠

坊さんが外車に乗って出かけます 燃える夢夜空に祈る只無事を 若者のいのちが燃える村まつり しみじみと亡母の思い出古簞笥 金魚売り昼寝の夢を赤く染め

古手紙過去の焰の色で燃え

君春雅

黒枠の夫が私を監視する 文通の彼を想像する書体 肩の荷が重いが坂はまだ続く 坂道を肩で息するのは息子 七坂を越えてあなたの妻でいる 坂道にかかって夫婦手をつなぎ

しのぶ

治 江

思い出の頁に春の雨が降る 昼のソファー祖父は思い出タイムらし

々燃えて余命を奉仕ペダル踏む

公園でモラルを二つほど拾う

公園のベンチー期の出合いより 公園で誓った愛も風化する バーゲンへ女心がもえ動く 味噌汁にするのにアサリ汐を吹く ひっそりと咲いてバラより燃えている よく燃えるように心をほぐしとく 休耕田思い出つもる老いの鍬

ますみ

美津留 シマ子 明 子

英

鬼

柳後楽吟社

エレベーター奈落の底へ落ちてゆく 定期券返して寂しく電車見る 善人が話せば温い風が吹く 大き目の帽子は右派の支持をする 古疵を背負って登る老いの 職安へ通う味噌汁がうす 手応えは笑顔で返る少年

腹立てた自分がわびしい日の悔み 野晒しの貨車責めるのはもつよそう 方言の一つ土産に旅帰り

相性の悪さ相手も知っていた やむを得ず二人を許す父の酒

雑草も舗装の割れ目に出て慌て 晴れ続き河童の皿も乾ききり 地酒よし歌も飛び出す旅の宿

功

金

春 鳥野枝雄風

岩美川柳会

公園に孤独を埋める椅子がある 公園もモダンすぎては落着かず 公園のベンチ温めるだけの恋 ラジオ体操する公園の指定席

従野 和圭

風子風

京

子

この渇き潤す雫は蜃気楼 一晩の生命の蛾ならたくまし 12 佐加恵 柳五郎 道 たけ 郎 風 志 友 秀 風

羽津川公乃報

音に聞く実力者だがしゃべらない 嬉しくて爼板の音良く弾む 万歩計音なく歩幅狭くする 音のない音が夜道のあとを追う

男江由女

どつ 聞き慣れた音で始まる朝がくる 時鳥水車の音も変りなく 音もなくエイズ広がりゆく恐さ 拍手の音で始まる父のめし 音楽はいつも百点だったのに 歯ごたえが満足そうな音で鳴る 助け呼ぶ鏡に咄嗟の知恵がある はったりで銭を摑んだ奴が勝ち はったりで生やしたヒゲも薄くなり はったりの裏ではカネを借り回り 先細り人生だったなと思う 狂い咲く花も女も音たてず いろいろな音が聞えるありがたさ 音のない絵から聞こえる風の音 音にきくほどでなかったライバルだ 過去水に流せぬ性を持て余す 古里も賑い消えて無人駅 呼び止めてゆっくり戻る金魚売り 旧姓で呼び合い少し若返る 王様になったつもりで妻を呼ぶ 先陣の群に入っている安堵 雑兵のいつも汚れた靴の先 神主さんの叩く太鼓に目を覚ます 女に頰を打たれた音で目が覚めた 初恋の先ある若さ許される 騒の音に目覚める冷凍魚 ちが先になっても骨を拾う仲 愛論報 きみ子 美代子 美恵子 嘉津江 はるお 喜与志 正睦 太孤 たもつ 猪太郎 文 螢 英 舟 秋 車 風 似合うたら金に糸目のないおしゃれ 太目ギャルハワイ腰蓑似合う尻 形見分け着ると親父に瓜ふたつ 飼主と何故か似ている犬の顔 名優はどんな衣装もよく似合う 他人から見れば些細な内助 庭石の数確かめる竜安寺 何もない庭にもトンボ来てくれ 過去帳の何やら読めぬ字が並び 縫針が一本落ちて妻不在 子育ての歴史縫針知っている 縫い針で家計助ける嫁がいる 世間態似合いの夫婦で押し通す 掛け値なしほんとに似合いの夫婦です 舞の海似合う小回り効いた技 ぼけ役が似合う役者の芸光る 私には似合いの夫で無口です 長雨に納期が迫る飯場酒 よく食べて飲んで寝息も楽しそう 心地よい寝息検査は白と出る 健やかな寝息聞えてくる平和 騒音も苦労も知らぬ子の寝息 縫い針の労をねぎらう針供養 年金は明日税金は今日納期 熱っぽい体納期がすぐそこに 納入の日で計られる信用度 かあるスターの過去は触れずおく の功 田中 た 文時報 柳宏子 白光子 浪速子 富志子 頂留子 柳宏子 恭 鹿太郎 天 さよ子 朝 蛙 初太郎 狸 通 晴 時 弥 城 紙コップ部長のクダに割って入り だまって父が浅瀬をさし示す 消しゴムで消された軽い男だな 心の棘除くとシャネル5が匂う 一足一足私に向う風を切る

こだわりが過ぎて納期が遅れがち 神技のような納期を言うてくる 箔付けに納期ずらせる品不足

池 森子報

ダン吉 ひ呂

て 万

足跡を残さず逃げたグリコ犯 浅かろう深かろう川海に出る 足音が不愉快ですと言っている **菊一輪のコップが似合う部屋にいる** 五十年ノートに書いた人生譜 浅知恵の婦唱に夫随いたしかね 人生に浅い色だけ塗っていた 颯爽とモデルの足にある美学 除きたいものが私の中にある へそくりが浅い抽斗つまらせる 扶美代 紅紫朗 悦 昭敦喬 水 雄 子

なみなみをコップで受けるいける口 ラインダンスを夢みた足にサロンパス あぶれた日も儲かった日もコップ酒 泥酔の足が行き先知っている 自画像の朱を除くと枯野かな コップの中の争いあるか波が立つ 川が浅くて水も男もすぐ枯れる 茄子胡瓜日除けほしくておじぎする 一言が浅い眠りにする重み (田) トシヱ 絹子 美代子 勇 花 太

欣 おさむ

維久子

浅学の林で森と語れない 浅い海深い海にも母が棲む

政岡日枝子報

鳥も迷って隣の庭から鳴いてくる 負うた子に迷うた道を教えられ

日枝子

席題に迷いまよって時がすぎ

森 岳 子

花の香に誘われ路地に迷い込む 悪だくみなかの一人が迷いだす 迷いだせば霧いくえにも重なって 風を追い無明の森に迷い込む 迷い出すと臆病風もついてくる てのひらに花を咲かせてまだ迷う 煩悩に迷うて今日も日が暮れる てい子 P 惠 亜

3

枝

迷うほど広い屋敷に住みたいな 内幕がわかって迷い深くなる 迷信を信じて今日は旅に出る 街角でつい迷う気に誘われる

六道の辻でまだまだ迷いそう 引き潮の中で迷っている魚 あの日から迷いが晴れて太り出

南大阪川柳会

1

対立が隣の国を遠くする 若い血が危険に命賭けたがる 手術室のナース少しも笑わない 逆に謝罪されてこっちが面喰い スが美人で退院が早すぎる 悟

千 花 夕 品 子

迷うから影も足踏みばかりする

富美子 八重子 子

文秋報 天 子供には危ない水辺の面白さ 減税と言う看板に騙されぬ

度 子郎 秋

立ち読みの癖でページの逆めくり 道頓堀大きな海老や蟹が跳ね 危ない橋渡ってからが恐くなる

対立をしながら深くなるきずな

頂留子

アドリブになって危ない話する 優しそなナースに当たりほっとする 当直へ嫌な予感のするナース 知らぬが仏危ないとこで子は遊び 盲導犬危ない道を心得る スミ子 萬 秋 真 智

的

逆療法酒もタバコもやりなはれ あの場所にあった看板今は無い 病院に気安いナースいる安堵

うるし塗り金文字看板城下町 地球汚染無農薬にも黒い雨 悪と善対立していた青春期 嫁姑仲のよい日はほっとする 対立も甘い話に手を繋ぎ

寿々子

ぼけぬようたまに対立する事だ ほんとうに危ないことはだまってる 反抗期何を言っても逆にとる 口さがない妻で対立する身内 シメ子 トミ子 咲 峰

ママの手を借りて意欲の逆上がり

男

ゆっくりと転んで行くのがわかる老 転ぶのは怖いが杖は恥ずかしい ほたる川柳同好会 たまりから消えてゆく自分 井上 60 直次報 吉太郎 ただし

> 転んでも知らぬ顔して若いマ 花道の七三 寝転んで明日のプランを一人旅 転んだら摑んで起きる物を選る ここで転ぶ役

転がってみたいな雲のじゅうたんに 寝転んで犬と目があう昼下がり 転んでも怪我のなかったのに感謝 転んでもギャグでごまかす芸達者 人よりは少し遅れて転ぶまい

敞英

子

口癖をしっかり真似ているオウム 余生知り昔はよかったと口癖に ろくでなし父の口癖もう聞けぬ 夫婦坂いくど転んだ事だろう 醍醐味は業師に巨体転ぶ時 口癖に言うてたことが遺書にない

正柳

博伸

ポケットの裏にゲストの見栄がある 結局が口 癖なのに終らない

楽しさは独り占めした友の顔 天下り楽々座る深い椅子

楽しさはカメラに入れて持ち帰る 柳塔まつえ吟社 恒松 叮紅報

バイカルの湖岸に還らない谺 語り合う湖岸地蔵も茜色 さざ波のロマンを聞いている湖岸 湖岸まで走って愚痴を捨ててくる 湖岸逍遙未だ絶ち切れぬ愛一つ

清 志 妻 長 静 恵子 子

秋あかね群れて夏行く地蔵盆 水涸れの湖岸貧しい網を干す

> 清正蛍 方 子史安柳郎郎

喜美子 瀧 昭保 史 風小子 笛

明紫 幸

— 96 —

娘の宿 瞳に残る露営の夢の流れ星 相性と一夜泊まりの旅に出る 地蔵盆妙にロウソクなまめいて 煩悩をまだ搔き消せぬ地蔵盆 一成の端くれも来た地蔵盆 蔵盆水の都の灯がきれい の子との思 へ泊まる夫婦の途中下車 出がある地蔵盆

アベックの火種へボートの櫂きしむ アベックへ海は女の味方する たこ焼きを二人でつつく暑い夜 アベックもいろいろあって裏通り 尾行してアベックの素行調べられ 主の船今夜は帰らぬ沖泊まり 玉砕の島でアベックの甲羅干し

寿美子

朗

畔

夢語るとき少年の瞳に戻る

みえ きみえ 多賀子

当分は珍しがった金魚鉢 なつかしい金魚のフンの子供たち 玄関でまず出目金ににらまれる 七夕に紙の金魚が泳いでる 川柳塔わかやま吟社 宮口 克子報

叮 与根一 登志子

赤ちゃんの裸へ触れる手を洗う の花の脆さを知っている 胸 紀久子 輝

いても何時かは戻る母の

労られ愛され桃の旅日記

子子々苗朗 裸とはまさか知るまい電話 旅一座裸の祝儀飛んでくる 桃スモモ植えて三年待つ余生 ピンポンが鳴って裸にひっかける

喜久亭

ょ

米友雄早正邦

愛は桃色みぞおちに灯がともる 桃をむく何と無器用赤い爪 桃二つどちらも愛しい僕好み 捥ぎたての桃の産毛にある主張 缶詰の桃が好きだという男 幸せを桃むく母の指に見る

7 子 良

温泉の一

泊夫婦の小さい旅

義

一泊が二泊に延びる里心

子の脆さ親は過保護と気付いてず 京の風少し纒うて孫帰省 君の瞳に合図を戻す日の余熱 戻りたいでも戻れない灯は揺らぐ

凡人でお世辞に脆くのせられる 脆い矢を束ね絆を強くする 涙脆いだけで夫はつとまらぬ はなやかに揺れてる脆い金魚の朱

渇水で遠慮し泳ぐ金魚たち 大海を知らぬ金魚と飼い主と

静 幸佳 鶴

子江子

江

やさしさに脆い女の涙つぼ 甘言にすぐに崩れるほどの主義 我が家計脆くくずれる不況風

バブル去る裂けて砕けてこの脆さ

夏茶碗薄目の自服朝の涼 を脆くしたのも文化だな

久保

正剣報

淳太郎 さち子 栄美子 晶子 好吞稚 子 重 笑天代博

桃色の封筒恋の渡し舟 宗谷岬桃と桜と残雪と

柳宏子 寿光 子代 射月芳 美 三枝子 紀美女

めぐみ

蜩が夕餉の風を暑くする スーパーの祭り古物売り捨てる 妻よりも先に愛大迎えに出 三伏の夏は何処ぞ七・八度 七転び八起きはしたが九転び 水飢饉雨だけ降って風要らぬ ブラウスがワルツで回る乾燥器 わが寿命五体を叩き聞いてみる 吞みながら半身不随夫無言 から梅雨の猛暑を登る老い 権力者二つの顔を使い 分の瞑想北から南まで 声 きつ朝顔数 かぞえ の坂

111

幸久仁於

火を付けて石橋叩くのも女 尼崎小園川柳会 立谷勇次郎報

核風で北の四島遠ざかる 風の吹く街で孤独に耐えてい 瀬戸の海小島を結ぶ帆が白い 何時までも凪いでて欲しい母 海の家氷にビールよく売れる 海鳴りのような寝息でいい親父 海を見て海に沈んだ兄偲ぶ る 0

急いだがバスも電車も走り去る さよならが言えず海鳴り 又走る大きくなった二 足どりも軽く走って切るテー 走り去る女未練の下駄の音 木星に彗星走るロマンの夜 一階の子 聞いている 末貞一 ミサ子 尚 利

夢之助

定 十四郎 太香人西治

-97

川柳ささやま社 酒井 靖子報

ソウメンが好きで三食舌づつみ 愛の詩相手へ半分届かない 補聴器をとって世相に遠く 似たものの夫婦で滅相長つづき 素手で来る見舞が心置いてゆく 口にせぬがまんを仕舞う小引出し 相続を争う財もない茶漬け やせがまん財布淋しく口をあけ 長男の嫁で姑の爪を切る 味を着る亡母が選んだ柄だから 住む

> とみ子 とよ子

友達は女と思う母である 子をつなぐ杭なら母の手で打たせ 点と点繋いで絵にし詰問す 炎天にいらいら夫婦よくもめる 手をつなぐ母の歩幅に老いを知 炎天にせめて日傘を替えてみる

悦 IE

マ報 与呂志

溝口川柳会

海よりも亡母のふところ凪いでいた 大山のふところ深し泉湧く 無口だがふところ深い人の良さ ふところの淋しさ秋の風が吹く ふところの鬼も聖書を読むという ふところは浅いが火種消しはせ 一大事ふところ勘定間違えた ふところが楽になったら病みはじめ ふところの具合がいいか気前良 82 40 雄 IE 弘 静 Ŧi. 康

善ひとつ素顔に風がここち良い 百合活けて素敵な出会い待つことに 素面では行けない深いふかい訳

可

芳 和 ヒサ子

市

八重子

JII

岩

小倉

アサ報

ふみえ

郎

小西 雄

智恵子 干鈴 枝

かあゆ川柳会 松本はるみ報

豊作の期待青田に風が吹く 山峡の青田も義理を忘れない 墨をする朝の空気をまぜてする 尊さを忘れていました朝の音 母上と書かれた手紙こそばゆい 青田買いすずめおどしの結果です しなってもしなっても竹音をあげぬ 釣りあげて鮎を遊ばす竿しなる 米騒動青田のうちから通てくる 昨日の雨を許そうよ かつ子 鈴 はるみ 恵美子 ちよえ 好

千鶴子

子

昌

重 男 直

台風へわが家のあばらのしなる音

宮崎シマ子報

白

汀

尾市民川柳会

もひとつの顔が日記ににじみ出る 日記帳見せ合う恋のプロローグ 古日記焼けばドグマが踊り出る 照る日曇る日父は苦労の農日記 頂点に登ってからはわびしくて 母になる嬉しい重み鳳仙花 ほどほどの重さも欲しい預金帳 温度差を感じて重くなる空気 重荷にはなるまい今日も万歩計

シマ子

草野球氷の旗は囲まれる 登山口母の祈りの声がする いたわり合いゆっくり登る夫婦坂 宮入りにふとん太鼓の灯が登る 太陽のように日記に棲む母よ サヨナラと小さく書いた日記抱っ

嫁姑流す一言まだ出ない 聞き流すことの上手な耳を持つ 世代交替流れ子供にまかせます 流れゆく悲しい調べ琵琶法師 究極の汗を流した甲子園

子のためと縁を繋いできた六十路

智恵子

IE

つい去年炎天ほしい言うたのに

炎天下せみもすずしいうちに鳴く

裏表つなぎ合せて夢を追う

友達の言葉は後で効いてくる 子の寝顔明日への希望つないでる つなぎ合う事の出来ない自己主張 炎天の道へ休まずドラマ積む 信じ合う心つないだ夫婦仲 友達と握手の中で物を言い 五七五言葉つなげば心見え 炎天に負けぬファイトの鎌を研ぐ

すぐ水に流す二人で仲が良 グラスの底で相手の出方待つ氷 首筋へ氷を当ててくる台詞 ふところに孤立無援の氷抱く 美津留

威勢よい氷屋さんに逢うてない 氷には見向きもしない舞扇

たもつ

伸

弘

直

かつ

2

ますみ

カッカせんと受け流す気になりなはれ 頂留子

愛の曲イントロでもうけつまずく 死に際は運命あとは新世界 メロディーを聞くと哀しくなる軍歌 ゴミの日の曲を大事に聞いている あずき

薄暮かな観音さまの曲線美

迎え火へ想い出のモノひとつすて 夏厳し詫状ばかり書いている 色褪せる八月へ置くいもかぼちゃ 客を呼ぶ曲一つ入れ会開く 炎天を歩く自分を騙しつつ 炎天やわが醜さを零しつつ 無為の日々鈴を鳴らして秋が来る

> 希久子 たか子

みつ子

雅

子

いわる

竜の絵を見ても昂ることもなし

綱引の下に散らばるのは鱗

千代 智恵子

楽

八十田洞庵報

JII

息子から親父の頭ふるくさい 息子いや娘欲しがる今の親 ああ迂闊嫁にとられた自慢の息子 ドラ息子嫁に内緒で又せびる 筆不精手紙替わりの長電話 ありのまま書いた手紙にほだされる ピリオドを打って手紙の束を焼く わけありの手紙どこかへ置き忘れ 手紙切手不足が付いてくる よし子 庄悦 晶 淑と 13 六子子 子み ٢

縄のれんくぐり息子と顔が合い

夢のない一日に来た茶封筒

足跡は残さぬように金儲け

肺活量減ったが青い夏の空

親の見栄息子の夢をつぶしてる 無我夢中育てた息子嫁のもの

言が多いと息子母悔

息子たち継いではくれぬ職に老い 哀しみが思い出となり喪が明ける 尼崎いくしま川柳会

ルト 振り愛のムチだと子を叱る 年代報

縄のれん汗の日銭が皿にのる ミリタリーマーチ少女の汗は真珠色 汗を光らせ少年草の矢を放つ 汗も拭わず火の色見てる登り窯 万歩計ベルトの悩み知っている コンベヤー西瓜流れてどこへ行く 砂の器に聖者の汗を溜めている 女子マネが惚れた汗だくユニホーム 水 求 子 松芳 タカ子 年 萬 d IF. 女代的

世渡りの泳ぎが下手で親も子も 地下街を泳いでゆくつかのまの季節 子も大も泳ぐ故郷の川温し 薫

悪知恵に長けて世の中泳いでる あの時も暑い日だった八月の雲 地に着かぬ足で終った初舞台 人なかに入ってなぜかホッとする 人波を泳ぐ女は強くなる 犬かきの泳ぎに世間広すぎる メダカにも夢渺々の大宇宙 雑踏を泳ぐずるさを身につける

天 ミサ子 修水 正 まさお 鹿 白渓子

> 人生の一歩産声たのもしい 人生は喜怒哀楽の繰り返し

みほの 寿満湖 良 和 正 平 重 トンボ眼鏡の女が夏をつれてくる 半世紀核は棚あげ原爆忌 南十字星

の下で人生観変わる

澄

子

洞

智栄子 四代を生きて米寿のメガネ拭く 四コマの解ける日があり夕焼ける クーラーの虜になって夏本番 人並みに恋もしました夢も見た 過去みんな水に流して押す屋台

正伊杜坊的

的舟

諷云児

打吹川柳会

花道を降りて人生衣替え

無限ではなかった父の脛の味 成立へ過去を流した手をにぎり 洗剤も油も流し川が死に

親と子の人生二人三脚で 限りない夢のつづきを見るとする 流れても最後は故郷へ足が向く 偏屈がいのちで流れにはのれぬ 世の流れさからって見る気力失せ

人生の重荷に耐えて古希になる その時は無限信じた仲だった 不肖の子親は無限の脛じゃない 人生に避けて通れぬ路がある 順風で無限の欲が罪つくる 人生譜カラスも帰る森がある 人生のオアシス探すひとり旅

— 99

弘朗報

小節 雄柳 生枝 風政 浪 17

生命は無限生かされている娑婆の ふる里に母の足跡なかったか 足跡を女館へまだつけぬ 足跡も残さず殿は去りました 欲望の無限電車が走り出す っぱい無限の旅に添えられる 縁

わたくしの足跡ばかりある畠 心臓は丈夫で愛は無限大 一枚舌つかう男に油断する

喜美子

朗

법 田

亡妻のへそくり通帳見て涙

平凡に暮らす無風の猫の髭 病窓へ朝がゆっくりやってくる 平凡な夫婦で味方も敵もなし 本人は変人だとは気付かない そくりにピーヒョロ鳶の声がする 豊の妻でなかった指輪買う

澄

子

とし子

表面は穏やかでいよう腹の虫 変人のおやじが味を守る店 箱一つ母の温もりまだ届く 梅雨晴れの今朝はじめての蟬が鳴く へそくりがあるから気が大きくなる トヨ子 あい子 佐津乃 政 昭

美しい花をながめて今日も生き 四季うつろうこの平凡のすばらしさ 変人にされて気楽になりました 平凡へたまに傾く夫婦独楽 、そくりを避難させとく大掃除

ただし

頂留子

月光にすらりと君は月の精 バーゲンで買った事なぞ伏せておく 肝心なところは伏せてある手紙

自画像をすらりと画いた軽い罪

13

わる

夕立ちのまさかと思う迎え傘

スコールを待って水浴する戦地

スコールに流してほしい過去もある

江

喜与志 枝 約款を読んでる妻の目が光る 平凡な暮しを嫌うシャンデリア

西宮北口川柳会 亀岡

夏の夜の夢で天女とたわむれる 楽しい空想しんどい夢になる 空想のオアシス探す長い修羅 夕立が来て空想の糸切れる

キク子

友の傷伏せて唇乾きだす 当分は伏せておきます社のピンチ 名を伏せて言いたい事を思い切り 伏せていた病名詫びる三回忌 マスコミの眼伏せたい過去を容赦なく 若い日の苦労話は伏せておく 目を伏せて小さな嘘を見ぬかれる 網の目を細かくしない夫婦仲 風鈴にやさし網戸をぬける風 めぐらせた網で心は縛れない バブル崩壊予定地の網錆びたまま

平凡の良さ思い知るハプニング 線香のゆらぎに日々を立て直す わからない明日へ今日を光らせる 喝のこれが亡夫ののど仏

空想が好きで嘘つきとも言われ

房 子子的坊

満津子 子影

> 五十回忌済ませた夜の遠花火 東京で四年すらりとして戻る 国会をすらりと通るはずがない 手紙ならこんなにすらり書けたのに

涼 鹿

的子太胤蘭

正とし的

静

引き出しでへそくり夢をみています

人前に出るとすらりとでぬ台詞

公達

哲子報 ぼやくほど化粧ののりが悪くなる さるすべり午後の紅茶が冷えている 心からお慕い申し上げてます

ビールより酒を好んだ父の髭

まさお

トニエ

夾竹桃閃光の日を語り継ぎ 八月のいのち今年も確かめる

富喜子

JII

匙曲げる特殊な才能ないみたい 船渡御に浪速の伝統夏まつり 水不足どうにかならんか天神さん 浪速にもやっとドームの起工式 田を走る風が真夏を連れて来る あの笑顔心の広さ知らされる ああ暑いたまには主婦業休みたい

集印帳地理にくわしくなってくる 虹の橋かけてスコール通り過ぎ 美津留 司

希久志 河南子

災害が地理的弱点ついてくる

地理にない夢の島だよ新空港

与呂志 坊

太

かよこ

囲碁将棋時の流れが止まってる 苦情処理バッタのように七重八重

スコールのように喋ってすっとした 北の果て地球が丸く見える旅 爆音のやまぬ時なしカデナ基地 特攻隊志願の素足小学生 慰霊碑へ広島の夏まっさかり 戦争を知らない子等の喜々として 武器がいる平和を守る武器がいる わけ合った慰問煙草で里ごころ 洞穴で戦後を知らぬ鉄カブト スコールのおかげで落ちた目のウロコ スコールが過ぎてうどんが欲しくなる 重

転落の悲劇の責は誰が負う 一步

野次馬に愛想よいのがひとりいる 野次馬の中に校長さんが居る 野次馬も散って花一輪残る 野次馬の気楽さ好きなことを言 野次馬のバッジを胸に風を切る 野次馬の居ない孤島でくらしたい 野次馬になると無口もよく喋る 気がつけば俺も野次馬中に居る

比呂志 本蔭棒 三十四 まつお 寿 勝 風太 太陽の恵みに近いはしご組む ひき際を沈む夕陽に教えられ 太陽を味方に生きている誇り 太陽の死角で謀議企てる 太陽の裏側に住む夜の蝶 君は僕の太陽なんて騙される 冷夏から暑い太陽ありがとう 太陽がギラギラダムの底を見せ いにゆく最短距離の道

土橋

望み入れる袋大きいのを選ぶ 望むものみんなあなたにあげたはず 子にかける望みは小さい方がよ みか月の望み満月聞いてるか 人生は試合に望むそのまんま

みさ子

節

三千代

はばたいて街の若さを吸いに行く すりへった石段幾万の思い呑み 出来るならあの世の夫を戻したい 友もまた孫の守りだと花が咲き 短距離で活躍した日 胸去らぬ 言葉減り忍の一字が生きている 垣根越し内緒話が風に乗る つまずいた石よ痛くはなかったか 治にはクーラー苦手だとほざく

くに子

喜与志

富 原

幸せな間はそれに気付かない

さと美 みずき

子男路

出世街道近道はない汗をかく

近道をしたら回れと工事中 近道をして番犬に嚙みつかれ

原

近道を知った時から悪になる こっそりと近道ねらうかたつむり 近道をえらんで行こう齢だから ふる里に近道をして海を恋う

お妃の黄色が夏の陽に冴える

本に生まれ黄色人とも言われ

富久江 孔美子

山帆千 艷 秋

> 老いたとて頭を留守にせぬように 黄の帽子の頭押えて送り出す 黄金の波に案山子が溺れそう

八重子 きみゑ

由多香 子 雀

留守にして一家川柳会へ出る

はるお

久汲

美恵子

留守がちな母と交換日記書 留守番に自由な羽根が生えてくる

賜った情け心を留守にする 三日ほど行方不明の留守をする 留守事を妻に気付かれないように

入道雲が少年の視野に入る

渡部さと美報

非常口しらべただけのこの命 非常口開けると露天風呂が見え

かつ乃

エプロンのかわく暇ない盆休み 挨拶も乾いたふたり乱気流 甲子園かわいた土に青春譜 妻と老母さばく手綱のしなやかな ルワンダの民のかわきをただ見てる

智恵子

暗がりの垣根でデート申し込む

東京物語今更解る老いふたり 次週また来る気にさせる予告編 戦時中ニュース映画のコマーシャ 映画見て胸の震えた遠い日 映画館隣の女よく眠る 映画見てお茶飲んだのももう昔 日本は総天然色と言うロシア 余生今空間広く趣味に生き

ひろ子 叡宣真恭正楓 砂昌雄

登志子

-101 -

台風の雨を待ってるダムの底 盆暮れに律気な顔を覗かせる リバイバルに浸っています二流館 名優は死なず志村に笠智衆 それ以来映画に行 生かされました大文字 かぬギャ バンの計

良

柳ねやがわ 江口

勇太朗

路

不意に来てひっかきまわして姑帰る 不意を突く税吏に舌ももつれ勝ち 不意の客釣書と写真置いて去に 金髪を結婚すると連れてくる

結婚まではどちらも猫を被ってた 労りがすんなりと出る共白髪 最大の浪費いくさという愚か 両方に指輪をはめてクラス会 浪費家の案外ケチなおつき合い サインさえあれば落書きにも値段 落書きに若い主張をみつけ出す 洛書きが俺の字に似て疑われ 洛書きをされてその気になった仲 洛書きを楽しむように消してゆき 洛書きのひとつに遠い夢がある 洛書きをやめるとヌード貼りだした

かすみ

波留吉

甘い舌何時も見せてる嫁の前

恒

生きるためだよと文句いわせない

風

両方から喋るな補聴器は一つ 両方が好意を抱いたまま他人 妻と母女は恐いものですぞ ご報謝を両手で受ける京の路地 兄弟は両手みたいとうらやまれ

> ルイ子 あやめ 英壬子 頂留子

脱ぎ捨てて男まつりの主役です 取締る人がルールを踏み外し ちっぽけな城で守っているルール

起きろ起きろ目覚しかけて生きている アジトふたつ木偶も利口に生きている 美代子

定年後妻はバイトに逃げていく 奥尻の波は静かに眠るなり 敗北は敗北として飲むビール 鉢植えの胡瓜で和む朝の風 羽衣を脱いだ水着の群眩し ある時は夫のペースに乗ってみる 耐えること解り大人になって行く 雨を忘れた雷のカラ威張り

みつ子

峰 江 坊

そばに居て邪魔にならない友である 高田美代子報

嘘に慣れ舌のピンクもにごってる 愛を断つ尾灯の赤にある未練 選手もファンも虹を見ている通り 猛暑酷暑炎暑とほめてすっ裸 補聴器に女房のぼやき聞こえたり みのる

直

よく知っていて頬被りするルール 利休さま茶の湯ルールが多すぎる 世の中のルールを破るスリの腕 それなりのルール子供の口喧嘩 野放図な家庭の中にあるルール 父の舌一枚切りで農に生き お役所のルールほんまにややこしい 夫婦でもルール違反はおことわり 味加減女は舌に歴史積む みよこ 悦 キミ子

武

吉之助

洋

黎之助 ふり返る故郷は祭と樹の緑 浮き浮きと祭気分になるしらせ 後の祭り甘く育てて臍を嚙む 祭の灯むかしむかしの淡 新柄の涼しさを着る祭の夜

い恋

山車を曳く顔に男と書いてある 結論は祭の後にしましょうヨ **愛染さん今年もお参り出来ました**

扶美代

郎

たもつ

葉

御神燈に亡母を重ねて灯を入れる

三政絹史敬

代子郎

故郷の祭ママカリ酢を想い出し だんじりの三日のために生きている

柳会 (前月分) 河内 月子報

雑草の仲間になって夏を生き 夢のかけらをひとつ握って生きている 美人を見ると失語症の癖が出る 目分さえ傷つくキザな言葉です ああ五月 風よ光よわたくしも 寂しくて言葉の海に溺れたし 美代子 途 勝 晴

したたかに生きる薊もわたくしも 夏が来てビールが美味から生きる 忘れたい一言思う遠花火 母さんの生きた年まで行きついた 扶美代 紀美女

シンデレラの時間はいつも死んでいる ダン吉 頂留子

夕映えの土手少年走る犬走る

ありがとう変哲もない言葉だが

-102 -

野次馬になって私も走り出す 忘れる事出来て明日へ生きられる 色褪せた殺し文句を抱いている 生きるのも辛いが死ぬ気にもなれ 失言にちょっと本音をのぞかせる 子を叱る言葉そっくり親ゆずり 生かされて雲の変化を見続ける 人を刺すのも優しく包むのも言葉 カンパイを覚えた孫を囲む宴 洗い髪生きる匂を残してる 小 雪ん 文 夏

きまじめに生きた父の忌 弁護士の言葉混じっている答 田舎バス消えてベンツの走る村 生きるとは坂で車を押すような 満 千万子 三三 彰 文

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

秘すれば花ベールはかけたままがよ ベール脱ぐまではきれいな女だった 取材拒否するうどん屋のうどん 口コミで屋台のうどんよくはやる パチンコに負けて素うどん食べている あつあつのうどん猫舌もてあまし 自画像の眼は少うし大きめに 妻の目をときどき避けることがある こぎん刺し糸目に母の愛がある きく子 圭 〆 杜 悟正紫 郎坊 佑 坊女的人子

かちわりがゆっくり溶ける八月十五日の黙祷 八月十五日アルプスの雪白し 平謝りの父の姿を見てしまっ 終ってみてなるほど分かる世 羽衣にくるまっていた青い鳥 今だから言える話を創り出 父の日に具足供えた祖父の忌 契約のベールをはがす小ルーペ 太陽のベールはすべてやきつくす の仕組 登代子 吉太郎 ただし つえ子

銭時代水

JII 河内 月子報

耶

関心があると見ました目の光 関心は一つの椅子に集まった 眉びくり 父の叫びきっと拳の中にある わたくしの視野にいつでもいる男 コメこめ米 急に関心持ちはじめ どうやら関心あるらしい 頂留子 扶美代 時

奥の瞳でしっかり捕えている人よ 雲行きが悪く正体つかめない こっそりと芸盗む目が光ってる 叫んでも叫ばなくても日は沈む 間になろうと海に出て叫ぶ

宝石に関心の無い太い指

こっそりとあなたと抜いた薔薇の棘 関心がなくなり朱が消えていく 自画像の皺をこっそり塗りつぶす 人妻に関心あってこまります 鏡の中で老いをこっそり確かめる

年輪の皺かくせない赤い爪

い街仲間入り

琵琶湖見に行く夏休み

朝刊が休みで頭空になる

親戚の子が出るという甲子園 罪を償う関心のない 前うしろ見てから拾う十円貨 ちぎれ雲父の顔やら母の顔 白い雲みつけ優しさ取りもどす 無関心が寄り集まっている都会 腹立てて雲に恥じ入ることばかり

こっそりと告げた内緒が動き出し 何ひとつ関心はなくみかんむく 生き方の素敵な人を見ています 脛に持つ傷大声で叫べない 極楽を見に行く機会待ってます

千万子

 \equiv

紀美女 半銭 かりん

文

第 46 П H 本 III 柳大会

第46 回西日本川柳大会は9月4日、二九二

日の各題天位句は次のとおり。

名が参加、

久米南中央公民館で開かれた。

緞帳が降りるとどっとくずれる和 風呂敷を広げて町の話する 創業百年のれんは限りなく藍で 駅裏と言わず南と呼ぶ誇り 何度目の涙か米を研ぐ夕べ 久々に男が軽い骨になる 杉本 土橋 長谷川紫光 宇津木秋子 片山たみ子 睦子

輪をひろげすこし自由に手をつなぐ 空港も風もわたしも漂泊者 安眠のできる夜があり樹は伸びる 松原 岡田

ひらかなの母の話が黙らせる 裏街の酔いどれ天使チェホフ忌

-103

■各地句会だより

東大阪市川柳同好会

片 岡 湖 風

市教育委員会から二名、それにオブザーバ在住の川柳家が一堂に集まった。在住の川柳家が一堂に集まった。昭和四十六年夏、川柳塔社同人だった、今昭和四十六年夏、川柳塔社同人だった、今

った。
きして、高杉鬼遊さんも加わって、「川柳同人として、高杉鬼遊さんも加わって、「川柳同人として、高杉鬼遊さんも加わって、「川柳同人として、高杉鬼遊さんも加わって、「川柳同人として、高杉鬼遊さんも加わって、

かくて、同手し引二十五日、司子会切り会かったように思われる。
取り払われ、タイミングとしても、非常によ取り払われ、タイミングとしても、非常によ

柳の灯が点った。 柳の灯が点った。 かくて、同年九月二十五日、同好会初句会

しかしながら、そのほとんどの柳友が、この句者十一名、計四十九名の参加を得ている。当夜の記録によると、出席者三十八名、投

さて、最初の一年間は、ガリ版刷りという感として心に重くのしかかってくる。感として心に重くのしかかってくる。感として心に重くのしかかってくる。

いたってお粗末な句報を発刊してきたが、二

ず
小浜牧人」が選ばれている。



天郎選で「ありがとうの一と言妻に言い出せ表の選で「ありがとうの一と言妻に言い出せ、第一回市民川柳大会を参加者七十八名で開催第一回市民川柳大会を参加者七十八名で開催している。ちなみに当日の市長賞は、八木摩している。ちなみに当日の市長賞は、八木摩している。ちなみに当日の市長賞は、八木摩している。ちなみに当日の一と言妻に言い出せる。

その大会も今年で第二十二回を数え、十月をの大会も今年で第二十二回を数え、十月を分にもれず、高齢者社会を迎え、櫛の歯が欠けるように、ベテランが姿を消して行った。それでも、川柳大好き人間の皆さん方の、ご支援によって、細々ながら勉強させていただいている。

句会の内容も、いろいろと趣向をこらしての会の内容も、いろいろと趣向をこらして、早く終って、早く帰って頂くことにしている。

を は様のご支援を心からお願いする次第であ が、作品向上に尽して行きたい。 とれからの川柳を憂うる者の一人として、

エッセー 「村の鍛治屋」から

□号が届いた。同人、誌友が参加して一人十四号が届いた。同人、誌友が参加して一人十五句という精選された一万余句、その一句一五句という精選された一万余句、その一句一五句という精選された方々とこのかりして八○○号の歴史を築いた方々とこのになり集の出版を担当された方々にあらために、話友が参加して一人十四号が届いた。同人、誌友が参加して一人十四号が届いた。

ところで、北国の農業県に住み、農業に係わる仕事をしていると、どうしても農業・農村に関することに目が向いてしまう。 ボトンボ村の鍛冶屋に音がない 栞 ボルンボ村の鍛冶屋に音がない 栞 『川柳塔』第四号にある栞先生の句に目が 向く。津軽野の十月のりんご村は赤トンボが 最も奇麗に舞う季節、でも村の鍛冶屋に音が ない。小学校の窓からも村の鍛冶屋の歌が消 ない。小学校の窓からも村の鍛冶屋の歌が消

人々と共に土を耕す使命感のようなものをもの風景の中にいつもあった。 土の香を漂わせ

って村に生きていた。農村の人々の気持をよ

前に会った鍬人を思い出してしまった。なければと思う。鍛治屋さんと重なって三年

髭のお爺さんを見かけた。朝の八戸市郊外の しれない。若い頃、鍬を使っての畑仕事をよ 子である私の遺伝子がそう感じさせるのかも れなくなったが鍬を担ぐ村人の姿が好きだか ったからである。また、鍬を担ぐ村人が見ら に鍬人の人柄に触れられるのではないかと思 切に教えてもらえるだろう、また、久しぶり であると聞いていたし、この人ならきっと親 た。訪ねる知人宅は、元は畑であった住宅地 私はその鍬人お爺さんに道を訪ねることにし る方にしっかりした足どりでお爺さんが行く。 足早に街へ行く、それと対向して田畑が見え 道でのことである。サラリーマン風の人々が を担ぐ村人、鍬をつくる村の鍛治屋、 くした。鍬が一番使われた農具だった頃であ らである。先祖から受け継がれてきた農家の 夏休みに入って間もない日、鍬を担ぐ白 田畑で鍬を振る村人、家と畑の往復に鍬 鍬は村

ばらく離れなかった。 うなものをもって物静かに道を教えてくれた。 うなものをもって物静かに道を教えてくれた と土が私に生きがいをくれます。 秋には畑がと土が私に生きがいをくれますよ。 と言いながらお 断菜をたっぷりくれますよ。と言いながらお さんは畑へ向った。その後ろ姿が目からしばらく離れなかった。

お爺さんの農業に生きる哲学のようなものの深さに触れた。「秋には畑が野菜をたっぷの深さに触れた。「秋には畑が野菜をたっぷの感謝の気持、ここに、時代は鍬をトラクタの感謝の気持、ここに、時代は鍬をトラクタに替えたが、天と地と人が調和してこそ永遠に替えたが、天と地と人が調和してこそ永遠に続く農業の本質みたいなものが見られる。

地を荒らす人間。つつしみを忘れた人間。や地を荒らす人間。つつしみを忘れた人間。やきな鼻柱を一気にへし折るであろうことをゆめゆめ忘れてはなるまい、と評している。やめゆめ忘れてはなるまい、と評している。やめゆめでは天地人の調和が欠けていきそうなやもすれば天地人の調和が欠けていきそうないで忘れまいと思う。

る。記念句集『川柳塔』第四号は宝物です。薫風先生の句を思うと冬も前向きに生きられのサイクル。「北国になお北のあり流氷よ」ののサイクル。「北国になお北のあり流氷よ」の

この地とともに先祖代々生きてきた誇りのよぎたお爺さんの鍬の土の香はとても優しく、く知っているのが鍬である。この八十歳はす

本 社 九 月 句 会

メンズファッションセンター 九月五日(月)午後五時半

会が開催された。 しい暑さの中、 九月になっても一向におとろえを見せぬ酷 九十一名の参加により九月句

思い出など、即席ながら耳を傾けさせる話題 が展開された。初出席は奥谷弘朗(倉吉市)・ もないままに出向させられた新阪急ホテルの 月』を出版した川柳塔唐津支部の山門幸夫氏 と夫人の紹介にはじまり、例によって小林一 このほど戦争体験を記録した『チャンギーの 奥谷弘朗氏はじめ珍しい顔ぶれも見られた。 同会への参加を兼ねて出席された田中好啓・ 主幹の米寿を祝う川柳大会の前日とあって、 二氏に可愛がられた阪急電鉄時代、何の経験 さて、今月の「おはなし」は黒川紫香氏、 今回は西宮北口川柳会20周年と黒川紫香副

> ۷ 田 中

好 啓

選

くやし涙はあえて拭かないことにする

拭くたびに酒は秋風に揺 汗を拭き拭き老母といっしょに来た西瓜 れる

ええ啖呵切ったら尻を拭かされる 汗拭いて働き振りを見て貰う ストレスの汗拭くぬるい湯につかり カウンター拭いて酔うてる泣き上戸 弁慶の槍はいつでも拭いてある 鏡拭く今夜は傘が要るだろう 片化粧しがらみを拭く日の喪服 生懸命拭いたつもりが気に召さぬ しげお 英壬子 岳

疑問符が拭い切れないシャツの紅 食器拭く手の年輪を母言わず 大空を拭けば明日の画が浮かぶ 顔の汗 男のように拭き取れぬ 涙拭く女の嘘を見てしまう 母さんの拭いた涙に諭される

手を拭いて客を迎える声になる

拭き足らぬ汗は舌なめずりをする 洗い髪拭う九月の窓を開け ピカピカになるまでこころ拭いてます 小面のなみだをそっと拭いてあげ 小さい秋見つける窓を拭いておく 矢を捨てて標的を拭く目の痛み 職の無いかなしさ犬の足も拭く 雑巾よりも掃除機と仲が良い 廃校の廊下を拭いた長かった

月間賞は小池しげお氏

(松原市) に輝く。

(島根県)の両氏。

司会―東雲)(受付―みつ子・希久子

記名―ダン吉・月子)

ひまわりは王者の如く汗を拭く

拭いても拭いても消えない衣魚がひとつある 美代子 憎らしい夫の靴を拭いている 仏壇を拭いてなごみを頂きぬ わんぱくの果て冬を拭かされる 政治家と握手したからよく拭こう 汗ふいて話のつぎほ考える めがね拭くはっきり君を見るために 日の丸をいくら拭いても血が匂う 猫の子の足拭いている星明り しげお 房保 子 子 夏

裸婦像の腰の線から拭いてみる 半蔵門

堂椽を拭く要領も寺男

ダン吉

香晴

浸汗拭く慈母観音は笑み給う

柳 伸

首筋を拭くときおんな年を知る 好

L 山本 希久子 選

潔い男の背なにある美学 潔く別れと他人だから言え 潔く首を洗ってノーと言う 潔く寅さん啖呵切ったけど 退職金プラスで潔く辞める 潔く別れてからの寒さかな ガン告知よし尊厳死さらによし 潔くあきらめました一戸建て 松文 たもつ 文正 夏 影 秋坊

いわる 美代子 たず子 半蔵門 太茂津

潔く別れてひとり大ジョッキ いわゑ

鳳

笙

潔く散って花びら天に舞う 潔く素足になって土に生き 母さんの目は潔白と言うてくれ 潔く詫びる勇気を買い許す 潔く打つ手にあった隠し駒 潔い話を探す虫めがね 定年を待たず辞表を出してくる 潔く脱いでスターの座を守る 潔く身を引いてから運が向き 潔く秘書が責任とらされる 子のための火の粉は潔く浴びる 潔く飛び出し齢を知っただけ 潔く白旗振れるのも男 潔い話と風船は旅に あの日から愚痴を言わぬと決めている 潔く起きる日曜ゴルフ行 停年で潔く妻離婚する 潔癖が出世を遠く遠くする 潔い男にどっと来る疲れ 潔く泣けと新婦の父へ酌ぐ 潔く知覧を発った遠い人 老人がポンと百万福祉課へ ワンカップあれば案外潔い 潔く謝ることにする同居 潔く散らずあじさい色を変え 潔い男は後を振り向かず 言い訳をしない男の眉涼し 潔い退き際 男惜しまれる

ダン吉 諷云児 柳宏子 いわゑ 美津留 美 度

美代子

潔く紅捨てられずまだ女

兼題「ラ フ

西 出 楓

かすみ 正東 弘 朗 雄

ラフスタイル鬼と呼ばれた人だった

しめやかでラフな葬式考える

ラフに生き悔いは残さね無位無冠 関空発ラフなジーンズラフなシャツ

たもつ

政権を握るとラフになる思想 日々好日 余生はラフにループタイ

IE.

子

美坊

ルイ子 笛文昭美 子 子房 風

野次馬の先頭に立つラフなシャツ

小心を隠すラフなら背を伸ばし

美しい顔だがラフな膚ざわり

影

ラフな言葉に傷ついてゆく胡蝶蘭 入魂のボールがラフへ飛んでゆく 引き際の美学桜から学ぶ 潔く忘れるための眉を引く 潔く散った教え児偲ぶ夏 潔く引いても尻尾まだ残る

潔い生きざま蟬は地にかえり 三 三 潔い気性に財布従いて来ず

吐

来

美津留

隙のない身なりのラフな金遣い

制服をラフに着崩す反抗期

エリートを捨て潔く牛を飼う

希久子

楽 選 傷心のゴルフはラフにばかり落ち 早いだけが取り柄のラフな仕事ぶり 見積りを値切ればラフな仕事する 御堂筋ラフなおとことマドンナと

ひよこ識別ラフに選んでいるようで 神経戦ラフだったから堪えられた 共稼ぎラフな手抜きがほろ苦い ちょっとラフ少し陽気なベレー帽 ラフでよい構図に夢がみちている 个甲斐ない男はラフに捨てられる

賞味期限切れた女とラフに逢う

付き合えばラフな一面持つ魅力 ラフな言葉と森の枯葉は散り易し

ータイでラフなくらしに溶けていく

みつ子

TPOすこうしラフにしています

たず子 たず子 男

知

ノータイで来たのに祝辞頼まれる

スタイルもこころもラフに行く酷暑 ラフを着て帝国ホテル狭くなり 昨今は見合いもラフになりました パズルもフラフな頭でこなされず

義

ラケットのラフに秘めてる勝つ自信 ラフな筆致が短冊にうまく乗る ラフそうに見えて気の張る三枚目 正吸 かすみ 茜 雄江秋

みつ子 ルイ子 洋

トメ子 美代子

房 太茂津 半蔵門 度 太 子

やさしさに慣れて女はラフになり ラフなこと言って財布は締めている 誰も来ないでほしい私のラフタイム 大臣がラフに放言して困る 小心をカバーしているラフな服 希久子 秀

ラフなプラン太い筋金入れてある

Ŧ

秀

-107 -

洋

唐がらしラフな話へ入れておく

岳

人

ラフな言葉で傷口に塩ぬりにくる 楓

楽

黄昏が迫る結論急がねば 兼題 宮園 射月芳 選

この街がついの棲家か黄昏れる 出雲路の黄昏神話抱く夕陽 黄昏れて未完の画布を塗り急ぐ 厨から妻のハミング黄昏れる 黄昏の街でやさしい灯を探す 夏痩せの金魚とともに黄昏れる 黄昏れて鬼とも蛇とも手をつなぐ 紅すこし濃くして黄昏の街へ 黄昏熱気満ちてくる

黄昏れてやっと自分の顔になる 黄昏れて静かに世間見えてくる 松文 みつ子 笛 諷云児

黄昏の中で別れをくりかえす

たそがれた首 職安へ売りに行く たそがれて艶歌の街に塗りかわる 黄昏の灯に友がたんといる 黄昏れた今日一日を満ち足りる

黄昏の森で背を押す風がある 不器用は森の出口で黄昏れる 黄昏は追いやり予定表うめる 黄昏れて明日は我が身の曼珠沙華

切り売りの西瓜値切って黄昏れる 夢多く未完のままで黄昏れる 黄昏がせまる婚礼急がねば

新正

たず子 ダン吉 たもつ

さち子

子

楽

黄昏へ芯から酔える酒がある 黄昏の交番さんま焼いている 黄昏の彩が溜まってゆく眉間

さち子

志正

坊

黄昏に鬼がゆっくり爪を研ぐ 染め合うて黄昏色となる夫婦

憲太郎

みつ子

黄昏れて夫婦は同じ絵に還る 黄昏をいっぱい背負う父の靴 夕陽背にラクダの列にある祈り 満ち足りた今日の黄昏美しい たそがれの道は夜明けにつづく道 花道を飾れぬままに黄昏れる

黄昏の情けに飢えるキリギリス 黄昏になると刺客がやってくる 黄昏の街で会いたい人がいる 美しい黄昏だった亡母の坂 何もかも三振ばかり黄昏れる

女 風

黄昏れる前に明日を摑まねば

黄昏の花屋ですこしはなし込む

黄昏のポストに招待状が来る

暮れなずむ頃から稼ぐ職に生き

黄昏の浜に別れが落ちている

たず子

希久子

精一杯生きてわたしは黄昏れる

てのひらを返したような生返事 てのひらでやさしく流す母の背な どの掌にも目がある千手観世音 てのひらを見てる苦労をかけたなあ てのひらの石ころ一つもてあます てのひらの窪み縁起をかつぎ出す 坊さんがてのひらにのり煤はらい てのひらに忍と言う字を握りしめ ひらに忍という字が染みつい ダン吉 的 正柳抜 坊伸智

てのひらのコメの値段が下がりだす てのひらに鬼と仏が同居する てのひらを広げて見せる悩みごと てのひらよ悲しいことは忘れよう ごつい掌 働き口を選ばない

文

いわゑ 生

月 寿 子 子

河 内 天

射月芳

二みつ子 しげお

てのひらで計る男のプレゼント てのひらをじっと見るくせやめなはれ てのひらをじっと眺めてばかりいる 母ちゃんのてのひらからは逃げられ 怠け癖ついたてのひらから秋に てのひらを返したヤツが出世する しあわせはすぐてのひらを抜けたがる 射月芳 いわゑ

平凡な幸てのひらにのるくらい 妻のてのひらで泳いでいる羅漢 てのひらの当り馬券に湯気が立つ 罪を消すたびにてのひらうすくなる のひらに小さい謀反ためている 子太文風久遊

半蔵門

諷云児

だんごころころてのひら丸く暖かい てのひらに苦労性だと書いてある 金を握ると冷たくなったてのひらよ ババつかみのてのひら八卦見笑わない てのひらを返す男の薄い手よ てのひらの大きな妻に踊らされ 満願の日にてのひらを裏返す てのひらに私の時間切れがある 欲深い両のてのひら広げてる てのひらをこぼれていった子を想い てのひらで日本一のお茶が出来 欲ばると夢がてのひらから落ちる 合掌のてのひら風が吹き抜ける ワルツなど踊るか妻のてのひらで てのひらに夫を乗せている笑顔 てのひらに載るほど小さい恋だった てのひらの鬼にときどき同意する 紅一点交じり会話が弾み出す 妻のてのひらが時々裏がえる 威張らせておこう私のてのひらで てのひらに妻は茄子畑をえがく 本音と本音 兼題 信頼感のある会話 話 西 尾 希久子 美代子 良 吐 昭 笛 いわる 天 笛 ル イ子 選 知 男 生 子 子 生 笑 親子では会話に温い河内弁 姑と舅の留守にする会話 豊作の会話弾んでいる雀 ぎこちない会話で妻が感づいた 会話での祖母の記憶は前後する 悪友が三人楽しきかな会話 わけあって妻との会話避けておく 打算的会話 絶対お断り 政治劇右へ右への会話聞く 会話には自信あり気なパスポート 注ぎたした酒から会話はずみだし 茶柱がたって会話のはずむ朝 英会話習えと毎日ビラくれる ふたありの会話がいつになく長い ガンと言う禁句 同郷の会話が弾む初対面 コマーシャル長い女の立話 犬相手ひとり芝居という会話 〇×で育ち面接特訓中 会話などなくてもいいの二人きり 気遣うてくれて会話がはずまない 良い会話だった友だちまた増える 豊かな国の貧しい会話を聞いている 雲と会話いつか詩人の顔になる 幸せな日々だとわかる会話です 家族には涙も笑いもある会話 一族の会話に更ける父の喜寿 渋い会話がまだ胸に 水の話をして九月 病妹との会話

> すっ頓狂な座持ち役者がいる会話 現地語の会話子供に教えられ 温かい会話に猫もひざへくる 会話する重みを避けて水すまし 嬉しさに指が躍動する会話 写経を書き終える

ギャルたちの会話どうやら日本語

恭昌 しげお 房

武庫坊

相槌がだんだん重くなる会話

三二児

英会話 鼻の高さを見比べる

二南

更年期の会話 薬局から戻り

花 美津留

梢

かすみ 螢 楽

射月芳

半蔵門 きみえ 満津子 美代子 めぐみ

茄子きゅうり夫婦の会話他愛なし

希久子

英壬子 武庫坊

夫 美

風

柳宏子

知

とし子

しげお

書道教室について

習センター(地下鉄谷町線「阿倍野」⑦ 先生による同人・誌友を対象とする書道 尾岳人へ。当日、 申込みは10月2日の本社句会の席上、 番出口すぐ)第三会議室で定員二十名。 教室が開かれます。会場は阿倍野市民学 八月本社句会でお話をされた中村蹊虹 回は10月6日 説明書を差上げます。 (木)午後1時からで 板板

栞

岸和田市文化祭参加

岸和田市民川柳大会

と き 10月16日(日)正午開場

ところ 岸和田市民会館地下会議室

おはかし

田中正坊氏

席 題 当日発表 内田一弥選 題「ゆっくり」

牛尾 緑良選 「うなずく」 河内月子選

「経 験 河内天笑選 「请 慮 中田たつお選

「白 信」 阿萬萬的選 「喝 采 橘高藁風選

◎各題2句・締切午後2時

会 費 1500円 (参加賞・軽食・大会誌)

文化祭賞·同奨励賞·文化協会賞 當 操子賞・きしせん賞

主 催 岸和田市·岸和田市教育委員会 岸和田川柳会

第21回 堺まつり協替 堺市民川柳大会

10月8日(土)午前11時開場 サンスケア堺2 F (JR堺市駅下車北西200m)

兼題と選者(各題2句)

H 1 木本 朱夏選 池 森子選 ·K - 1 牛 星 緑自選 7k 長江 時 子 選 木」 神平 狂 虎 選 金」 西川 景子選 + 河内 天 笑 選

◎席題なし・出句締切午後零時半

会 費 2000円(昼食・記念品・作品集呈)

連絡先 〒593 堺市堀上緑町2丁16-3 河内天笑

> 堺 主 催 111 柳 会

吹田市民川柳大会

10月23日 (日) 午前11時開場 ところ 吹田市文化会館 メイシアター 3階 レセプションホール (阪急吹田駅前)

おはなし

西 田 柳宏子 氏

宿題「主 西川景子選 婦」 「舞 う I 原 宣子 選 「気まぐれ」藤村メ女選

「太 鼓」 志 水 浩一郎 選 「勘違い」 永田帆船選

「あかん」 高杉鬼游選

題 当日発表 竹森雀舍選

◎各題2句·出句締切午後1時

会 費 1000円 (秀吟賞・参加賞呈) 懇親会 会費 4000円 (10月15日締切)

主 催 吹田市教育委員会 文化団体協議会 吹田川柳会

第28回 東大阪市文化祭参加 東大阪市民川柳大会

とき 10月16日(日)正午開場 東大阪市立社会教育センター (近鉄布施駅北へ5分)

おはなし 河内の昔物語 鈴木火外 氏 宿 題(各題2句・出句締切午後1時)

> 「揺れる」 竹森雀舍選 「或る日」 板尾岳人選 「素 足」 杉森 節 子 選 「地 球」 久保田半蔵門 選

「書く」 波部白洋選 「タオル」 大路美幸選

「駅」 伊佐次 無 成 選 庶 題 当日発表 江口 度選

◎各題秀吟賞·記念品·発表誌呈

費 1000円

÷ 催東大阪市文化連盟·同川柳同好会 後 援東大阪市·同教育委員会

会

八尾市民文化祭川柳大会

11月13日(日)正午開場 とき

ところ 八尾文化会館4F 第1会議室 (近鉄八尾駅下車西武デパート東隣)

会 曹 2,000円(作品集·鉢植花·軽食)

宿題「息」 中井みきお選 「壁」 小松原 爽 介 選 藤 本 静港子 選 「関」 「灯」 大路美幸選 「器」 片岡 つとむ 選 中尾藻介選 「顔」 「星」 西尾 栞選

締 切 午後1時(各題2句)

懇親宴 3,000円 (希望者のみ当日受付)

八尾市・八尾市教育委員会 八尾市文化祭実行委員会

八尾市民川柳会 後 援 川柳クラブ「わたの花」

枚方市文化祭協賛 枚方市民川柳大会

と き 10月30日(日)午後1時開場 ところ 枚方公園青少年センター

(京阪枚方公園駅西へ徒歩3分)

森 中 恵美子 氏 お 話 宿題「希望」 礒 野 いさむ 選 上 野 多恵子 選 「太郎」 「井 戸」 柏原幻四郎選 「睨 む」 戸井田 慶 太 選 西出楓楽選 [/\]]] i 「たばこ」 村 山 勇太郎 選

◎各題2句・出句締切午後2時

参加費 500円 (発表誌呈)

市長賞·市教育委員会賞 當 市議会議長賞ほか

主 催 枚方くらわんか川柳会

援 枚方市·枚方市教育委員会 後

大阪文化祭川柳大会

と き 11月19日 (土) 午前11時開場 午後1時出句締切 同2時披講

ところ 大阪市中央公会堂中集会室 (地下鉄「淀屋橋」「北浜」から歩5分)

宿題と選者(各題2句)

「曹 か」 梶川 雄次郎 選 「風 船」 宮 園 射月芳 選 「 絵」 谷口光穗選 「ぬれぎぬ」 永田帆船選 柏 原 幻四郎 選 「時事雑詠」 「遠い」野島満寿巳選

席 題 当日2題発表

会 曹 1000円 (作品集代を含む)

大阪府·大阪府教育委員会 主 催 大阪市·大阪市教育委員会

富田林市民文化祭川柳大会

と き 11月6日(日)午後零時半開場 ところ 富田林中央公民館2階ホール (近鉄富田林駅から徒歩3分)

会 費 1000円 (作品集・粗品呈)

北山泰史先生 お 話 題 「約 東」 松原寿子選 宿 「喜劇」 土田 欣之選 片岡湖風選 「踏切」 「地 酒」 河内天笑選 「味 方」 中田 たつお選 池 森子選 「ある日」 西尾 栞選 「久しい」

◎各題2句・午後1時半締切

懇親宴 3000円 (希望者のみ当日受付)

主 催 富田林市·富田林市教育委員会 後 援 富田林市民川柳会(富柳会)

柳界展

準賞は次のとおり 言わぬ 山売ったことは卒業まで 米田

なお、今年度の茗人賞と

生き残る

8月2日、ホテル・ニュー て開かれた。当日の各題天 いなばで122名が参加し ★第18回茗人忌川柳大会は 黒川紫香会長米寿祝賀川柳 ★西宮北口川柳会20周年 にある ブランコを漕いで昔へ会 スナックが終着駅のよう

位句つぎのとおり。

我慢する靴だきれいに光

他人より大きな星が摑み

但見石花菜

らせる

松本

文子

真ん中に胡坐の父が居る 飛び出してわかる大きい 大根の芽吹きへ暗示かけ 木村富美子 小林由多香 寺沢みど里 記憶 きしめる 無名のまま壺は生命を抱 百八つ撞いてひととき澄 雑音のラジオよ 八月の んでいる 松原 果 田中

平和

てやる

父の陰

顔を上げると屋根のてっ

ぺんまで見える

ままがよい 西出

楓楽

愛すこし足して洗えば白 寺沢みど里

> 幸子 誰にもやらぬ秋の乳房が になっていく 笠嶋恵美子 さくらんぼ 一つある 森中恵美子 ふたつ大人

春木圭一郎 する えぬまま 純白のチョゴリの傷は癒 純も不純も森は本音で谺

各題2句の秀句次のとおり。 開かれた。特別課題を含む 会館で200名が参加して 大会は9月6日、西宮市民 女から女へつづく祀りご ない んなから 結び目のやさしい縄をお は石担ぐ 母の世代から島のおんな 水軍の子孫で島が出られ 河瀬 中村みつえ 浅雛美智子 村上 静子 芳子

愛を入れる壺は素焼きの ★第49回尼崎市文芸祭大会 困る 7 親戚に詩人がひとり居て 詩人死す秋の鉛筆転がり 武夫

炎をつくる風とひとりを 情炎のすごさ地唄舞の雪 光代 ★「94平和のための大阪の が佳作に入選した。 中正坊・西原艶子の3同人

森中恵美子 高須賀金太氏が朝日新聞社 戦争展」募集の川柳作品で

> 俊路・海老池洋・八田敏 山田里子・西原艶子・石飛

りますか

マ出 版△

古谷ひろ子 良行序文。 刊·A5判104頁) 山田 木北峰著(詩歌文学刊行会 ■川柳句集『恐竜の夢』柿 恐竜で歴史の里が蘇り

り今昔 (303句) で構成 80句) ▽第二部・水たま 円)第一部・水たまり(8 刊・B6判158頁・価千 森中恵美子著(東葛川柳会

川柳の部で川島諷云児・田 して金一封、拝受しました 郎氏夫人)から亡夫供養と ■板垣草丘・山口三千子・ ■神谷唯子さん(神谷凡九 ▽川柳塔碑基金△ ▽ご芳志△

賞を獲得した。 九条をきみ読んだことあ

だきました。 柳社からそれぞれ拠出いた 水煙・上江冽勝子・汐風川

■川柳句集『水たまり今昔』 行目(各地柳壇)「髪洗う → 「…忘れたいために」 あなたを忘れないために」 子きゅうり」▽P9上段2 →「農薬で虫を知らない茄 を知らない茄子きゅうり」 ■8月号=P83下段21行目 初歩教室)「無農薬で虫 ▽訂 正△

作者「野瀬昌子」→「長浜 ソーパズル埋めている」の 補作品)「生かされてジク 段10·11行目(川柳塔賞候 どる事故をさけ」→「六感 に占いたどる…」▽P73中 ■9月号=P27上段6行目 川柳塔)「六歳に占いた

福田多可志・岸桂子・上田 節子・米田幸子・伊藤武・ 榎原公子・坊農柳弘・野口 ない腹探られる…」 られる焼け太り」→「痛く 澄子」▽P8中段18行目 (銀河系) 「痛くない腹深・

10 月各地句会案内

| | 日時と題 | 会場と投句先 | |
|-----------------------|----------------------------------|---|--|
| 尼 崎いくしま | 7日(金)午後1時から 雨・聞く・雑詠(A・B) | サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩 3 分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代 | |
| 堺川柳会 | 8日(土)午前11時から 堺 市 民 川 柳 大 会 | サンスケア堺 本文P110参照 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑 | |
| 川柳塔まつえ | 8日(土)午後1時半から 素 顔 ・ 骨 ・ 逆 転 | 松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松叮紅 | |
| 川 柳 塔 わかやま | 9日(日)午後1時から 裕福・優先・ユーモア | 近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良 | |
| 西宮北口川柳 会 | 10日(月・祝)午後1時から 東・区切る・柔らかい・自由吟 | 西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ | |
| 八尾市民 川柳会 | 10日(月・祝)午後6時から 抱く・酒・内気・終電車 | 八尾文化会館 近鉄八尾駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子 | |
| ほたる 川 柳 同 好 会 | 11日(火)午後1時から 頭 ・ スリル ・ 疑う | 豊中市立螢池公民館 阪急螢池駅西へ150米 〒560 豊中市螢池中町3-10-28 井上直次 | |
| 東大阪市川 柳同 好 会 | 16日(日) 正午から 東大阪市民川柳大会 | 東大阪市立社会教育センター 本文P110参照 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風 | |
| 岸和田川柳会 | 16日(日) 正午から 岸和田市民川柳大会 | 岸和田市民会館 本文P110参照 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村 | |
| 川 柳ねやがわ | 16日(日) 正午から めっきり・湯・拾う・自由吟 | 寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町 9 - 9 高田博泉 | |
| もくせい 川 柳 会 | 18日(火)午後1時から 口・電話・トンネル・自由吟 | 豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊 | |
| 高槻川柳 サークル 卯 の 花 | 20日(木) 正午から 反省・橋・驚く・自由吟 | 高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島諷云児 | |
| 京 都 塔の会 | 21日(金)午後1時から 席 ・ 余 る ・ 注 意 | 京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的 | |
| 南大阪川柳会 | 21日(金)午後6時から 日帰り・味覚・家柄・リース | 玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋 | |
| はびきの市民川柳会 | 23日(日)午後1時から 温い・マイク・育つ・律義 | 羽曳野市立陵南の森公民館 近鉄高鷲駅北へ約5分 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏 | |
| 富 柳 会 | 27日(木)午後1時から 覗く・溜息・ポスト・自由吟 | 富田林中央公民館 近鉄富田林駅南出口徒歩3分 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子 | |

[★]日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡ください。

編 後 記

だけのものではない。 ★校正は、印刷所が原稿ど

ビラ、何万字の出版物にし およそ校正ほど、ワリに合 ワリに合わないと言っても わぬ仕事はない。何百字の のことについて書く。何が ★前号で予告したので校正 一字も誤植がなくて が第一段階である。 あるので、 "原稿校正" を しなければならない。 字・当て字や仮名遣いの誤 原稿自体に誤りがある。 おりに文字を打ってこなか たのを直せばよいという 地名・人名の間違いも

23

した〈とうでん川柳倶楽部〉の五

年間の入選句から「人生句」を選

嘲笑・揶揄する句風から脱皮して

川柳は今、古川柳時代の他人を

てはくれない ントはない」と言ってほめ アタリマエである。だれも 「この印刷物にはミスプリ る。 を付けるのが、第二段階の ゲラ刷りとなって返ってく ★それを印刷所に渡すと、 原稿と照合しながら朱

☆「八合目辺り雲間にちら

★ところが、私の過去の経

らないと思う。図書・雑誌 と比べて校正者の地位は低 新聞社などでも取材・整理 い。これは、今も昔もかわ 事はあまり重視されない。 験によると、校正という仕 出稿や編集の 要である ゆとり(時間的余裕)が必 ほどよい。そのためには、 回数と時間は多ければ多い 者の力量もあるが、校正の て最後に校了あるいは責了 責任校了)となる。校正

締切日厳守である。 お分かりのはずだ。 る読者は何が言いたいかを ★ここまで書けば、賢明な そう、 Œ 特別な感情があるのか。

がある。美しく雄大な山は

人間も川柳も

3

せざるを得なくなる

ワヨセはきまって校正にく 段階で遅延すると、そのシ

いやでも見切り発車を

出版でも、

想夫恋』を読んで

かに

ージのスペースを取ってスタート 平成元年から『週刊文春』に一ペ が、今度は『想夫恋』を出した。 新聞社から刊行した時実新子さん 七年前に句集『有夫恋』を朝日

ズムを大切に、最も大切なのは柱 の中七で、これは厳守されたい。 いないこと、川柳は韻文だからり 柳のような「ふざけた雅号」を用 している。日く、サラリーマン川 めに』で新子の川柳観を明ら

子作品を配したユニークな本。 んでコメントし、序章・終章に新

内容もさることながら、がはじ 思いを述べている。三条 精神を持つようになった一と熱 自分を客観して笑いのめす強者の

校正で、初校・再校とあっ とも、日本人の血の中には これは、小さい時に東京に きると何となくほっとする。 少なからず富士山に対する していたせいなのか、それ 住んでいて、富士山を遠望 が、少しでも見ることがで くっきりと見ることは稀だ 幹線に乗る度に子どもみた と見えた旅 (み)」一新 いに富士山を探す。 全容を 士など全国いたる所に富士 軽富士・伯耆富士・讃岐富 り富士という(紫水)」津 を見かけないように思う。 は、最近あまり富士山の句 句にしておられるが、 ☆「富士に似た山をやっぱ 毎日仰ぐ富士山をしばしば が載っている。弧秀さんは と暮せる幸思う」という句 美弧秀さんの「晩年を富士 ☆五月号に、富士宮市の渥 他に 保つことができれば最高 包みこんで、なお、あたた ず、近づけば、醜いもの、 ろう。何事によらず、外面 かく、美しく、雄大な姿を ☆醜いもの、 くさんある。 危険なもの、 の美しさ、優しさに似合わ れば厳しく、苦しいものだ から見ると美しい山も、 みな富士と名付ける。 厳しいものを 怖いものがた

| | 川柳塔・水煙抄投句用紙 | 種 目 「 |
|--------------------|-------------|-------------|
| © × √1 | | 」 発表(12月号) |
| ◎8句を楷書で正確にお書きください。 | | 地名・りとりせん・ |
| 書きください。 | | 雅号 |
| | | |

川柳塔・水煙抄欄への投句について

1 上前納の定期購読者)に限ります。 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄への投句は誌友(誌代半年分以

3 2 投句用紙はゆっくり引っ張るとはずれますから、ハサミまたはカッ ターナイフで、きりとりせん。のミシン目を切ってください。 社事務所へお送りください。 両欄ともこの投句用紙を使って8句を書き、毎月15日までに川柳塔

◎送付先 〒545 大阪市阿倍野区三明町二―一〇―一六 ウエムラ第二ビル二〇二号室

塔 社

][]

柳

作品募集

銀水川 茴 課題吟 步 香 河煙 教 (3句) 0 室 花 系 抄 塔 月号発 派 3 8 か 3 8 Ш む手 句 句 句 句 表 八河黑西 10 3 句 木桜佐木内川尾 村井木 千天紫 締 岡美 あ千鳳 切 きる秀笙 房 代笑香栞 扣 選 選 選 選 選 選

「 松 」「脱 ぐ」 課題吟 1 「テレビ」 月号 初歩教室 「 鏡 」

川柳塔欄への投句は同人、水煙 抄欄は誌友 (誌代半年分前納者)

茴香の花欄は女性に限ります。

夜市川柳嘉集

第5回「勘」中田たつお選 ハガキに3句 10月末締切 投句先 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑方 堺川柳会

11月の常任理事会は11月4日金

₹ 545 定 一坐 11 成 年年 振替○○九八○-五-三三三六八番 阪市阿倍野区 分分 ウエム 年 七四 藤西 JII 百 ムラ第2ビル202号室 原 童 心 社 級 原 童 心 社 九千 円 (以公五十六九 月 百円円 送 料 送料 84 H 同 社

二賞表彰 本社10月句会

投会席 会 日 句 費 題 題 場 時 句 10 交通便・略図は表紙裏をご参照くださ 共夕 怠 さばさば ブ H 市 0 題 Ser. 40 4 立 H ·川柳塔賞表彰 3 ル cm Ŏ 円 H 19 発表 野 80円切手5 市民学習センタ cm 橘黑玉川桜 葉に 題 2 高川置島 # 枚 句 1 句 以 同封のこと 薫 紫 重 諷 + で書 兒 風香人

本社11月句会 7日(月)

選 選 選 選

「マニア」「しつこい」「掃 く」 「世紀末」「 畳

NHK川柳作品募集

課題「眠る」 森中恵美子 選

ハガキに3句 10月10日締切

投句先

〒540-01 NHK大阪放送局 「文芸部」川柳係

発表 10月22日(土)午前11時5分から ラジオ第1放送

西日本文字放送作品募集

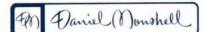
課題「反対 森中恵美子 選

ハガキに3句 10月15日締切

投句先

〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20 大手前ウサミビル3階 西日本文字放送 川柳係





泣いて笑って…… 夜を通り過ぎたら また陽がのぼっていた 男のロマン



オーエスケーの 服 紬

大阪市中央区南新町1-4-7 (06) 9 4 1 - 8 0 1 8

- ●川柳・俳句・短歌集 ●画集・写真集・絵本 社史・小説・エッセー 故人を偲ぶ追悼誌 創業・喜寿を祝う記念誌 郷土史 創業・喜寿を祝う記念誌 郷土史 | ② (製作専門) | ※ヤケブランニング MYAKE planning | で557 大阪市西成区千本南1-12-8 電話 06-659-5514代 FAX 06-652-2928 | ジェイ出版電話 06-658-8741代 | 電話 06-658-8741代 | では 05703-10